宮保遺跡群

1991

石川県立埋蔵文化財センター

宮保遺跡群

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は石川県松任市宮保町に所在する宮保光明寺遺跡および宮保館跡の調査報告書であり、宮保遺跡群として合冊したものである。

2　発掘調査は石川県農林水産部耕地整備課施行の県営圃場整備事業（宮保地区宮保工区）に起因し、同課の依頼をうけた石川県立埋蔵文化財センターが石川県松任土地改良事務所と協議して実施した。調査に係る費用は同課および文化庁の負担による。

3　調査の実施にあたっては松任市宮保町・法仏町の有志の協力を得た。

4　発掘調査および本書の作成にあたって当センターの職員のほかに、下記の各位より、ご教示・ご協力をいただいた。芳名を記して深甚の謝意を表したい。

宮保光明寺遺跡：石田文一　大河内勉　金山顕光　戸澗幹夫　原　広志　藤田邦雄　松尾宣方　馬渕和雄

5　写真図版の遺物に付した番号は、挿図番号および遺物番号である。

6　本書の執筆・編集は、第1編宮保光明寺遺跡を石川県立埋蔵文化財センター調査第一課主査三浦純夫が、第2編宮保館跡を同主事北野博司が担当した。なお、両遺跡の環境については第1編第2章にあわせて収載している。

7　調査によって得られた資料は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

第１編　宮保光明寺遺跡

宮保光明寺遺跡

目　　次

頁

第1章　序　説 …… 1

第2章　遺跡の立地と環境 …… 3

第1節　立地と地理的環境 …… 3

第2節　歴史的環境 …… 5

第3章　遺構と遺物 …… 7

第1節　概　要 …… 7

第2節　各　説 …… 10

1　土　坑 …… 10

2　　溝 …… 24

3　木曽街道側溝 …… 28

4　落ち込み …… 28

5　ピット・包含層 …… 28

第4章　考　察 …… 30

第1節　遺跡について …… 30

第2節　中世後期における生活用具の二、三について …… 30

1　俎板について …… 31

2　石製行火について …… 36

図　版　目　次

図版第１　空中写真　宮保光明寺遺跡と宮保館跡（昭和44年10月14日撮影　縮尺10,000分の１）

図版第２　遺　跡

(1)　遺跡遠景（北から）　(2)　遺跡遠景（南から）

図版第３　遺　跡

(1)　調査区全景（西から）　(2)　調査区全景（東から）

図版第４　遺　構

(1)　第１区全景（東から）　(2)　第１号～第３号土坑・第５号溝（東から）

図版第５　遺　構

(1)　第１号土坑　(2)　第２号土坑

図版第６　遺　構

(1)　第２号土坑内の木製品（俎板と曲物底板）　(2)　第２号土坑

図版第７　遺　構

(1)　第１号溝（東から）　(2)　第２号溝（東から）

図版第８　遺　構

(1)　第４号溝（西から）　(2)　木曽街道側溝（南から）

図版第９　遺　物

第１号土坑出土遺物

図版第10　遺　物

第２号土坑出土遺物(1)

図版第11　遺　物

第２号土坑出土遺物(2)

図版第12　遺　物

第２号土坑出土遺物(3)

図版第13　遺　物

第２号土坑出土遺物(4)

図版第14　遺　物

溝・包含層出土遺物

挿　図　目　次

頁

第１図　調査区位置図（縮尺5,000分の１）…… 2
第２図　松任市の位置（縮尺3,000,000分の１）…… 3
第３図　宮保光明寺遺跡と周辺の遺跡（縮尺25,000分の１）…… 4
第４図　宮保光明寺遺跡周辺の地形（縮尺40,000分の１）…… 6
第５図　調査区と周辺の地形（縮尺2,000分の１）…… 8
第６図　調査区全体図（縮尺200分の１）…… 9
第７図　遺構実測図(1)（縮尺60分の１）…… 11・12
第８図　遺構実測図(2)（縮尺40分の１）…… 13
第９図　遺構実測図(3)（縮尺80分の１）…… 14
第10図　第１号土坑出土遺物実測図(1)（縮尺３分の１）…… 15
第11図　第１号土坑出土遺物実測図(2)（縮尺４分の１）…… 15
第12図　第２号土坑出土遺物実測図(1)（縮尺３分の１）…… 16
第13図　第２号土坑出土遺物実測図(2)（縮尺３分の１）…… 17
第14図　第２号土坑出土遺物実測図(3)（縮尺３分の１）…… 18
第15図　第２号土坑出土遺物実測図(4)（縮尺３分の１）…… 19
第16図　第２号土坑出土遺物実測図(5)（縮尺４分の１）…… 20
第17図　第２号土坑出土遺物実測図(6)（縮尺３分の１）…… 21
第18図　第２号土坑出土遺物実測図(7)（縮尺４分の１）…… 22
第19図　第２号土坑出土遺物実測図(8)（縮尺３分の１）…… 23
第20図　溝・包含層出土遺物実測図(1)（縮尺３分の１）…… 25
第21図　溝・包含層出土遺物実測図(2)（縮尺３分の１・４分の１）…… 27
第22図　遺跡出土の俎板実測図（縮尺４分の１）…… 32
第23図　絵画資料にみる俎板（模式図）…… 34
第24図　石製・土製行火分布図（中世～近世初頭）…… 37

表　目　次

頁

第１表　周辺遺跡地名表 …… 5
第２表　第２号土坑出土遺物 …… 31

第1章　序　　説

松任市は全国屈指の早場米地帯であり、農業経営の先進地としても知られる。この農業の基盤となるのが手取川扇状地である。この扇状地の開発には長い年月と多くの労力が費やされている。

本遺跡の所在する宮保地区で耕地整理が初めて実施されたのは明治時代である。明治39年に耕地整理発起人の選定が行われ、その年の秋には法仏地内で工事が開始されている。しかし、宮保全域で本格的な工事が始められたのは、明治44年からである。それから15年の歳月をかけて、大正14年6月に工事が終了した。完成した圃場は一筆が東西8間、南北25間の広さである。

この第1次整理に続き、第2次整理が松任平野で始まったのは昭和50年代に入ってからであった。宮保地区においても昭和58年度より開始され、一筆30アールの大型圃場への転換をめざしている。

本遺跡を包括する昭和61年度の施工予定区域については、昭和59年12月4日から同12月7日にかけて分布調査を実施した。その結果第1図に示したように、A・B・Cの三ヶ所で遺物包含層とみられる広がりを確認した。

発掘調査は昭和61年8月7日から同年10月27日にかけて行った。前記三ヶ所の1,200㎡を対象としたが、法仏町南側と（第1図B）と西側（同C）の二ヶ所についてはさらに詳細な分布調査を行った結果、包含層の存在しないことが判明した。最終的には宮保町東側（同A）の「コウミョウジ」と呼ばれる地点を対象とした。面積は380㎡である。

調査は、まず法仏地内二ヶ所の詳細分布調査を行ったあと、9月に入って宮保地内の調査区に着手した。9月中は晴天に恵まれ順調に調査が進む。第1区で弥生時代の包含層を確認し、調査範囲をやや広げる。第1区ではこの他、大溝が検出され、集落を画す溝らしいことを窺わせる。9月下旬には第1号～第3号土坑の発掘にかかる。第2号土坑は袋状を呈しており、上層より、越前焼が出土し、その下からも続々と遺物が出土する。

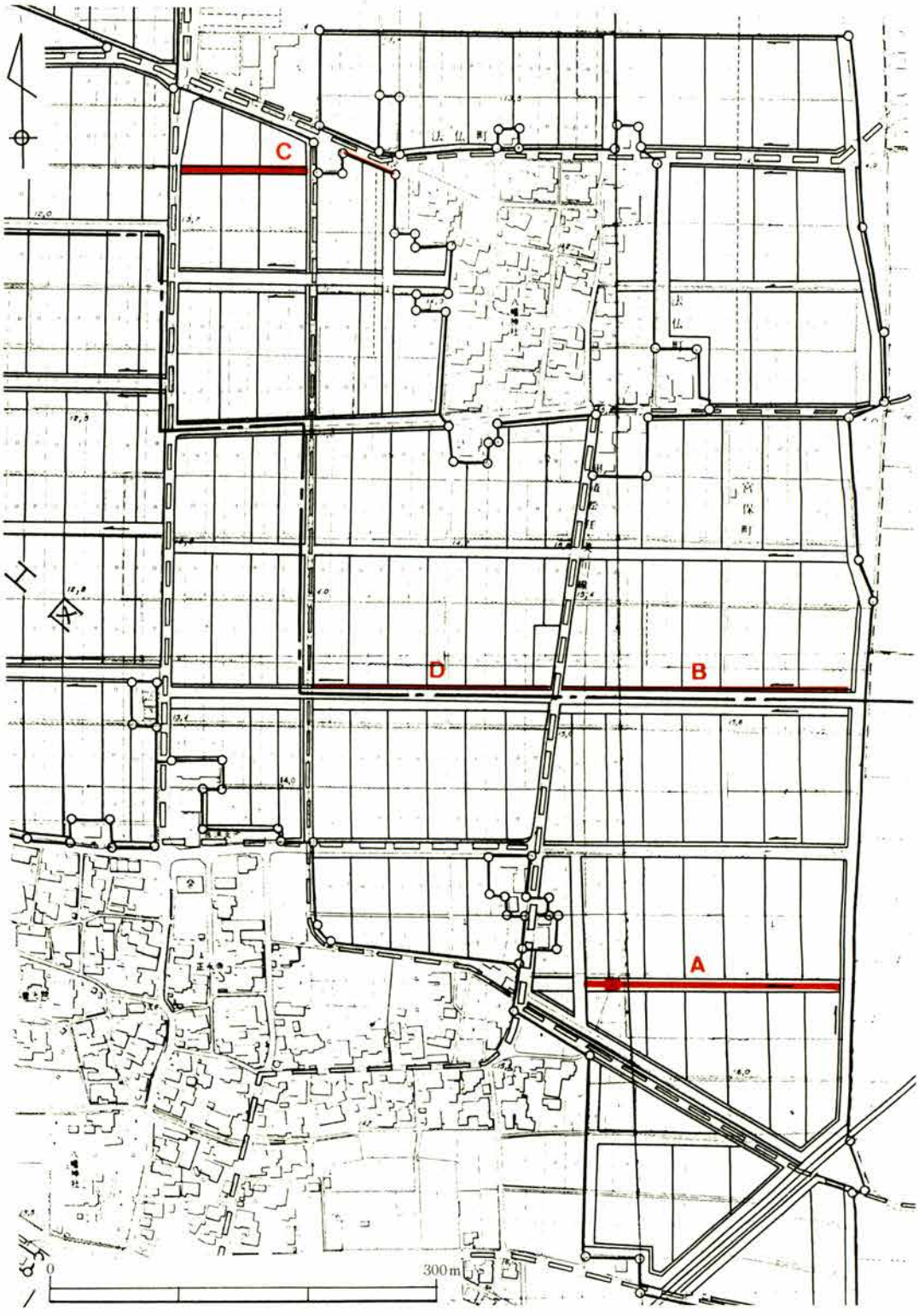
当初の予定の調査は9月中に終了したが、昭和62年度施工予定区域の仮排水路工事（第1図D）で遺物が出土したため10月23日に現地で松任土地改良事務所と協議を行い、応急調査を実施した。

遺物整理は、洗浄から遺物実測図浄書までの大部分と遺構図の一部浄書を社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。木製品の実測・浄書は藤重啓（石川県立埋蔵文化財センター調査員）が、遺構図の浄書は藤重と三浦が担当した。

調査関係者は次の通りである。

調査担当者　石川県立埋蔵文化財センター主査小嶋芳孝、同主事三浦純夫

調査協力者　東川嘉孝　円角千代子　中田弘子　山本千代子（以上宮保町）　北野　広（法仏町）
小賀清隆　番匠信夫（以上金沢大学学生）



1/5,000

第1図　調査区位置図

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　立地と地理的環境

宮保光明寺遺跡は石川県松任市宮保町に所在する。小字は「コウミョウジ」である。第２編で報告する宮保館跡は南に接して存在する。

松任市は、南北に長い石川県の中央部よりやや南に位置し、県下最長の川、手取川の北に広がる平野部の中心を占める。宮保町は市域の西南にあり、広い圃場を背景にした兼業農家が多い。昭和29年に松任町に編入される以前は、石川郡宮保村に属しており、村役場がおかれていた。

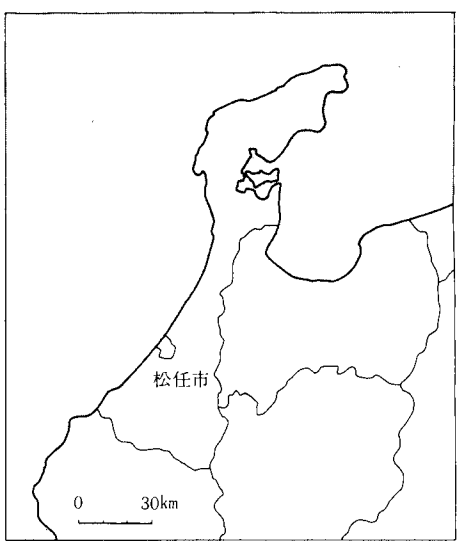
本遺跡は、手取川によって、形成された手取川扇状地の扇端部に位置し、標高約15mを測る。その水路（みずみち）を七度（ななたび）変えたといわれる手取川も、扇状地を潤す七ヶ用水（しちかようすい）にわずかにその跡を窺うのみである。本遺跡の北には、その用水の一つである山島用水の支流千々川が流れている。

本遺跡周辺の地形は明治42年作製の地図によって旧状を知ることができる。これをみると、東南から、西北方向に走る水路群を確認できる。宮保集落の南から小川新集落の南に走る河原川や宮保集落の北から小川集落の南を流れる内川は大きな流路として描かれている。宮保地区では明治44年に第一次耕地整理が始まるが、それ以前は荒地も多く、「上河原」、「八河原」といった小字名は上記の河川による氾濫の産物であろう。

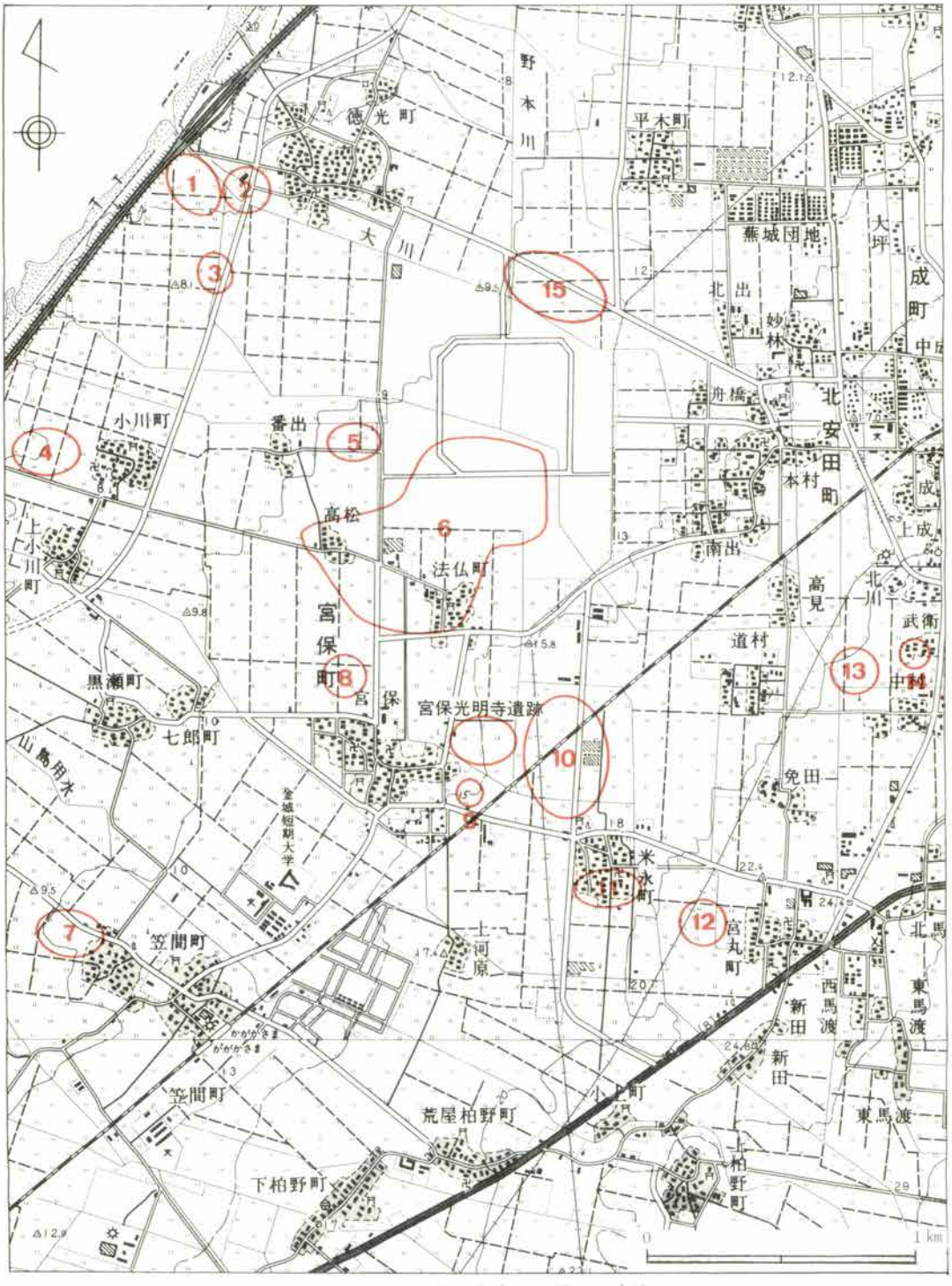
第２節　歴史的環境

本遺跡周辺において定住化が明確になるのは弥生時代後期である。千代野ニュータウンの建設に先立って調査された法仏遺跡は弥生時代後期の大規模な集落跡である。このほか、本遺跡や宮保鶴丸遺跡でも弥生土器を確認しており、法仏遺跡周辺の小集落と考えられる。律令期に入るとやはり法仏遺跡が中核的集落としてその規模を誇っている。北安田北遺跡と名づけられた同遺跡の北部地区を合わせると、約200基の建物跡が検出されている。

中世に入ると宮保館跡があらわれる。13世紀と15世紀に営まれた、堀をもつ方形の館と考えられている。中世前期の宮保については、浅香年木氏が、白山本宮の神主上道氏が、開発領を求めて在地領主化した地域ではないかと推論している。宮保館跡をめぐる歴史的状況については、第２編において詳述されるが、中世



第２図　松任市の位置　1/3,000,000



第3図　宮保光明寺遺跡と周辺の遺跡　　1/25,000

第１表　周辺遺跡地名表

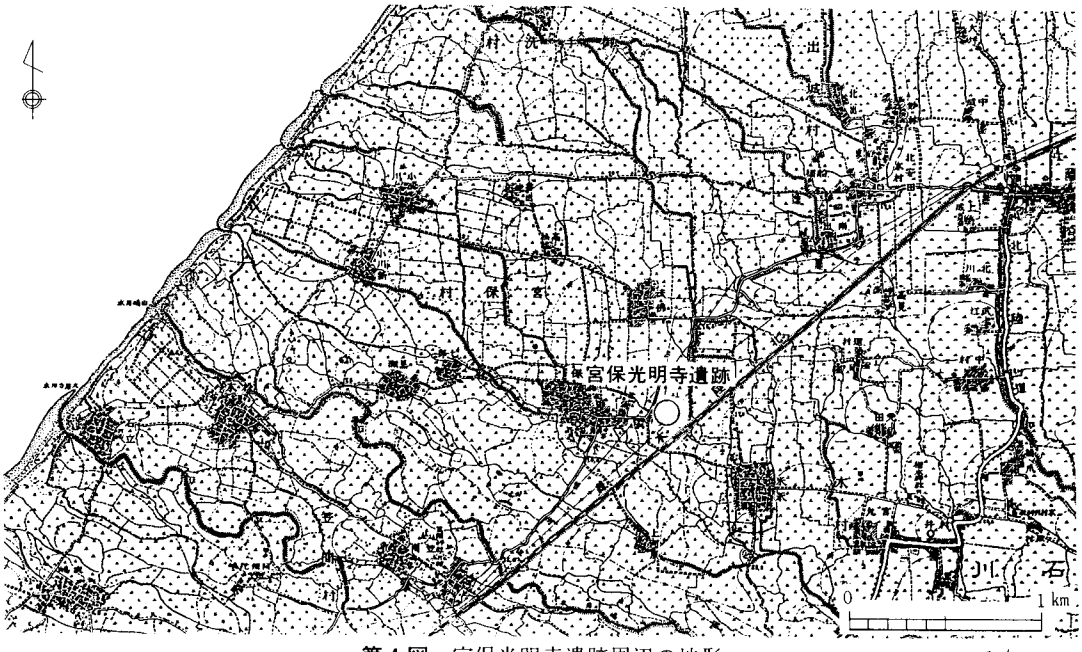
番号	遺跡名	所在地	現況	種別	時代	備考
1	徳光ヨノキヤマ遺跡	松任市　徳光町	水田	集落	弥生・中世	県教委調査
2	徳光遺跡	〃　〃	〃	包含地	不詳	
3	徳光聖興寺遺跡	〃　〃	〃	集落	中世	県立埋文センター調査
4	小川遺跡	〃　小川町	〃	〃	〃	〃
5	番出・高松遺跡	〃　宮保町	〃	包含地	〃	
6	法仏遺跡	〃　法仏町	〃	集落	弥生～中世	県立埋文センター調査
7	賢徳寺遺跡	〃　笠間町	〃	〃	中世	〃
8	宮保鶴丸遺跡	〃　宮保町	〃	〃	〃	〃
9	宮保館跡	〃　〃	〃	館跡	奈良～中世	〃
10	北出遺跡	〃　米永町	〃	包含地	奈良・平安	
11	古屋敷遺跡	〃　〃	〃	集落	中世	県立埋文センター調査
12	宮丸遺跡	〃　宮丸町	〃	〃	平安	〃
13	村井備中守遺跡	〃　村井町	〃	〃	縄文～中世	〃
14	中村遺跡	〃　〃	〃	〃	平安	松任市教委調査
15	北安田北遺跡	〃　北安田町	〃	〃	縄文～中世	〃

前期における開発、定住化の実体を把握したことは大きな成果である。このほか、周囲をみると、徳光ヨノキヤマ、徳光聖興寺、小川、賢徳寺、村井備中守、北安田北などの中世遺跡が知られ、河川の氾濫を被りながら、散発的ではあるが扇状地の開発が進められた状況をみることができる。

小川遺跡は15世紀～16世紀に中心をおく集落である。分布調査以前は、小白山社跡と伝えられる小丘があるばかりであったが、県営圃場整備事業に先立って大規模な集落が確認された。小川は、平安後期に「小川津」として初めてみられ、その後も『源平盛衰記』や『遊行上人縁起絵』、『白山之記』などにみえる要地である。発掘の成果と、湊や小白山社との関わりが注目される。

本遺跡は上述の小川遺跡と時期的に並行する。遺跡の所在地である「宮保」の名が初めてみえるのは鎌倉時代である。嘉禄２年（1226）におこった白山宮の神輿動座事件において罷免された上道氏盛が「宮保神主」を名のっていた記録が初見である。氏盛は「宮保入道」を名のる在地領主でもあったという。室町時代に入ると、永享２年（1430）の記録によって京都南禅寺領であったことがわかる。さらに天文５年（1536）の記録には京都西芳寺領としてみえる。

本遺跡に関わる文献のひとつ『北越太平記』には、中世宮保に南禅寺の末寺光明寺があり、天正５年、上杉謙信が松任城攻略の際これを焼き払ったと記される。明治初年に灯明寺（光明寺）跡と伝える場所より「朱塊」や「仏具」の一部が出土し、明治末期の耕地整理の際、多くの「灯籠」や「塔の破片」が発見されたとも言われる。



第4図　宮保光明寺遺跡周辺の地形　1/40,000

最後に本遺跡周辺の小字名をあげておこう。遺跡の南には「ボンノシロ」、北には「トビイシ」、「タカミドウ」、北西には「オタチ」、「ツルマル」などが知られ、これらには中世の伝承が付加されている。伝承を遺跡と結びつけることは容易ではないが、それが土地に刻まれたものとして存在することに留意しておきたい。

参考文献（五十音順）

浅香年木『古代地域史の研究』　法政大学出版局　1978　東京。

浅香年木・田川捷一他『角川日本地名大辞典』17　石川県　角川書店　1981　東京。

柏野加治他編『宮保の歴史』　松任市宮保公民館　1971　松任。

第3章　遺構と遺物

第1節　概　要（第5図・第6図、図版第3）

宮保光明寺遺跡は松任市宮保町の東側に位置する。現況は水田で、分布調査の結果、東西約300m、南北約250mの広がりをもつことが判明している。標高は約15mを測る。調査区は東西方向に設けられ、その西端部では『三州地理志稿』に「寿永の昔、木曽義仲行軍の時この道を押されし故、今に木曽街道と呼べり」と記される、いわゆる木曽街道が南北に貫通している。この街道は、松本、小川、徳光などを通る海岸寄りの幹道に対して、笠間から宮保、北安田を経て旧松任町域へ入る内陸部の幹道であった。

調査区は幅2m、長さ190mで、20mの長さを一区画とし、西側より第1区、第2区と呼称し、第10区まで設定した。第1区については、木曽街道の側溝が検出され、方向を確認するため南北に若干拡張した。

つぎに層序と遺構の分布について述べよう。

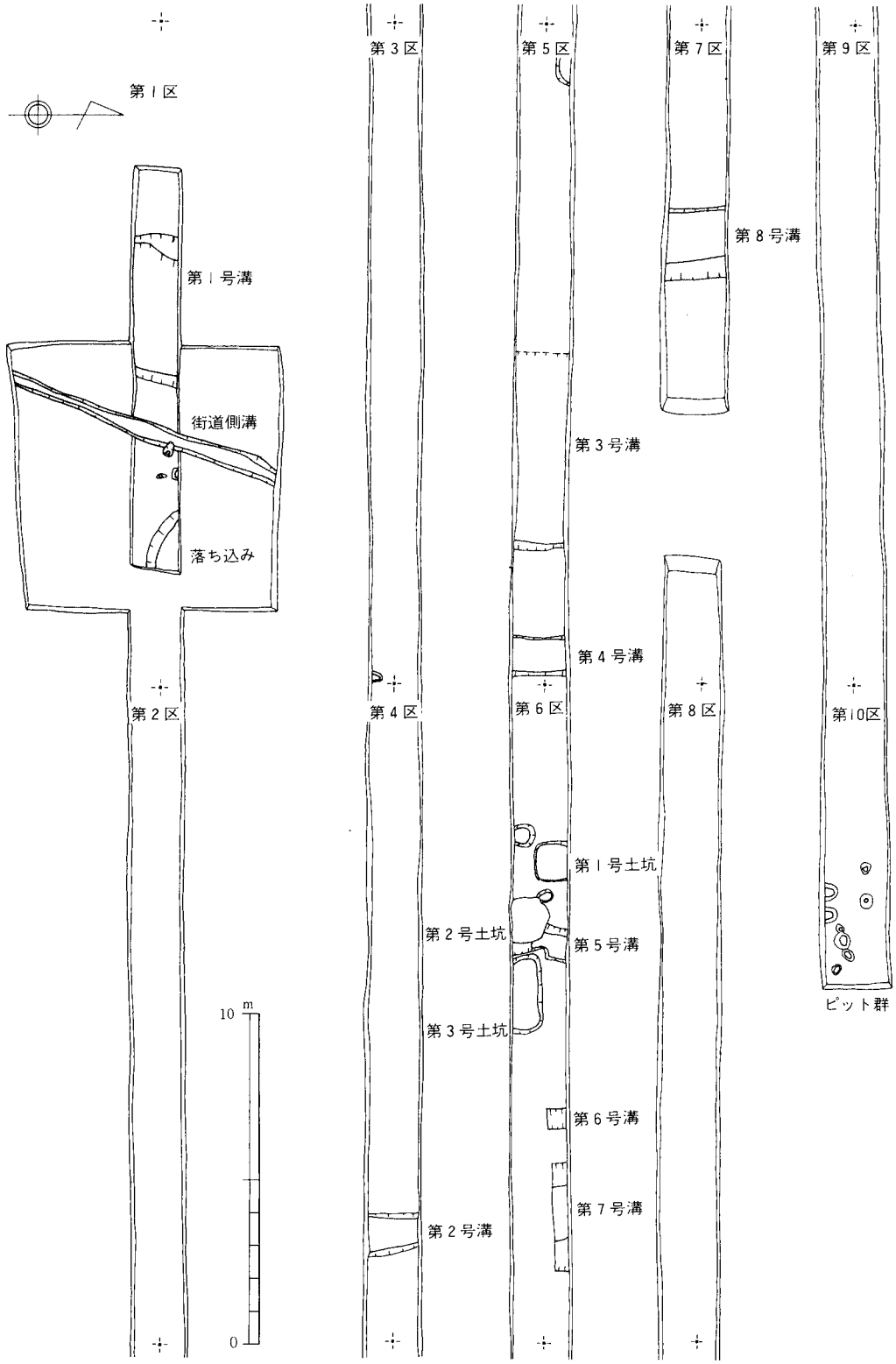
層　序　第1区では耕土、床土あわせて25cm～35cmの厚さがあり、この下に包含層および遺構面がある。ここでは、弥生時代の包含層（第5層）が、長さ5.5m、最も厚い所で35cmの厚さをもって存在するが、近代以降の攪乱によって東側は切られている。遺構が多く見られる第5区から第7区では、耕土、床土の下に黄褐色土層が存在する。この下が生活面であり、遺構掘り込み面となっている。水田面から生活面までは40～50cmを測る。

なお、第5区で長さ約8m、厚さ10cmにわたって弥生時代後期の包含層が認められた。

地山は基本的に黄色土層であるが、第6区の第7号溝の下では礫層となり、第7区では黄褐色砂層となっている。

遺　構　全容がうかがえるものは少ないが、土坑3基、溝7条、落ちこみ、ピット、そして街道の側溝を検出した。遺構の分布は二ヶ所に大別される。一つは第1区で、もう一つは第5区・第6区である。第1区では中世の大構と近世・近代の街道の側溝、そして弥生土器を包含する落ちこみ、ピットを検出した。第4区の東側から第5区にかけては、大小の溝が南北に走行し、第6区では3基の土坑と1条の溝が集中している。その東には大小2条の溝がやはり東西に走っている。第10区の端にはピット群をみることができる。

第5図　調査区と周辺の地形　　1/2,000



第６図　調査区全体図　　1/200

第2節　各　説

1　土　坑

第1号土坑（第7図、図版第4・第5）

全容は知りがたいが、隅円方形ないし長方形の平面形をもつと思われる。長さは東西方向に123cm、南北方向に100cm、深さ30cmを測る。出土遺物には加賀焼の甕、越前焼の壺・擂鉢、土師質土器、粉挽臼がある。

遺　物（第10図・第11図、図版第9）

第10図は越前焼の小壺胴部である。復元胴径14.8cmを測る。内面は二次的に熱を受けており、剝落が著しい。第11図は粉挽臼の下臼である。上径31.4cm、下径30cm、高さ11cm、重さ12.38kgを測る。芯棒孔の径は3cmである。目は八分画につくられ、主溝、副溝ともやや弧状を呈する。周縁部の目がかなり摩耗しており、使用頻度の高さが窺える。側面および上面の縁部が顕著に焼けており、上臼と組み合わされた状態で火をうけたと思われる。当初おかれていた場所で熱をうけたものと考えてよい。下面はノミ痕がよくのこる。

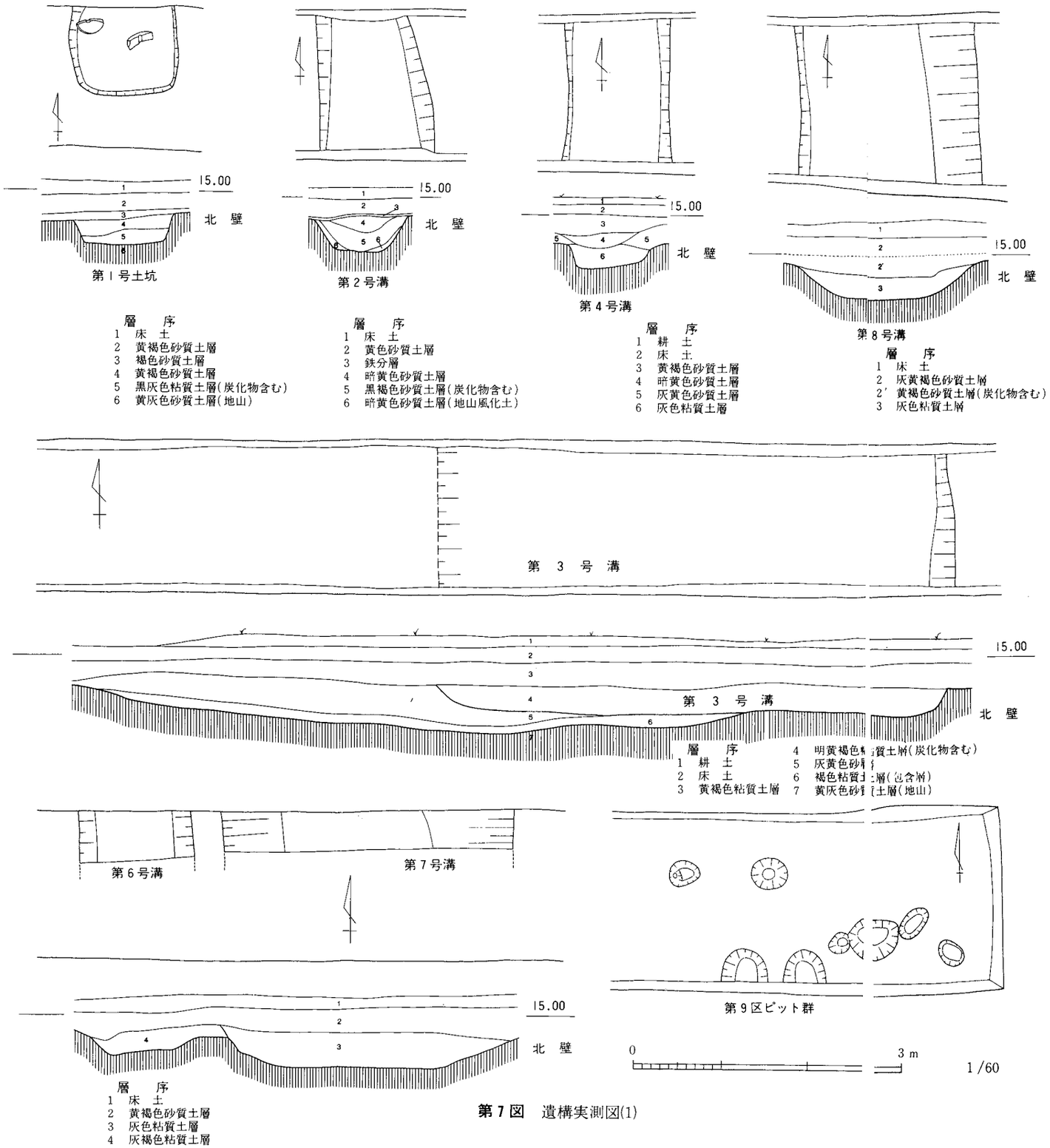
第2号土坑（第8図、図版第4・第5）

隅円方形の土坑である。断面形は、上部がせまい袋状を呈する。東西方向に135cm、南北に120cm、深さ100cmを測り、東側の一部が約40cm広くなっている。

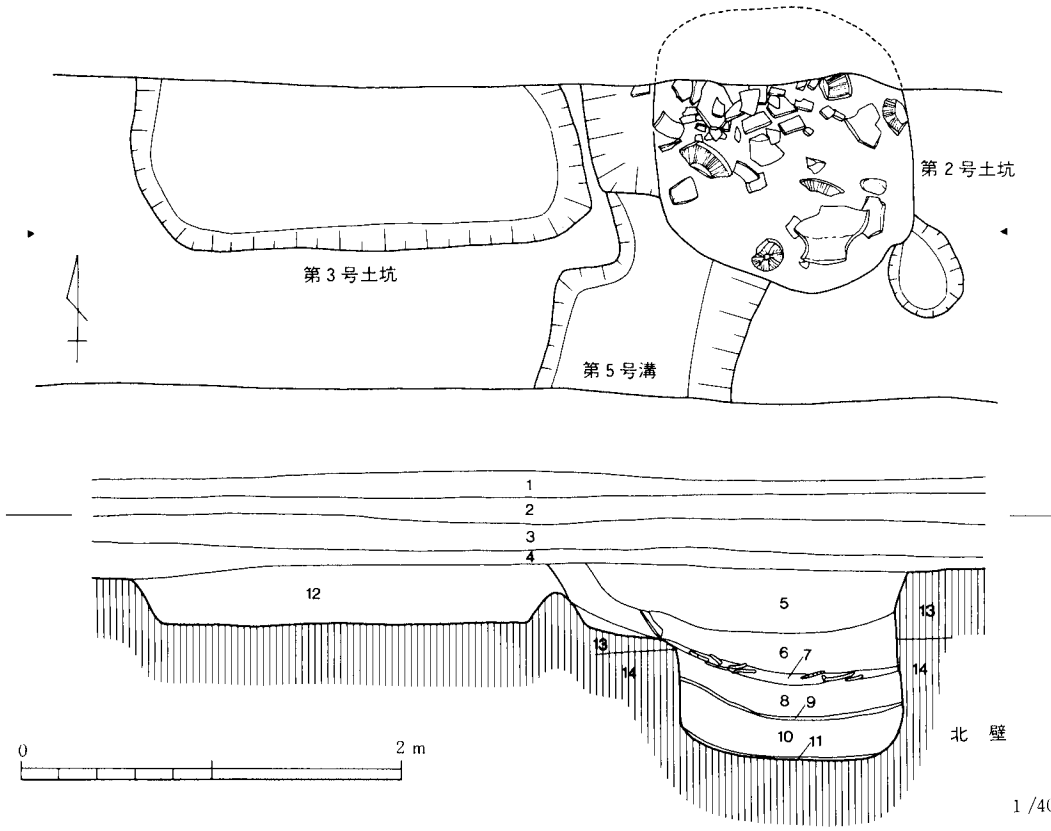
覆土は7層より構成される。第8図で示した第7層・第9層・第11層は炭化物層である。下層の第11層を第1炭化物層、第9層を第2炭化物層、第7層を第3炭化物層と呼ぶ。第3炭化物層には越前焼の壺・甕・擂鉢をはじめ、茶臼、行火、硯などが包含されており、第2炭化物層からは俎板、曲物底板、杓子、栓などの木製品が出土している。

土　層　最上層（第8図第5層）は黄褐色粘質土層で厚さ33cm、第6層は22cm、第7層は5cm、第8層は15cm、第9層は3cm、第10層は20cm、第11層（最下層）は3cmを測る。地山は2層に分けられ、上部は灰黄色砂層、下部は拳大の石よりなる礫層である。

本土坑から出土した遺物を整理しておこう。陶器では瀬戸・美濃焼の皿、越前焼の壺・甕・擂鉢、石製品には粉挽臼、茶臼、硯、行火、鉄製品に小札、刀子、釘、木製品では俎板、折敷、曲物、杓子、栓、繊維製品では縄がある。これらの多くは第2・第3炭化物層の中に包含されていた。また、二次的に熱をうけたものが多くみられる。このことより、本土坑では生活用具が棄てられて燃やされたものとみられる。三層の炭化物層は燃やされた回数を示すものであろう。第1炭化物層に遺物はない。第7層に陶器や石製品、第9層に木製品があるのは、住居内に置いてあった場所ごとに投棄されたものとみられる。第9層は台所の木製品であり、第7層は、それ以外の場所にあったものとみられる。


15.00
北　壁
第１号土坑
層　序
1　床　土
2　黄褐色砂質土層
3　褐色砂質土層
4　黄褐色砂質土層
5　黒灰色粘質土層(炭化物含む)
6　黄灰色砂質土層(地山)
第２号溝
層　序
1　床　土
2　黄色砂質土層
3　鉄分層
4　暗黄色砂質土層
5　黒褐色砂質土層(炭化物含む)
6　暗黄色砂質土層(地山風化土)
第４号溝
層　序
1　耕　土
2　床　土
3　黄褐色砂質土層
4　暗黄色砂質土層
5　灰黄色砂質土層
6　灰色粘質土層
第８号溝
層　序
1　床　土
2　灰黄褐色砂質土層
2'　黄褐色砂質土層(炭化物含む)
3　灰色粘質土層
第３号溝
層　序
1　耕　土
2　床　土
3　黄褐色粘質土層
第６号溝
第７号溝
第９区ピット群
0
3 m
1/60

第７図　遺構実測図(1)



第８図　遺構実測図(2)

遺　物

瀬戸・美濃焼（第12図、図版第10・第11）

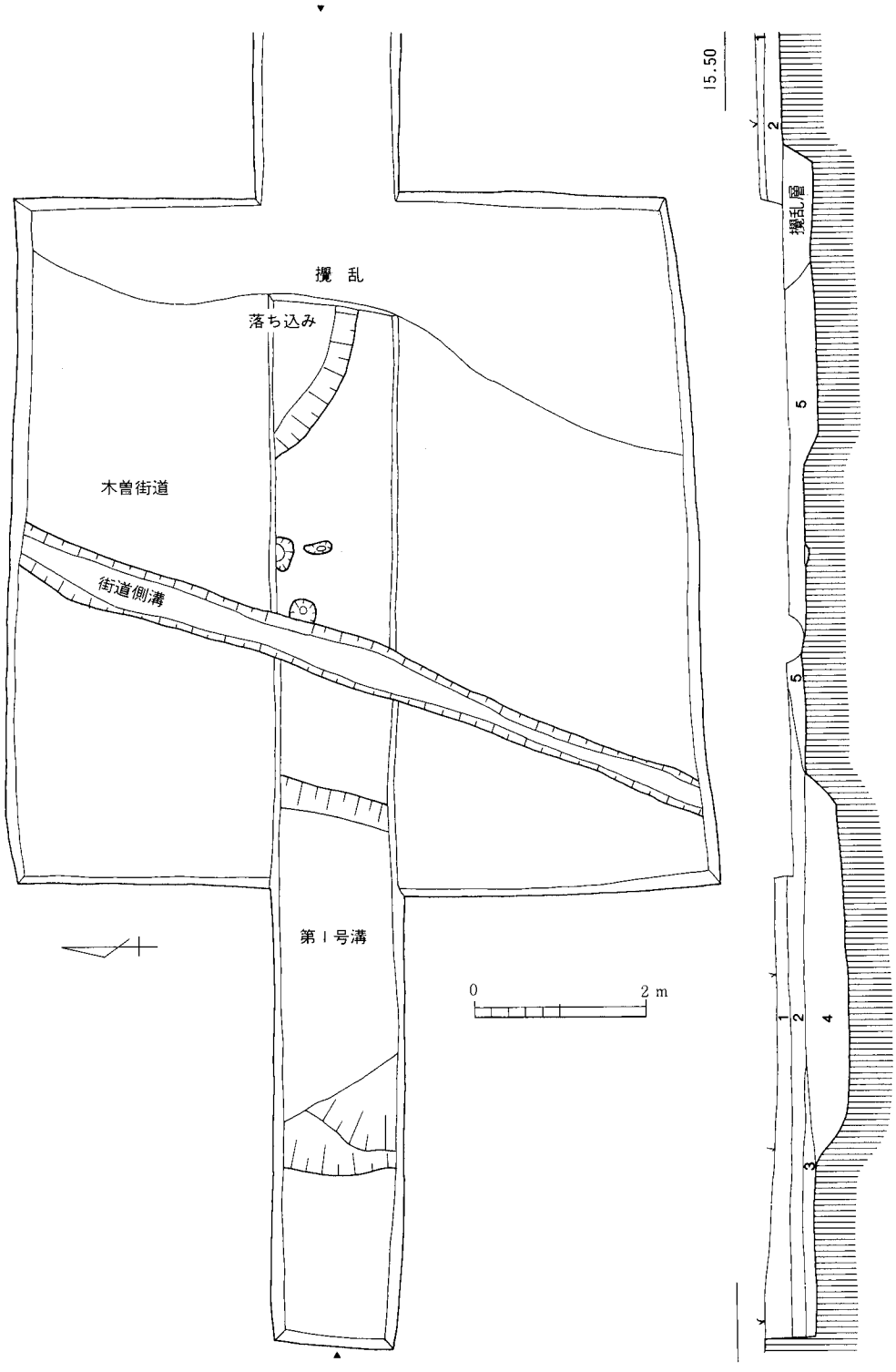
第12図１は丸皿である。口径10.6cm、底径6.4cm、器高2.9cmを測る、内外面ともに施釉され、釉は明るい黄緑色を呈する。藤澤良祐氏による大窯編年[(1)]の第Ⅱ期に包括されるとみられ、16世紀中葉の年代を与えておきたい。

越前焼（第12～第15図、図版第10・第11）

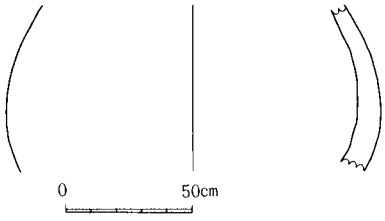
第12図２は壺である。復元によってほぼ完形品となった。口径17.6cm、底径16cm、胴部最大径43.5cm、器高51cmを測る。外面は平滑で、内面には指オサエのあとがみえる。頸部は短く、肩は張らない。胴部最大径はやや上位にある。内外面ともに赤褐色を呈する。時期は、楢崎彰一・田中照久氏による編年[(2)]の第Ⅴ期にあてられることより、16世紀前半代の所産と考えたい。

第13図は甕である。口径40.7cm、現存高24cm、胴部最大径42.8cmを測る。外面は二次的な熱をうけている。時期は、楢崎・田中編年のⅣ期前半と考えられ、15世紀前半代の所産とみられる。

第14図・第15図は擂鉢である。第14図１は口径31.9cm、底径15cm、器高12.2cmを測る。内面の櫛歯は3.2cmの幅に12条施されている。使用痕は著しくないが、内底面より４cmの高さまでがよ



第 9 図　遺構実測図(3)　　1 /80



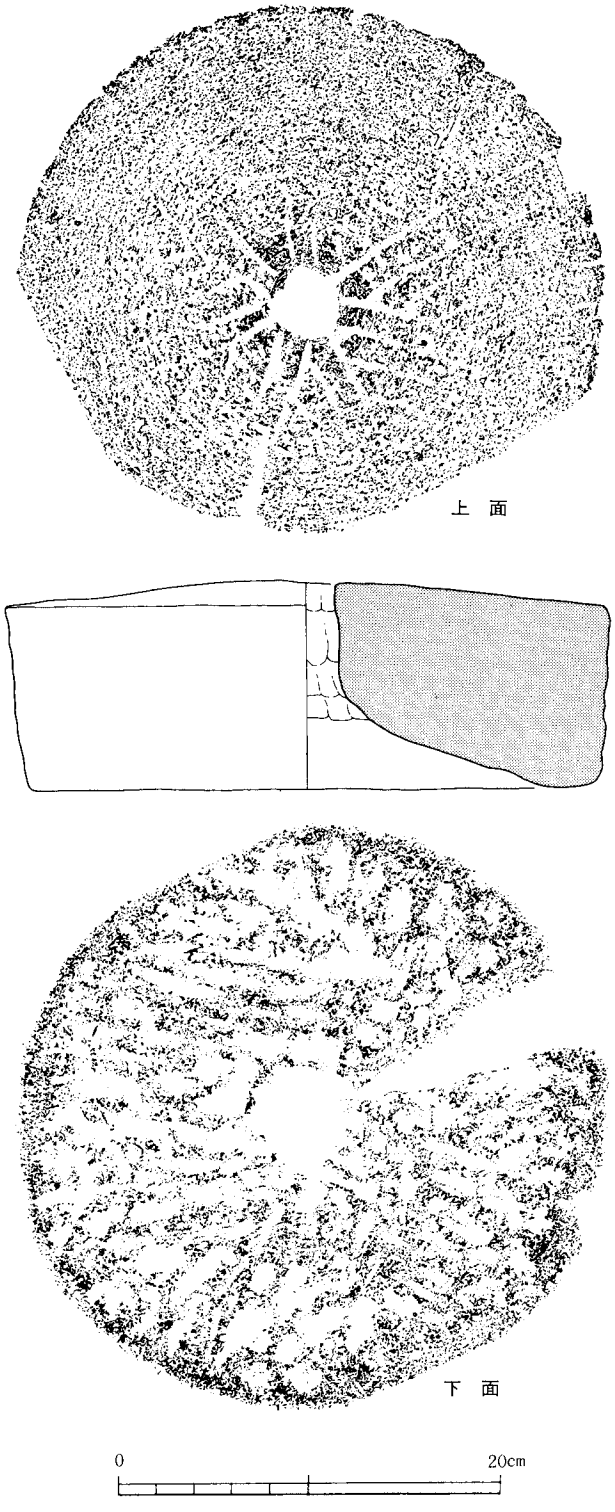
第10図　第１号土坑出土遺物実測図(1)　1/3

りすり減っている。同図２は割れ口に漆状の接合剤が見られる。口径31.4cmを測る。第15図１は小片である。櫛歯は2.9cmの幅に10条施される。同図２は復元口径31.6cmを測る。櫛歯は2.5cmの幅に８条施される。内外面ともに黄橙色を呈する。これら４点の口縁端部をみると、若干の形態差を認めるが、いずれも小野正敏氏による擂鉢分類[3]のⅥ群に包括されると思われ、16世紀の第２・第３四半期の中に位置づけておきたい。

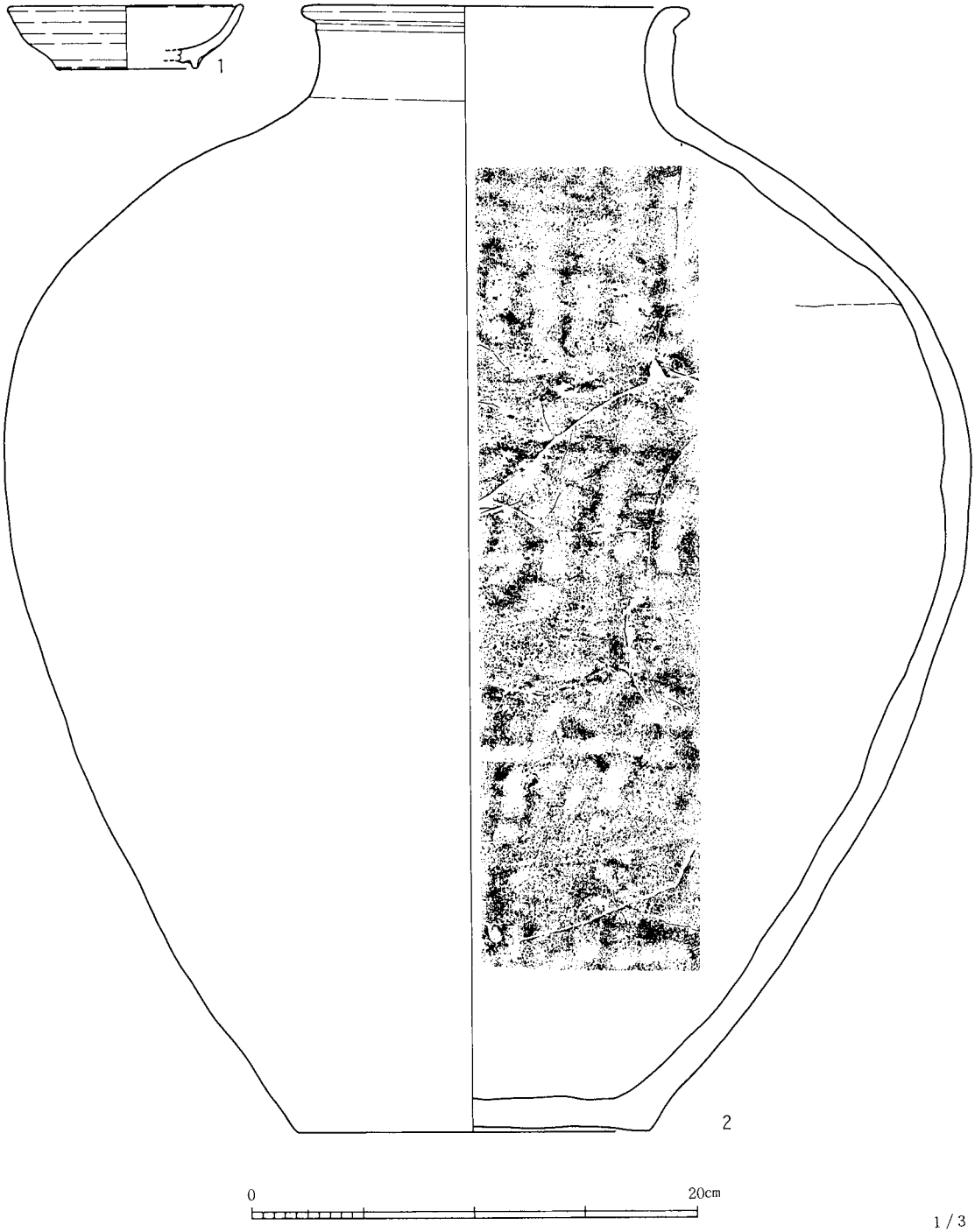
茶　臼（第16図、図版第11）

上臼と下臼の破片が各１点ある。１は上臼である。上径21.2cm、下径21cm、高さ12cm、受部の端部幅３cm、くぼみの径15cm、深さ2.2cm、供給孔の径2.8cm、挽き木孔の打ち込み孔は方形で、一辺1.8cmを測る。孔の上下、左右に蓮弁が陽刻されている。四葉の複弁で間弁も彫出される。孔は一対であったと思われるが、欠失している。目は八分画で、溝は周縁まで達している。副溝は11条を基本とするが、12条、10条の区画もある。条線の間隔は６mmである。

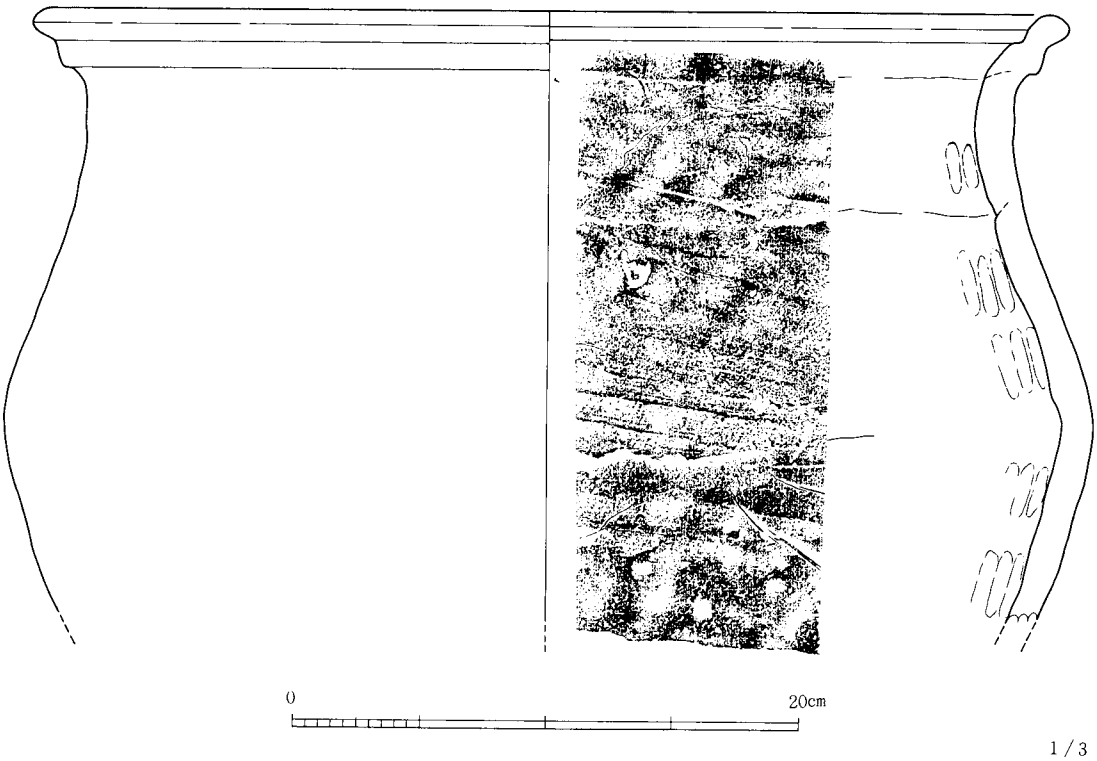
２は下臼の受け皿の端部である。径



第11図　第１号土坑出土遺物実測図(2)　1/4



第12図　第２号土坑出土遺物実測図(1)



第13図　第２号土坑出土遺物実測図(2)

43.6cmを測る。端面は水平で、幅2.2cmを測る。この臼は上述の上臼と同一石材であり、寸法からみても同一個体とみてさしつかえないと思われる。

材質は１・２とも玢岩である。

石　硯（第17図１・２、図版第12）

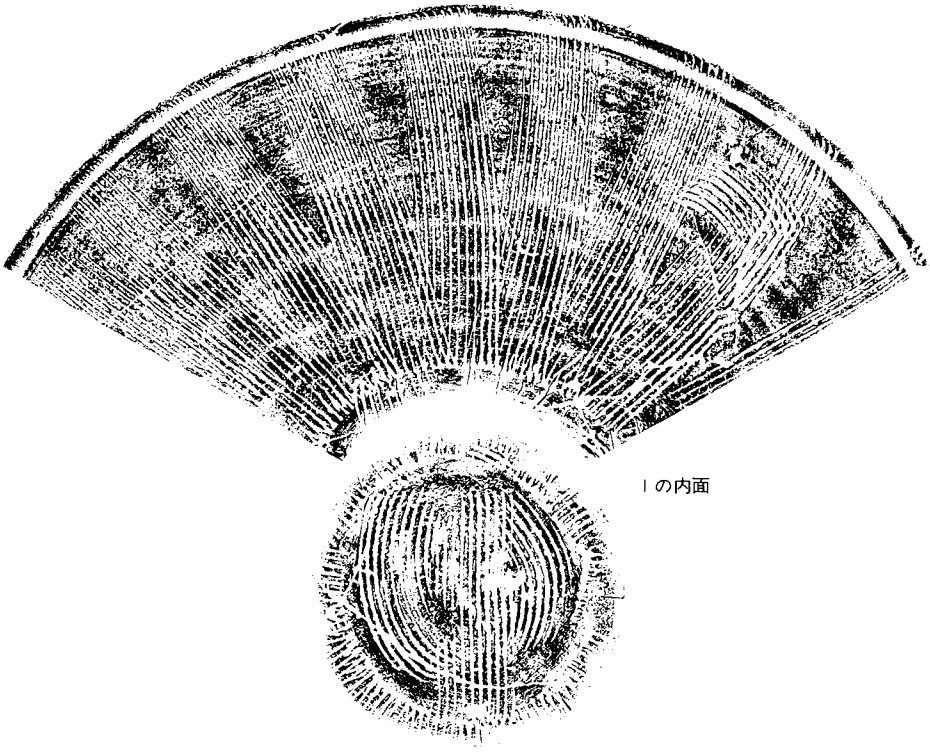
１は長さ14.9cm、幅7.9cm、高さ1.8cmを測る。熱をうけているため剝離が著しい。周縁部と海の一部を欠失する。縁部は四周にあって、陸部よりやや高くつくられている。海部の幅は2.7cmを測る。裏面には囲形の脚をつくりだすが、硯頭部にはない。熱をうけたこともあって灰橙色を呈している。

２も剝離が著しく陸部は殆ど失われている。長さ13.3cm、幅8.3cm、高さ1.7cm、周縁の高さ５mm、海部の幅２cm、深さ１cmを測る。縁部は四周に見られる。裏には１と同様の脚をつくり出す。脚は中央部で、幅９mm、厚さ４mmを測る。灰橙色を呈する。

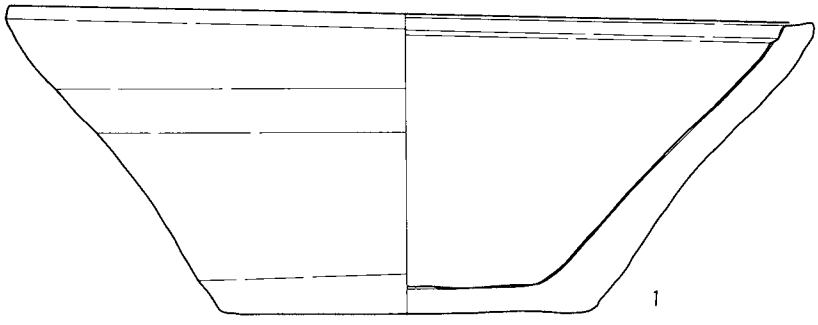
１・２とも材質は粘板岩である。

火打石（図版第12右上）

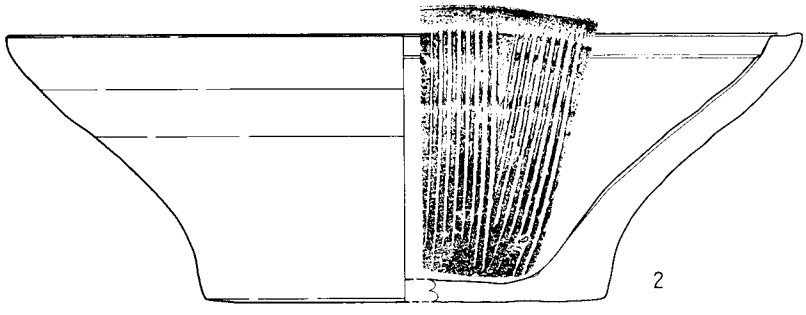
長さ7.3cm、最大幅4.9cm、厚さ3.1cmを測る。一面では、四ヶ所に顕著な打撃痕をみることができる。しかし、反対面で使用痕はうかがえず、自然面を残している。大人の手に入る大きさである。材質は石英である。



1の内面



1

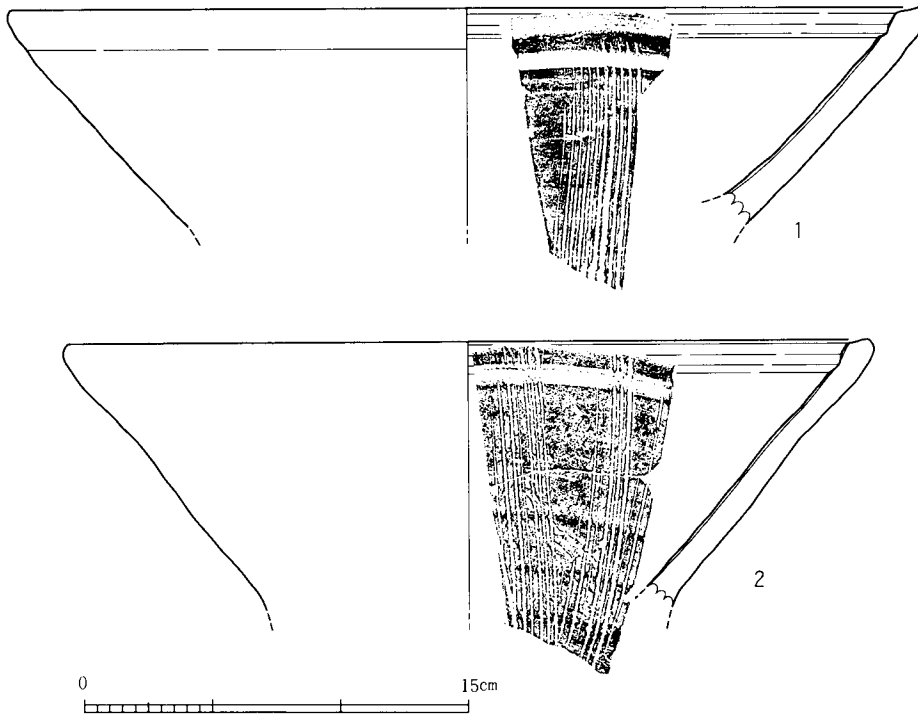


2

0　　15cm

1/3

第14図　第2号土坑出土遺物実測図(3)



第15図　第２号土坑出土遺物実測図(4)

1/3

行　火（第17図３、図版第12）

石を刳り抜いてつくったもので、立面が台形、平面がＤ字形を呈する。蓋のある形状であるが出土していない。正面には長方形の窓が４個穿たれる。前面下端の幅20cm、同上端の幅17.7cm、前面の高さ12.5cm、上端部の奥行14.3cmを測る。厚さは前面で2.5cm、弧状部は1.6cmを測る。外面は底面を除いてほぼ平滑に仕上げられている。底面には工具痕が明瞭に残っている。外底の前面は脚台として削り出されており、その両端は方形に削り出して接地面としている。したがって正位に置いた場合、後方部が少し下がることになる。

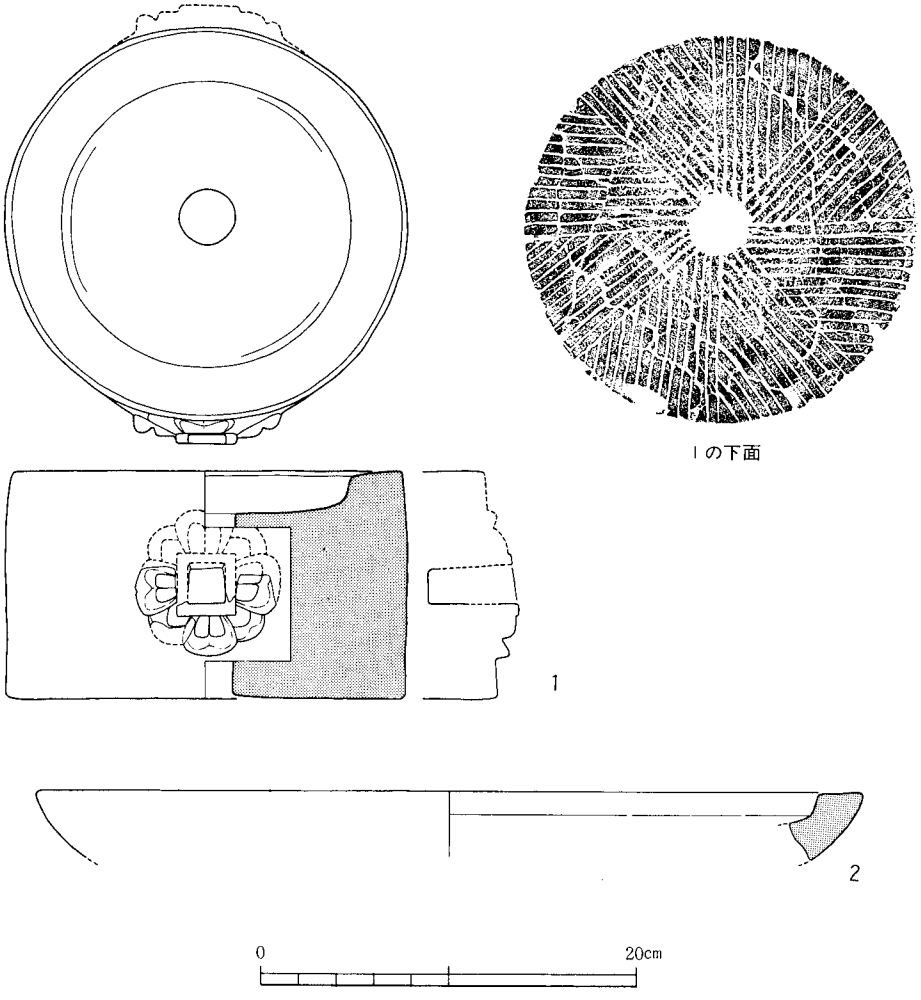
内面は外面に比べて仕上げは粗い。側面には、ノミ状の工具痕が明瞭に残る。底面も同様で、かなりの凹凸をみせる。工具の先端幅は2.8cmである。窓は縦5.3cm、横2.9～3.7cmを測る。下端は内面に向かって下がっている。正面からみて右側の内壁に熱をうけたあとが窺える。石材は凝灰岩で赤色の粒子を含有する。色は淡橙色である。

小　札（第17図４、図版第12）

鉄製で銹化著しい。片方の端部を欠いており、現存長6.1cm、幅1.8cm、厚さ0.15cmを測る。径約２mmの小孔が２個一対となって７列穿たれている。

刀　子（第17図５、図版第12）

鉄製である。切先と基部を欠失しており、のこる刃部の長さは10.2cmを測る。幅は１cm、峰の



第16図　第２号土坑出土遺物実測図(5)　1/4

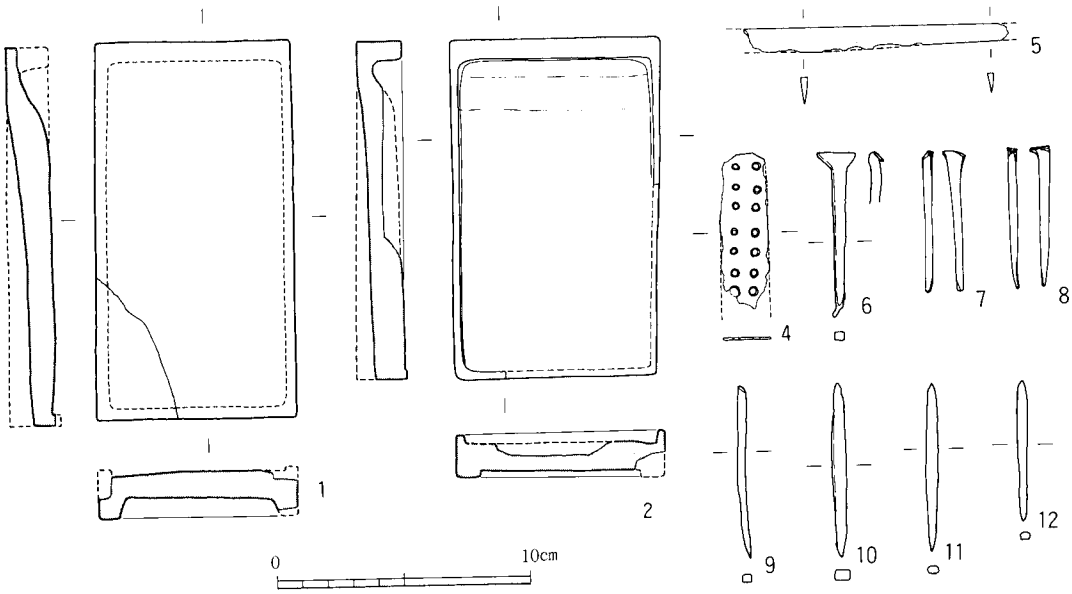
厚さは２㎜である。銹化が著しい。

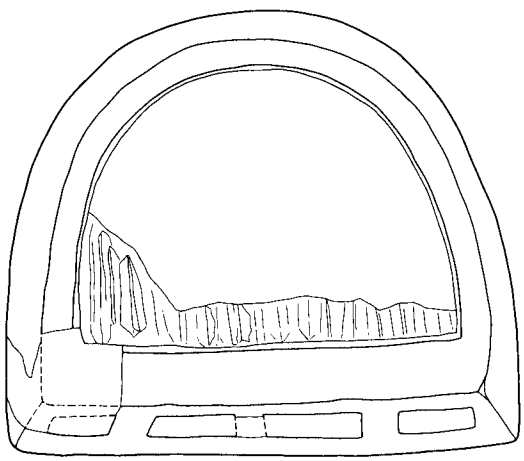
釘（第17図６～12、図版第12）

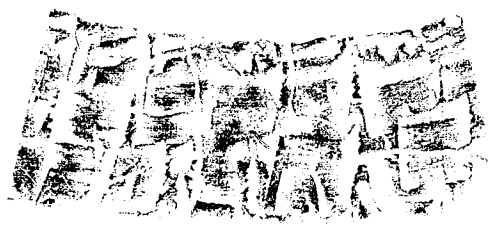
鉄製の角釘が７点出土している。９～12は頭部を欠失する。６は頭部を折っている。長さには二通りあり、６・９・10・11が７㎝前後、７・８・12が約5.5㎝である。

俎　板（第18図、図版第13）

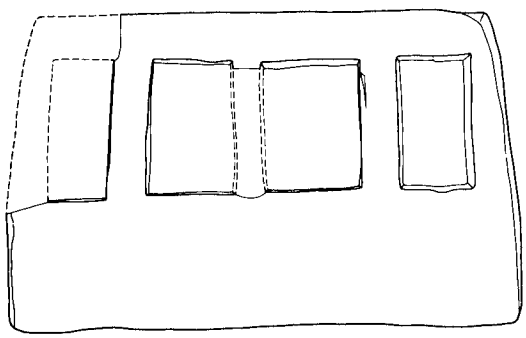
長方形の板に脚をつけたものである。四隅は丸い。長さ33.4㎝、幅22.2㎝、厚さ６㎜を測る。脚は短辺に並行して、端近くに付けられ、高さ２㎝、幅1.3㎝を測る。片脚は失われており、一脚の約３分の２が残る。脚の取り付けには木釘が用いられており、両側に６個ずつの孔が見られる。使用の痕跡は表裏二面に見られる。表面には二方向からの刃物の痕跡がある。裏面にも全面に使用のあとが窺える。板の木取りは柾目取り、脚は板目取りである。製品としての俎板は、石川県内では他に出土例を知らない。

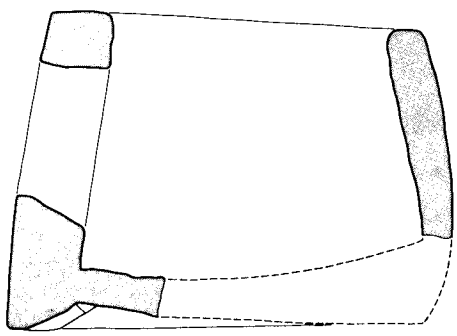




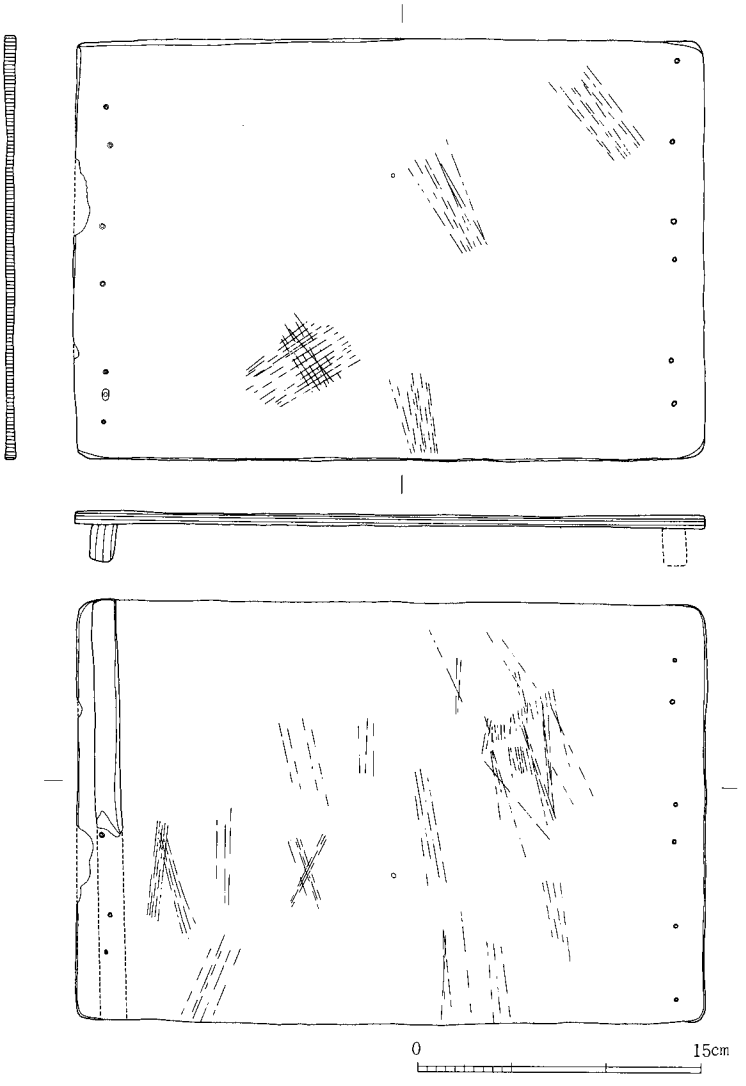


内壁拓影





第17図　第２号土坑出土遺物実測図(6)　　1／3



第18図　第２号土坑出土遺物実測図(7)

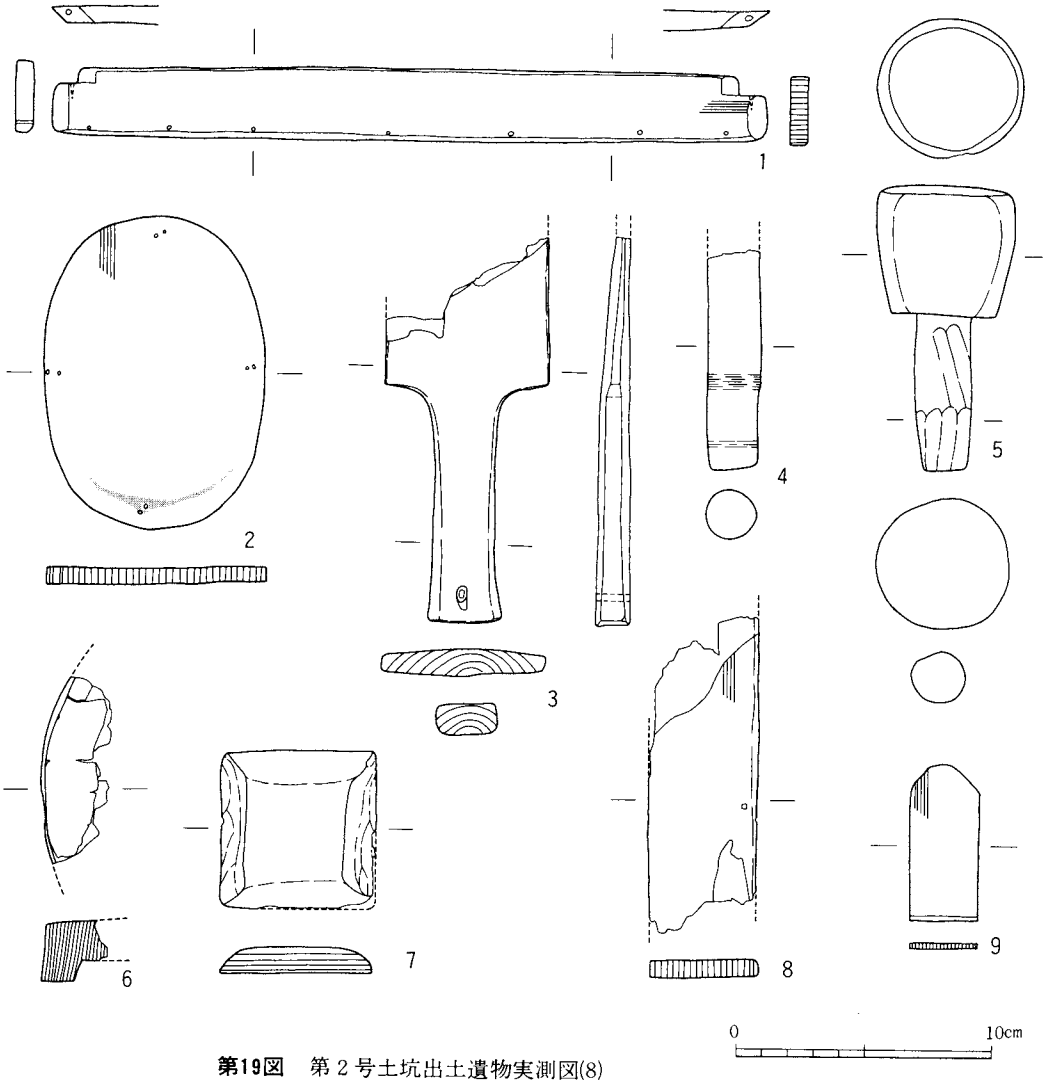
1/4

折　敷（第19図１、図版第13）

隅切りの折敷の側板の一枚である。長さ28.3cm、幅2.9cm、厚さ７㎜を測る。底板は側板の内側で木釘によってとめられていたとみられ、釘穴が７孔見られる。四隅の短い側板との組み合わせにあたっては、段をつくっており、やはり木釘でとめていたとみられる。木取りは柾目取りである。

曲　物（第19図２、図版第13）

小型の楕円形曲物の底板である。長さ12.4cm、最大幅8.6cm、厚さ６㎜を測る。側板は底板の上に乗っていたものと思われ、２本の釘ではさむようにとめた状況が、釘穴より窺える。釘穴は２個一対で四ヶ所に見られる。柾目取りである。



第19図　第２号土坑出土遺物実測図(8)

1/3

杓　子（第19図３、図版第13）

板杓子が１点出土している。頭部の先端を欠失しており、現存長15.3cm、柄の長さ9.4cm、幅３cm、厚さ1.3cmを測る。頭部は幅6.5cmを測り、厚さは関寄りで1.1cmを測る。頭部は中央部が厚く、側縁および先端方向は薄くつくられている。柄の側縁は面取りされ、尻はバチ形に広がっている。紐孔もみえる。

栓（第19図４・５、図版第13）

２点出土している。４は白木づくり、５は黒漆塗りである。４は頭部を欠失しており、棒状の挿入部が残る。現存長8.7cm、径２cmを測る。先端から3.8cmが挿入によって細くなっている。木の枝を使用したものとみられる。５は棒状の挿入部に漆塗りの頭部がつく。全長11.3cm、頭部の

長さ5.2cm、径5.7cm、挿入部の長さ6.1cm、径2.2cmを測る。頭部の漆は、頂部、側面全体、そして下部の一部にみられる。挿入部は白木で、先端は面取りされてやや細くなっている。木取りは漆塗布のため窺えない。

不明木製品（第19図６～９、図版第13）

６は平面円形を呈する黒漆塗りの製品である。端部の一部が遺存しており、外面全体と端部下面に漆が塗られている。復元径約10cm、厚さは1.5cm、端部の高さ2.2cmを測る。木取りは柾目取りである。蓋状の製品が想定できる。

７は板状で方形を呈する。6.3×６cm、厚さ１cmを測る。一面は平らで、反対側の面は四隅に稜をつけて台状につくり出す。板目取りである。

８は両端を欠く板状の製品である。幅4.2cm、厚さ７mmを測る。熱をうけて一部が炭化している。方形の小孔が側縁部に１個穿たれる。柾目取りである。容器の側板であろうか。

９は将棋の駒形を呈し、長さ6.2cm、幅2.7cm、厚さ２mmを測る。柾目取りである。

縄（図版第13右下）

径２～３mmのほそいもので、４本出土しているが、もとは一本の縄であろう。

第３号土坑（第８図、図版第４）

第２号土坑に切られて、東に存在する。全形は窺えないが、隅円方形ないし長方形の平面形をもつものと思われる。幅85cm、深さ22cmを測る。覆土は単一で、暗黄褐色粘質土層である。

出土遺物には砥石の小片が１点ある。

２　溝

第１号溝（第９図、図版第７）

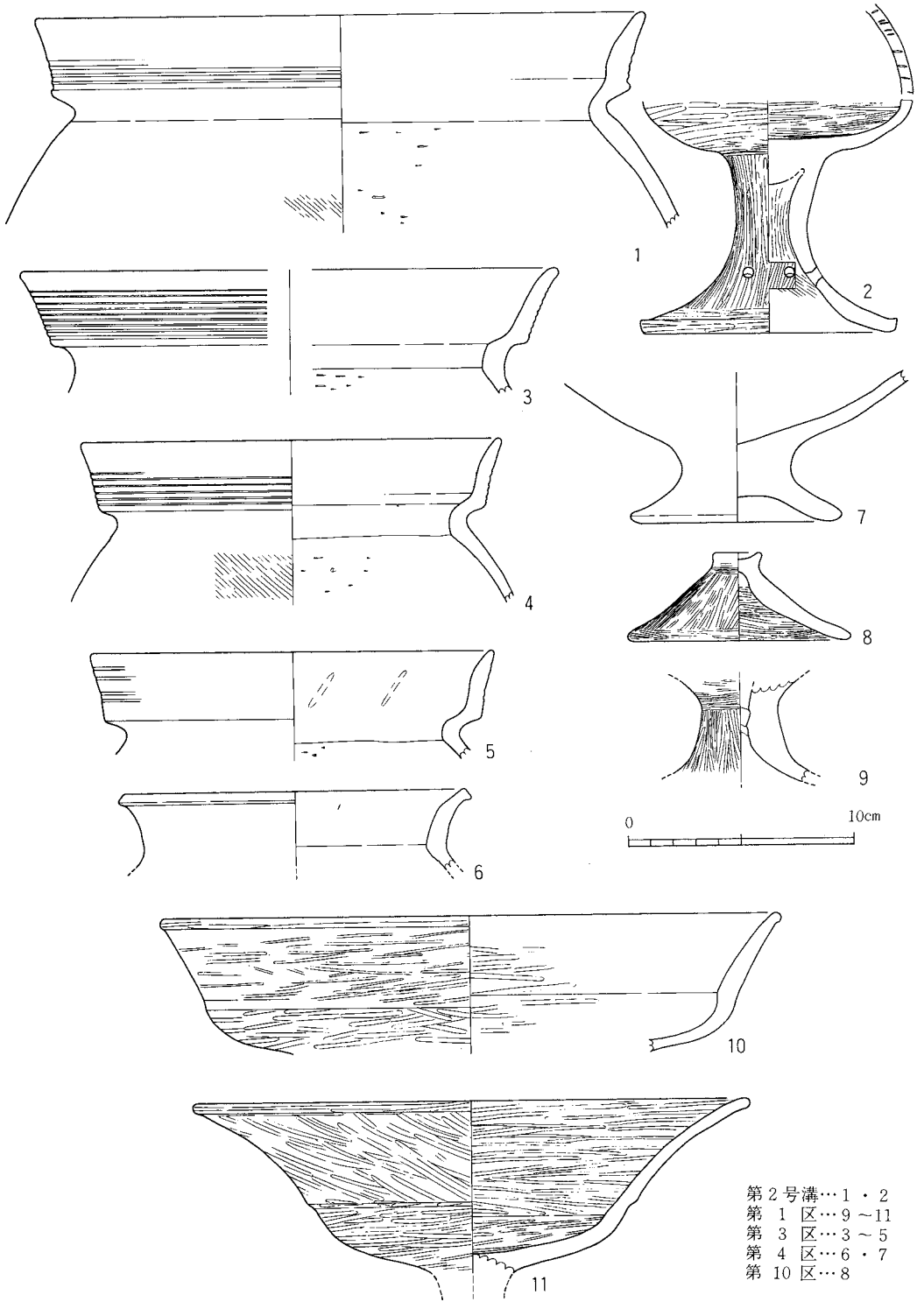
南北方向に走る大溝である。幅は、北壁側で450cm、南壁側で425cmを測る。立ち上がりは、西側はゆるやかであるが、東側はやや急である。西側の溝底下端をみると南東から北西への走行が認められる。しかし、東側上端をみると南西から北東への走行も窺える。検出面からの深さは、東側で35cm、西側と中央部で50cmを測る。覆土は茶褐色粘質土の単一層である。本遺構は、弥生時代の包含層を切っている。この包含層は本遺構の東側で約20cmの厚さがのこり、さらに東では後述の落ち込みとなる。

出土遺物には弥生土器、須恵器の小片若干と瀬戸焼の皿が１点ある。前二者は小片のため図化できなかった。

瀬戸焼（第21図11、図版第14）は内外面とも無釉の皿である。底径の復元値は14.4cmである。補修痕のあるわれ口がある。

第２号溝（第７図、図版第７）

第４区にあって南北方向に走行する。幅は南壁側が130cm、北壁側が105cmを測り、南にやや広くなっている。深さは南壁寄りで46cm、北壁寄りで40cmを測る。覆土は、検出面に存在した鉄分



第20図　溝・包含層出土遺物実測図(1)　　1/3

の層を除くと三層である。黒褐色砂質土層には炭化物が含まれ、弥生土器を包含する。

弥生土器（第20図１・２、図版第14）について説明しよう。１は有段口縁の甕である。口径の復元値は27.3cmである。２は高坏で、坏部の上半を欠失する。脚部径11.2、現存高10.5cmを測る。坏部の内面を除いてミガキが施される。脚には２個で一対をなす透孔が二ヶ所に見られる。坏部のわれ口には、同上半部との接合のためにキザミが施されている。弥生時代後期後葉の所産であろう。

第３号溝（第７図）

第５区で検出された大型の溝である。北壁よりで幅585cm、深さ30cmを測る。他の溝と同様、南北方向に走行するものと思われる。壁面の立ち上がりは両側がゆるい。覆土は単一で、明黄褐色粘質土層である。出土遺物には弥生土器と青磁碗がある。

出土遺物のうち青磁碗が図示できた（第21図４、図版第14）。復元口径15.4cmを測り、内外面とも施釉され、オリーブ灰色を呈する。口縁端部内面には稜が入る。

第４号溝（第７図、図版第８）

南北方向に走る、幅120cm、深さ25cmの溝で、断面は逆台形を呈する。覆土は灰色粘質土の単一土層である。出土遺物はない。

第５号溝（第８図、図版第４）

第２号土坑によって切られた不整形な溝で、北東から南西に走行する。北壁よりで、幅105cm、深さ10cmを測る。出土遺物はない。

第６号溝（第７図）

全掘していない。南北方向に走る溝で、第７号溝に切られており、現状で幅107cm、深さ20cmを測る。溝底は地山の礫層に達しており、この礫に混じって茶臼が１点出土した。

出土した茶臼（第21図17、図版第14）は下臼の中央部である。径19cm、厚さ8.3cmを測る。芯木孔は方形で、一辺約2.5cmを測る。釣鐘形に広がった下部の径は4.5cmを測る。目は八分画で、副溝は７～８条、その間隔は約７mmである。材質は凝灰岩である。

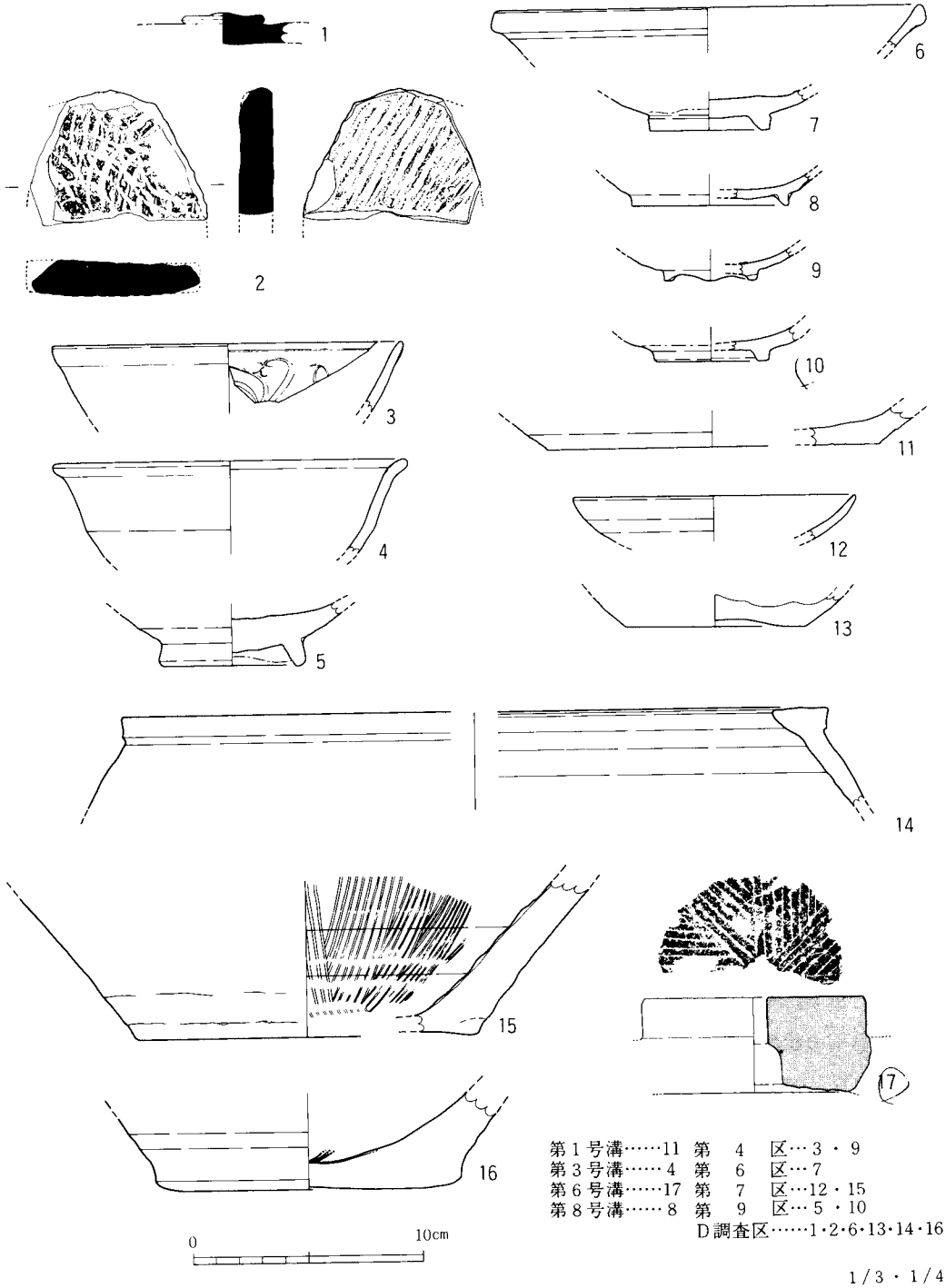
第７号溝（第７図）

第６号溝を切って東に存在する。南北方向に走り、幅340cm、深さ35cmを測る。全掘していない。覆土は灰色粘質土層の単一層である。溝底面は、第６号溝と同じく、礫層に達している。出土遺物はない。

第８号溝（第７図）

調査区のなかで東端に存在する溝である。幅220cm、深さ45cmを測る。覆土は単一で、灰色粘質土層である。白磁の皿と凝灰岩製の行火小片が各１点出土している。

白磁皿（第21図８、図版第14）は復元底径6.8cmを測る。内外面とも施釉されている。小野正敏氏による分類[(4)]のＣ群にあたり、16世紀前半代の所産と考えられる。



第１号溝……11　第　4　区…３・９
第３号溝……４　第　6　区…７
第６号溝……17　第　7　区…12・15
第８号溝……８　第　9　区…５・10
Ｄ調査区……1・2・6・13・14・16

1/3・1/4（17）

第21図　溝・包含層出土遺物実測図(2)

3　木曽街道側溝（第９図、図版第８）

第１区で検出された旧街道の西側溝である。今次の圃場整備によって宮保町地内の本街道は消えた。第５図に見るように、本街道は宮保集落の南東から出て北東方向に軸をとり、調査区を横断している。したがって法仏集落を通っていない。昭和46年に刊行された『宮保の歴史』によると、道路が宮保からまっすぐに北上して法仏に通じたのは明治44年以降のことであるという。

検出した側溝の幅は30～60cm、検出面からの深さは10～27cmである。東側溝も存在したと思われるが、攪乱によって失われている。

木曽街道は『加賀志徴』によると「此道は今本吉の裏道といへれど、古道にして松任の裏より成・北安田・宮保・笠間を経て、北島・東米光・平加等の数村を経、本吉へ出づるなり。義仲行軍の時此道を押されし故に、今に木曽街道と呼べり」とある。もとの橋は２～３ｍであったと思われる。

4　落ち込み（第９図、図版第４）

第１区で見られる弥生時代包含層の落ち込みである。この包含層は、両側を第１号溝によって切られ、東側を近代以降の攪乱によって失っている。落ち込みと名付けた本遺構は深さ15cmを測り、底面は北東方向に下がる。出土遺物には弥生土器があり、弥生時代後期の所産と思われる。本遺構と木曽街道側溝の間に３基のピットがあり、これも弥生時代後期のものとみられる。

出土遺物には弥生土器があるが図示できるものはない。包含層の項で述べる土器の時期と同じと考えられる。

5　ピット・包含層（第７図・第９図）

ピット群は第１区と第10区で検出された。第１区のピット群は深さ10～20cmを測り、弥生時代後期後半のものとみられる。第10区では８個からなるピット群が見られる。径15～27cm、深さ４～22cmを測る。不規則な配置で、出土遺物はない。

次に包含層の状況を述べよう。明確な包含層を形成するのはすべて弥生時代のものである。第１区、第３区、第５区で見られる。第１区では約20cmの厚さで、約６ｍにわたって見られ、その東は先述の落ち込みとなっている。第３区でも厚さ約20cmを測る。第５区では厚さ10cmで、８ｍの長さにわたる。弥生時代の包含層は第５区をもって東限とする。弥生時代以降のものについては第一次耕地整理により削られた可能性が大きい。

以上のほか、昭和62年度施工予定区の（Ｄ調査区）の仮排水工事によって出土した遺物も本項で説明する。

遺　物

弥生土器（第20図、図版第14）

３～６は甕である。３～５が有段口縁で擬凹線をもつもの、６は「く」の字口縁である。７は台付鉢、８は蓋、９は器台、10・11は高坏である。９の外面には赤彩がある。11は口径28cmを測る。いずれも弥生時代後期後半の所産であろう。

須恵器（第21図、図版第14）

１は蓋、２は猿面硯の頭部である。硯面となっている内面に同心円の叩き、外面に並行叩きが見られる。周縁の加工は粗い。楕円形を呈するものとなろう。厚さ1.5cmを測る。

青　磁（第21図、図版第14）

３・５は碗である。３は復元口径15.2cmを測る。内外面とも施釉されており、内面に文様が刻まれる。貫入はない。灰オリーブ色を呈する。５は底径6.4cmを測る。外底面を除いて施釉され、見込みに文様が見られる。貫入はなく明緑灰色を呈する。

白　磁（第21図、図版第14）

６・７が碗、９は皿である。６はいわゆる玉縁口縁をもつものである。７は口径5.2cmを測る。体部外面と見込みに灰白色の釉が見られる。見込みには輪状の無釉部分がある。９は高台を抉る小皿である。底径４cmを測り、高台畳付は無釉である。貫入が見られる。

越前焼（第21図、図版第14）

13は壺の底部である。底径7.7cm、内底面は剝離している。14は甕、15・16は擂鉢である。15は復元口径14.8cmを測る。よく使用されており、９条一単位の櫛目は磨滅著しい。16は復元底径13.4cmを測る。15と同様、十分に使用されている。

瀬戸焼（第21図、図版第14）

10は天目碗である。底径５cm、釉は内面と外面体部にかかる。

肥前系磁器（第21図、図版第14）

12は皿である。復元口径12.2cmを測る。内外面とも施釉され、内面は暗オリーブ、外面は灰オリーブの釉が見られる。貫入はない。

註

(1)　藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』　瀬戸市歴史民俗資料館　1986　瀬戸。

(2)　『越前名陶展』　福井県陶芸館　1986　福井県宮崎村。

(3)　小野正敏「平等岳ノ谷窯跡群の調査概要」『東日本における中世窯業の基礎的研究』　国立歴史民俗博物館　1989　佐倉。

(4)　小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№2　日本貿易陶磁学会　1982　東京。

第4章　考　察

これまで説明してきた各遺構について時期を確認しておきたい。本遺跡の形成時期は弥生時代と室町時代に大別できる。まず、弥生時代のものとしては第1区のピット群と落ち込み、第2号溝があげられる。次に中世と考えられるものに、第1号溝、第1号～第3号土坑、第6号溝～第8号溝があげられる。このほか第3号溝、第4号溝もその可能性を指摘できる。第5号溝および第10区のピット群については不明とせざるを得ない。

第1節　遺跡について

遺構の配置をみると第1号溝が離れた位置にあるほかは、第3号溝から東に向かって第7号溝まで集中的に営まれている。3基の土坑を中心として、その東と西に2条の溝が存在するという形である。3基の土坑の性格については、第2号土坑での遺物の出土状態から、短期間に営まれた廃棄坑と考えたい。居住空間は今次の調査で確認していないが、これら土坑群に近い場所に存在した可能性は大きい。土坑群をはさんで存在する東西の溝の間に建物が存在していたことも想定できる。敷地の規模は推定しがたいが、第4号溝東端から第6号溝西端の長さが13m、第3号溝東端から、第7号溝西端までの距離が約18mあることは留意しておきたい。

中世における堀（溝）をもつ遺跡は検出例が増加しており、総括的な検討[(1)]もなされつつある。県内においてもその例は増えており、とりわけ手取川扇状地の扇端部に多い。管見の限り10ヶ所をこえている。本書収載の宮保館跡も同様の例であり、最古のグループに属するものと思われる。ただ、調査例の大半が県営圃場整備の排水路工事に関わる限定された部分のため、全容はもちろん規模の一端も窺えないのは残念である。

本遺跡の名称となった「光明寺」はこの地区の小字名よりとったものである。『宮保の歴史』によると、戦国時代の宮保は南禅寺領で、その末寺であった光明寺という禅宗寺院が領内の管理にあたっていたという。そして、この光明寺は天正5年（1577）に上杉謙信が松任城を攻めた時焼かれたものであると『北越太平記』の記述を引用している。

小字名の遺存と光明寺焼亡の時期は、本遺跡の性格を明らかにするうえで否定的な材料ではない。しかし、史料の検討も十分でなく、遺跡もその一端を垣間見ただけの現時点では、両者の間に接点を見出すことはむずかしい。周辺地域での資料の増加をまって検討を重ねたい。

第2節　中世後期における生活用具の二、三について

本遺跡の第2号土坑はすでに述べたようにまとまった生活用具を出土していることが特筆される。これを第2表として下に掲げた。本節ではこれらのうち俎板と行火について若干言及したい。なお、下表の遺物の分類のうち、火打石や刀子などは必ずしもその用途に限定されないものであ

第2表　第2号土坑出土遺物

用　　途	種　　別	遺　物　名　お　よ　び　点　数
調　理　具	陶　　器	擂鉢4（越前）
	木　　器	俎板1、折敷1、曲物1、杓子1、栓2
食　膳　具	陶　　器	皿1（瀬戸・美濃）
貯　蔵　具	陶　　器	壺1、甕1（越前）
暖　房　具	石　製　品	行火1、火打石1
嗜　好　具	石　製　品	茶臼1
文　房　具	石　製　品	硯2
武　　具	鉄　製　品	小札1、刀子1
そ　の　他	繊維製品	縄1
	鉄　製　品	釘7

ることを付記しておく。

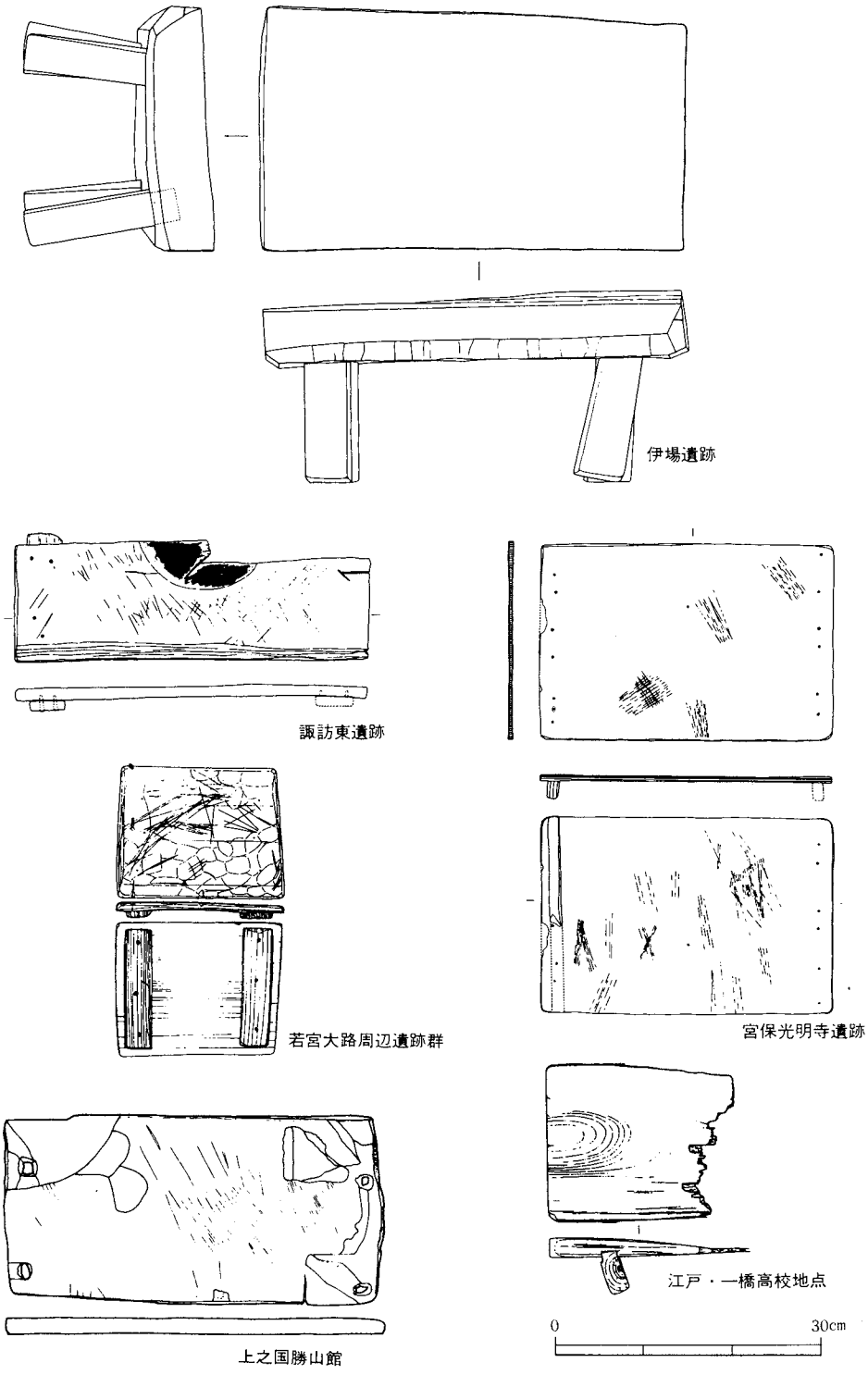
1　俎板について

ここでとりあげる俎板とは魚や獣、野菜等の食物を切る時にのせる板もしくは台のことである。文献[2]では、天平宝字6年（762）に成立した『二部般若用度解案』および神護景雲4年（770）成立の『雑物請帳』に「切机」と見え、延喜・延長期（905～927）成立の延喜式には「切案」という言葉が見えている。これらが俎板を指すものと考えられる。そして、承平年間（931～938）成立の『和名類聚抄』には「俎　和名末奈以太」とみえる。中世に入ると、文安元年（1444）成立の『下学集』に「末那板」、天文11年～同16年（1542～1547）に書かれた福井県三国町瀧谷寺の校割帳[3]には「切盤」、天文17年（1548）成立の『運歩色葉集』には魚板とみえる。

遺跡出土の俎板　（第22図）

ここでは中世の遺跡に限るが、出土例は少ない。管見の限りでは、鎌倉市の諏訪東遺跡[4]、若宮大路遺跡群[5]、北海道上之国町の上之国勝山館[6]に各1例あり、本遺跡の1例を加えても4例にすぎない。これらは当初から俎板として作られたと考えられるもので、転用されたものはとりあげない。転用された俎板には、折敷、曲物底板、鍋蓋などを一次的な用途とするものがある。調理というものを総合的に捉えるためには当然これらも含めるべきであるが、ここでは紙幅の都合もあって上記の条件をもつものを対象とした。

上記の出土俎板のうち最も古いものは鎌倉の2例で、ともに14世紀代とされる。上之国勝山館例は16世紀中葉である。形状はいずれも長方形である。諏訪東例は欠損のため幅は知り得ないが、



第22図　遺跡出土の俎板実測図

長さは40.3cm、残存幅13.5cm、厚さ1.4cmを測り、幅4cm、厚さ1.2cmの扁平な脚が木釘によって取りつけられている。若宮大路遺跡群例は長さ40cm、幅20.5cm、厚さ1.8cmで、脚をとりつけたほぞ穴がのこる。

中世以前の出土例としては、伊場遺跡で2例[7]が報告されている。うち1例は第22図に示したもので、平面長方形で四脚をもっている。板は厚い。9～10世紀の所産とされる。他の1例は桟状の脚をもったものである。いっぽう近世では江戸遺跡・一橋高校地点の例[8]が長方形で桟状の二脚を有するものとして知られる。

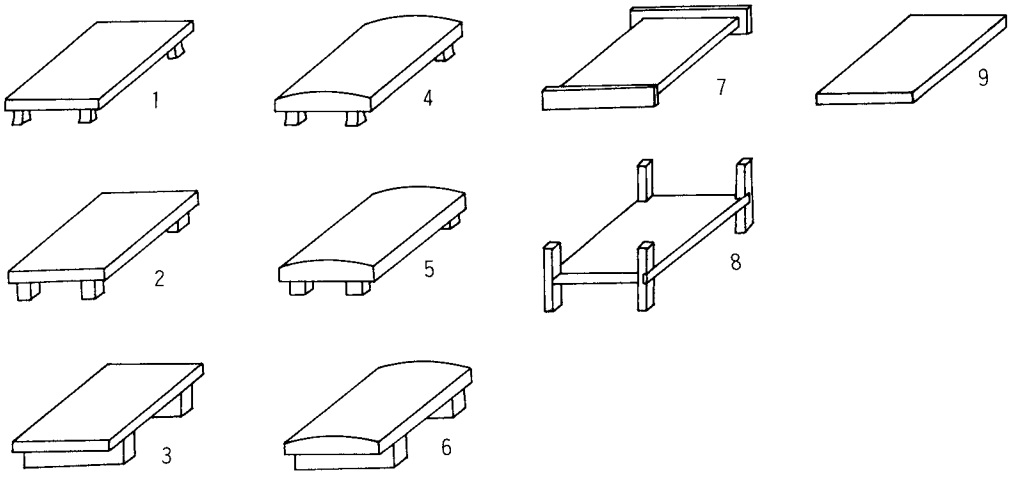
絵画資料にみる俎板（第23図）

中　世　絵画資料のうち俎板が最も早くみえるのは、12世紀後半の成立とされる『地獄草紙』である。長方形で、端部が外に反った四脚をもつ（第23図1）。調理者は鬼で、右手に包丁、左手に箸[9]をもち人間を切っている。俎板は灰色に彩色されているので、木以外の材質と思われる。

13世紀代の資料には、『粉河寺縁起』、『北野天神縁起』がある。前者は13世紀初頭、後者は同後半の成立とされる。前者には二種類の俎板がみえる。一つは長方形で四脚をもつもの（第23図2）で、もう一つは長方形で脚のないもの（第23図9）である。脚付の俎板を前にして烏帽子を被った男が右手に漆椀、左手に箸をもち食事中である。調理をした俎板の上から獣肉（鹿か猪）をつまんでいる風景である。包丁は俎板の右上面におかれる。いっぽう、脚のない俎板は、上に獣骨が2本のっている。家の中の同じ場所に描かれているのでとりあげたが、脚のない俎板が中～近世を通じて描かれるのはまれである。調理風景がみえないので、俎板とするのは留保すべきかもしれない。『北野天神縁起』も長方形で四脚である。鬼が右手に包丁、左手に箸をもち人間を料理している。これも俎板の色は灰色に塗られている。

14世紀に入ると、初頭に成立した『春日権限験記絵』、『松崎天神縁起』、前半成立の『六道絵』、『聖徳太子絵伝』、中頃成立の『慕帰絵詞』、後半に成立した『酒伝童子絵巻』が長方形で四脚をもつ俎板を描いている。『六道絵』では鬼が包丁で人間を切っている。『聖徳太子絵伝』では束帯装束の男が右手に包丁、左手に箸をもって猪を料理している。『慕帰絵詞』では烏帽子を被った男が右手に包丁、左手に箸をもって刺身をつくっている。『酒伝童子絵巻』では武士が刀で人間の脚を刻んでいる。さて、『春日権限験記絵』にみられるものは、長方形であるが、短辺に側板状に脚をつけたもので、両面の脚を兼ねるようになっている（第23図7）。ここでは烏帽子姿の男が右手に包丁をもち、左手で押さえた蓮根を切っている。『松崎天神縁起』にみられるのは長方形で四脚であるが、表面がかまぼこのように高くなっており（以下これを甲高と呼ぶ）、脚端も外に反る（第23図4）。烏帽子姿の男が右手に包丁、左手に箸をもって魚を料理している。

15世紀代では、後半に成立したとされる『酒飯論』のなかに、表裏両面に突出した四脚をもつ俎板（第23図8）が描かれるが、18世紀の模写本でしか確認していない。19世紀初頭に成立した『骨董集』[10]ではこれを魚板の古製とし、文明年間の酒食論（酒飯論）や寛永年間の絵に見えるとする。その使用法については「表にて魚類を切、裏にて菜類を切る」と説明している。



第23図　絵画資料にみる俎板(模式図)

16世紀代の資料としては『七十一番職人歌合』と『ねずみ草紙』をあげておきたい。前者は「包丁」と呼ばれる職人を描いており、長方形で四脚の俎板の上に魚をおき、右手に包丁、左手に箸をもった姿がみられる。職業的調理者と明確にわかる最初の絵である。ただし、これ以前の資料でも『聖徳太子絵伝』や『慕帰絵詞』にみられる調理者はこれに類する姿として捉えられる。『ねずみ草紙』では長方形で四脚の俎板が描かれており、裃を着たねずみの調理者が魚と鳥を右手の包丁で調理している。

近　世

17世紀代の資料では『江戸図屏風』に長方形で四脚・甲高の俎板（第23図５）がみえる。この他長方形・四脚の形は『七十一番職人歌合』(版本)、『訓蒙図彙』(同)『狂詠犬百人一首』(同)『吉原風俗図巻』などに見ることができる。調理者はいずれも男性で、職業としての調理者として描かれている。調理物は魚もしくは鳥である。『古今料理集』(版本）では俎板の部分名称および寸法が記されている。

18世紀代に入ると享保期頃の成立とされる『どうけ百人一首』(版本）に長方形で桟状の二脚のもの（第23図３）がみえる。しかし、18世紀後半に成立した『難福図巻』や『職人尽発句会』(版本）には、長方形・四脚・甲高の俎板がみえることより、四脚のものも依然存在していたことを窺わせる。調理物は魚の他に蛸がみえる。本世紀の後半には長方形・二脚のものが一般的になっていたようである。

19世紀に入ると女性の調理者が描かれる。俎板の形状は、従来の長方形・四脚に加えて、長方形・二脚（桟状）(『畧画職人尽』版本)、長方形・脚なし（『素人包丁』版本）などがみられる。調理物も柿、筍、あわびなど多様になる。包丁も、調理物の多様化にともない、従来の刀子状のものに加え、野菜類を切りやすい、菜切り包丁形が出現する。近世に入ると甲高の俎板は見られなくな

る。

20世紀に入ると、大正2年（1913）には、立式の家庭用調理台が出現するが、この上に置かれた俎板[11]に脚は見えない。大正12年（1923）の立式調理台の俎板[12]も同様である。立式の台所と俎板の脚は相容れないものであろう。ただ、日本で立式の台所が一般化するのは太平洋戦争以後であり、さらにいえば1950年代から1960年代にかけての高度経済成長期に台所の改良がなされ、俎板の脚も消えていったのである。

現在の俎板は多様である。脚付のものはまず見られない。材質は木製の他にプラスチック製も出現し、大きさも、家族数や調理物の変化にともなって小さくなっている。形は長方形以外に円形やハート形を呈するものもある。魚、野菜を切るといった本来の目的に加えて装飾性も備えつつあるようである。

まとめ

俎板の形態変化を簡単に追ってきた。その結果、それをとりまく諸要素も変化することが明らかになった。俎板をも含めた調理具、調理物、調理者など調理の場にあるものを総合的に検討することによって、食生活史の一端を明らかにすることが可能となろう。今回扱った絵画資料は一部の地域の一風景を描いているにすぎず、出土資料としての俎板が、絵画資料の流れと符合しないのはそのことを端的に示している。残された課題については稿を改めて検討したい。

本書で引用した絵画資料は次の文献に依拠している。

中世　『地獄草紙』・『粉河寺縁起』＝小松茂美編『日本の絵巻』　中央公論社　1987～1988　東京。『北野天神縁起』・『春日権限験記絵』・『慕帰絵詞』＝小松茂美編『続日本の絵巻』　中央公論社　1990～1991　東京。『松崎天神縁起』＝小菅桂子『にっぽん台所文化史』　雄山閣　1991　東京。『聖徳太子絵伝』＝小泉和子『道具が語る生活史』　朝日新聞社　1989　東京。『酒伝童子絵巻』＝『絵巻』　京都国立博物館　1987　京都。『六道絵』・『ねずみ草紙』＝『週刊朝日百科　日本の歴史』13・63　朝日新聞社　1986・1987　東京。『酒飯論』＝『だいどころの歴史』　石川県立郷土資料館　1982　金沢。『七十一番職人歌合』＝谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第30巻　三一書房　1982　東京。

近世　『江戸図屏風』＝高橋昭子・馬場昌子『台所のはなし』　鹿島出版会　1986　東京。『七十一番職人歌合』、『訓蒙図彙』、『狂詠犬百人一首』、『人倫訓蒙図彙』、『和国諸職絵つくし并歌合』、『どうけ百人一首』、『職人尽発句合』、『畧画職人尽』＝谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第30巻　三一書房　1982　東京。『古今料理集』、『素人包丁』＝ＮＨＫデータ情報部編『ヴィジュアル百科江戸事情』第一巻　雄山閣　1991　東京。『吉原風俗絵巻』＝大河直躬『住まいの人類学』　平凡社　1986　東京。『難福図巻』＝『週刊朝日百科　日本の歴史』63　朝日新聞社　1987　東京。

2　石製行火について

行火とは手足を暖めるための可搬式の暖房具である。中世から近世前期にかけての石製行火の出土地をみると、富山、石川、福井の北陸三県で22遺跡が知られる。これに土製の行火も加えて全国の出土地をみると31遺跡数えられる。

行火については、出現時期や形態の変遷、さらには石材産地との関係が論じられている。[13] 筆者も分布や製作の背景について若干言及した。[14] ここでは紙幅の関係から分布の概説にとどめるので詳細は既往の研究に依拠されたい。

行火の形態に触れておこう。初源的な形態としては、天井があって横口をもつものが認識されており、14世紀後半の年代が与えられている。[15] その後次第に改良がなされて、本遺跡にみるような有蓋・横窓のものが出現し、平面形も方形からD字形や楕円形へと変化している。

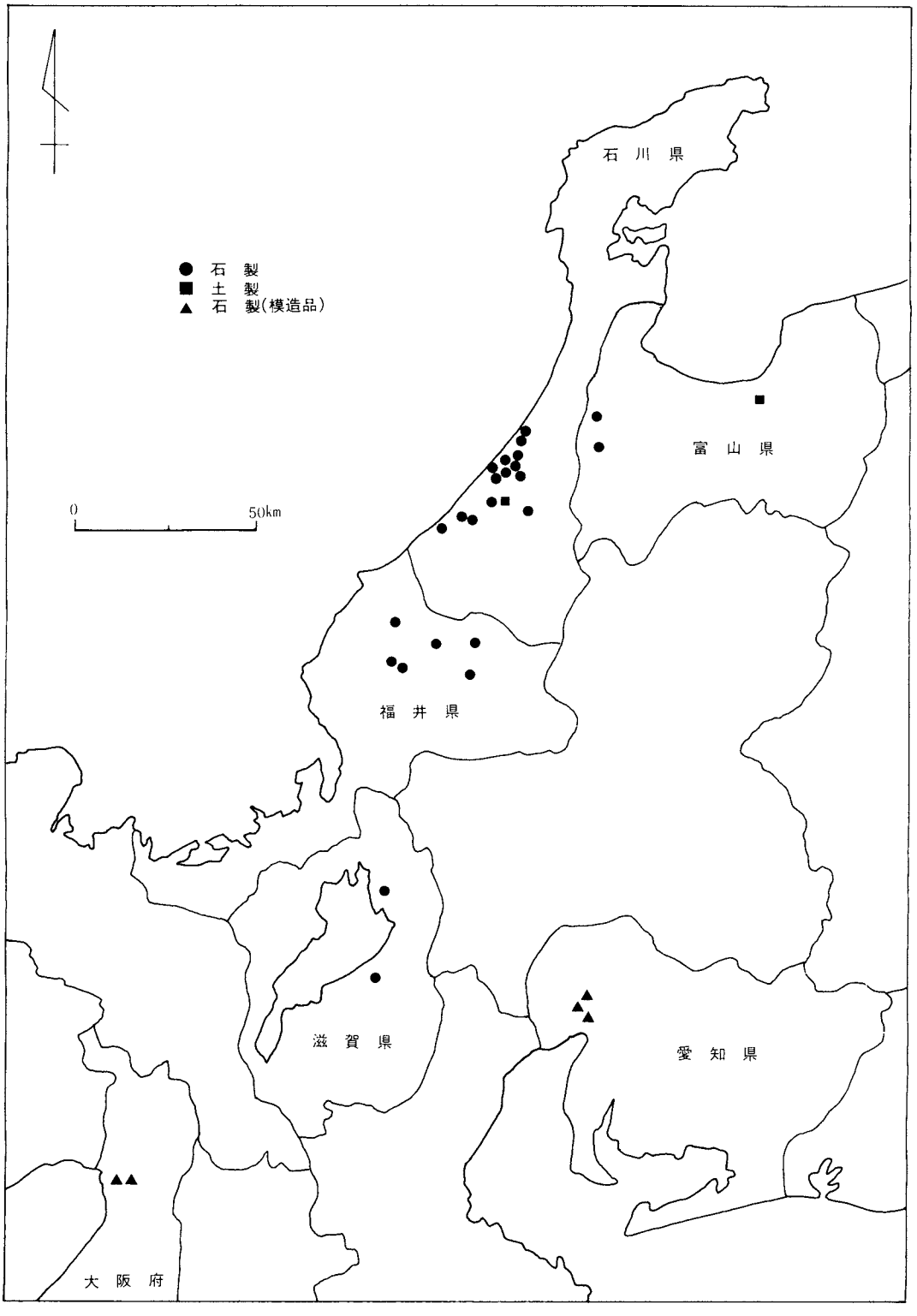
第24図に石製、土製の行火分布図を示した。富山県では石製2遺跡、[16] 土製1遺跡、[17] 石川県では石製14遺跡、[18] 土製1遺跡、[19] 福井県では石製6遺跡、[20] 滋賀県では石製2遺跡が[21]知られる。さらに、愛知県で石製3遺跡、[22] 大阪府で石製2遺跡が[23]知られるが、これらは実用品とはみなしがたいものである。

富山県の石製2例は石川県寄りに分布する。石川県では、手取川扇状地に最も多く、梯川流域にも散見される。現在のところ旧加賀国内にのみみられる。形態は、横口のものも有蓋・横窓のものも見られるが、平面楕円形のものは石製では見られない。福井県では6遺跡あげられるが、朝倉氏遺跡が出土数において他を圧倒している。[24] 他の出土地も同遺跡との関係においてとらえられる。戦国大名朝倉氏と職人の関係を知るうえで注目すべき分布を示している。なお、旧若狭国には見られない。滋賀県のうち1例は小谷城跡出土で、[25] ここは朝倉氏と同盟関係にあった浅井氏の居城である。

愛知県、大阪府の例はいずれも小型の模造品（ミニチュア）で、平面が楕円形で、長径6～7cmである。蓋には透かしや草花の刻文がみられ、装飾性が付与されている。

各地域における行火の時期をみると、14・15世紀には北陸三県内で展開しており、16世紀の後半になって滋賀県に現れる。愛知県、大阪府の例は16世紀末～17世紀にかかる近世の所産として理解される。また、これらは模造品であるから、実用としての行火使用地域ではない。したがって実用品としての行火は9割以上が北陸に分布することになり、中世～近世前期において確認される石製行火はきわめて北陸的な遺物として認識される。

石製品研究の現状をみると、行火をはじめ、臼や鉢、そして硯や砥石など生活のなかで重要な役割を果たしていたと思われるものでも、属性分析すらなされていないものがある。多くの出土資料を、技術史や生活史のなかで適切に評価することが今後の課題である。



第24図　石製・土製行火分布図(中世～近世初頭)

註

(1) 堀をめぐらす中世の居館に焦点をあてた橋口定志氏の以下の一連の論考がある。「絵巻物に見る居館」『生活と文化』二号　豊島区立郷土資料館　1987　東京。「中世方形館を巡る諸問題」『歴史評論』　第454号　校倉書房　1988　東京。「中世東国の居館とその周辺」『日本史研究』　第330号　日本史研究会　1990　京都。

(2) 註(3)以外次の文献によっている。『古事類苑』　器用部一（神宮司庁蔵版）　吉川弘文館　1983　東京。

(3) 佐藤　圭「瀧谷寺の財産目録と出土品」『よみがえる中世』6　平凡社　1990　東京。

(4) 斉木秀雄編『諏訪東遺跡』　諏訪東遺跡調査会　1985　鎌倉。

(5) 馬渕和雄「若宮大路遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6　鎌倉市教育委員会　1990　鎌倉。本資料の実見にあたって馬渕和雄、大河内勉両氏のお世話になった。記して感謝したい。

(6) 松崎水穂他『史跡上之国勝山館跡』Ⅵ　上之国町教育委員会　1983　北海道上之国町。

(7) 向坂鋼二他『伊場遺跡遺物編』1　浜松市教育委員会　1983　浜松。

(8) 古泉　弘他『江戸　都立一橋高校地点発掘調査報告』　都立一橋高校内発掘調査団　1985　東京。

(9) 本例を含め絵画資料にみえる箸は「まな箸」と呼ばれる調理用の箸である。一般的には、六、七寸の鉄の棒で、四寸ほどの手許がついたものらしい（小泉和子『道具が語る生活史』　朝日新聞社　1989　東京）。

(10) 註(2)文献に同じ。

(11) 小菅桂子『にっぽん台所文化史』　雄山閣　1991　東京。

(12) 註(11)に同じ。

(13) 久保智康「笏谷石利用の歴史」『石をめぐる歴史と文化』　福井県立博物館　1989　福井。　垣内光次郎「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌』　第33号　石川考古学研究会　金沢。南洋一郎「シャクダニ石の文化」『よみがえる中世』6　平凡社　1990　東京。

(14) 三浦純夫「北陸における中世後期の生活と行火」『考古学と生活文化』　同志社大学考古学シリーズ刊行会　1991　京都。

(15) 註(13)垣内論文。

(16) 日の宮遺跡（小矢部市）と梅原胡摩堂遺跡（西砺波郡福光町）。

(17) 弓庄城跡（中新川郡上市町）

(18) 普正寺遺跡、普正寺高畠遺跡（以上金沢市）、白山町遺跡（石川郡鶴来町）、長池キタバシ遺跡（石川郡野々市町）、長竹遺跡、乾遺跡、宮永ホジ川遺跡、中村ゴウデン遺跡、小川遺跡、宮保光明寺遺跡（以上松任市）、牛島ウハシ遺跡（能美郡寺井町）、白江梯川遺跡、佐々木アサバタケ遺跡（以上小松市）、敷地町後方遺跡（加賀市）。

(19) 下開発遺跡（能美郡辰口町）。

(20) 曽万布遺跡、武者野遺跡、朝倉氏遺跡（以上福井市）、諏訪間興行寺跡（吉田郡永平寺町）、平泉寺南谷坊院跡（勝山市）、松丸館跡（大野市）。

(21) 小谷城跡（東浅井郡湖北町）、観音寺城跡（蒲生郡安土町）。

(22) 清州城下町遺跡、朝日西遺跡（西春日井郡清州町）、名古屋城三ノ丸跡（名古屋市）。

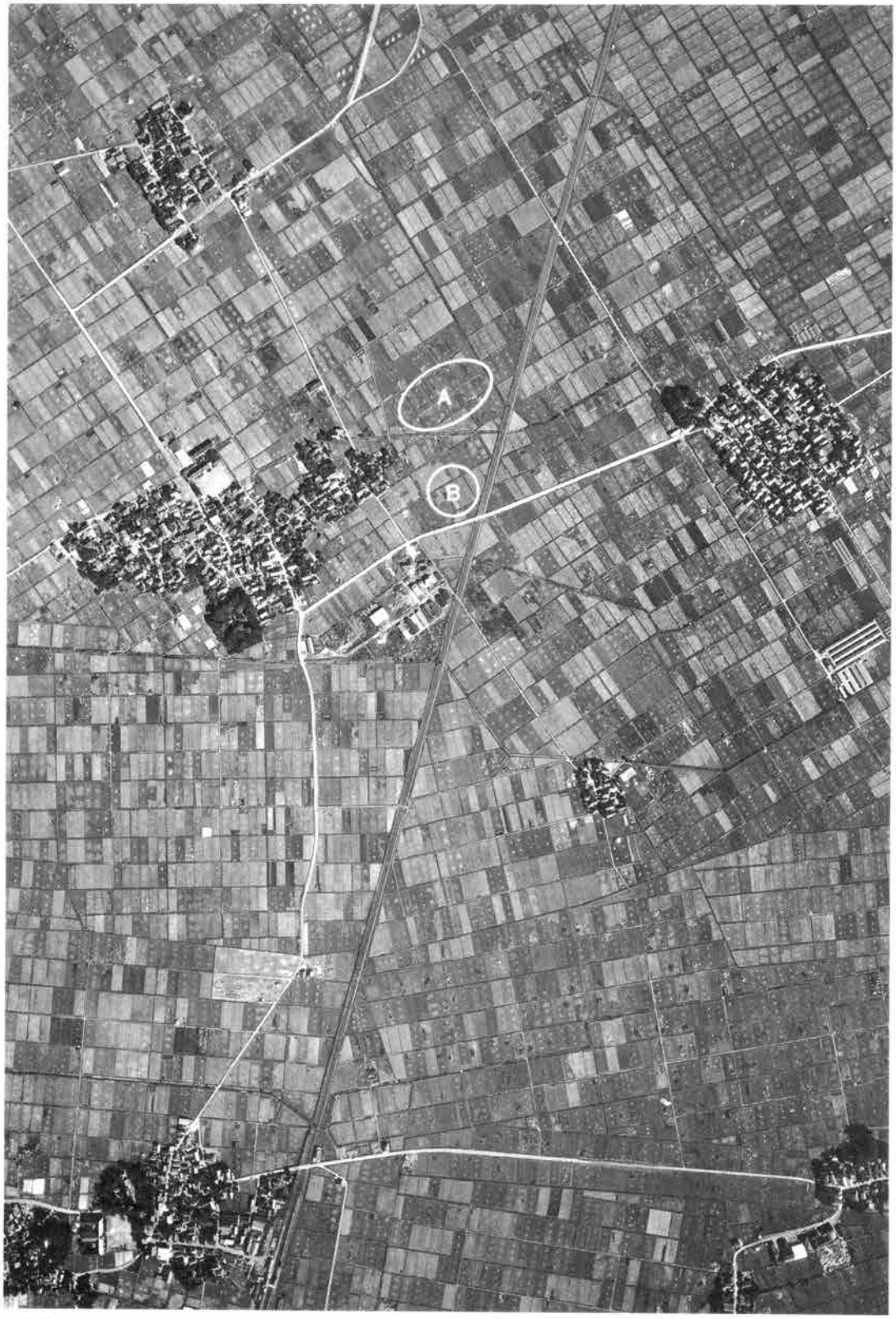
(23)　ともに大坂城三ノ丸跡（大阪市）であるが、出土地が離れているので2箇所と数えた。

(24)　資料の実見にあたって南洋一郎、岩田隆両氏のお世話になった。記して感謝したい。

(25)　形状が朝倉氏遺跡のものと近似しており、福井県より搬入された可能性が高い。実見にあたって山崎清和氏のお世話になった。記して感謝したい。

図　　版

図版第1　空中写真



宮保光明寺遺跡（A）と宮保館跡（B）　1:(10,000)

(1)　遺跡遠景（北から）

(2)　遺跡遠景（南から）

(1)　調査区全景（西から）

(2)　調査区全景（東から）

図版第4　遺構

(1)　第1区全景（東から）

(2)　第1号～第3号土坑・第5号溝（東から）

(1) 第1号土坑

(2) 第2号土坑

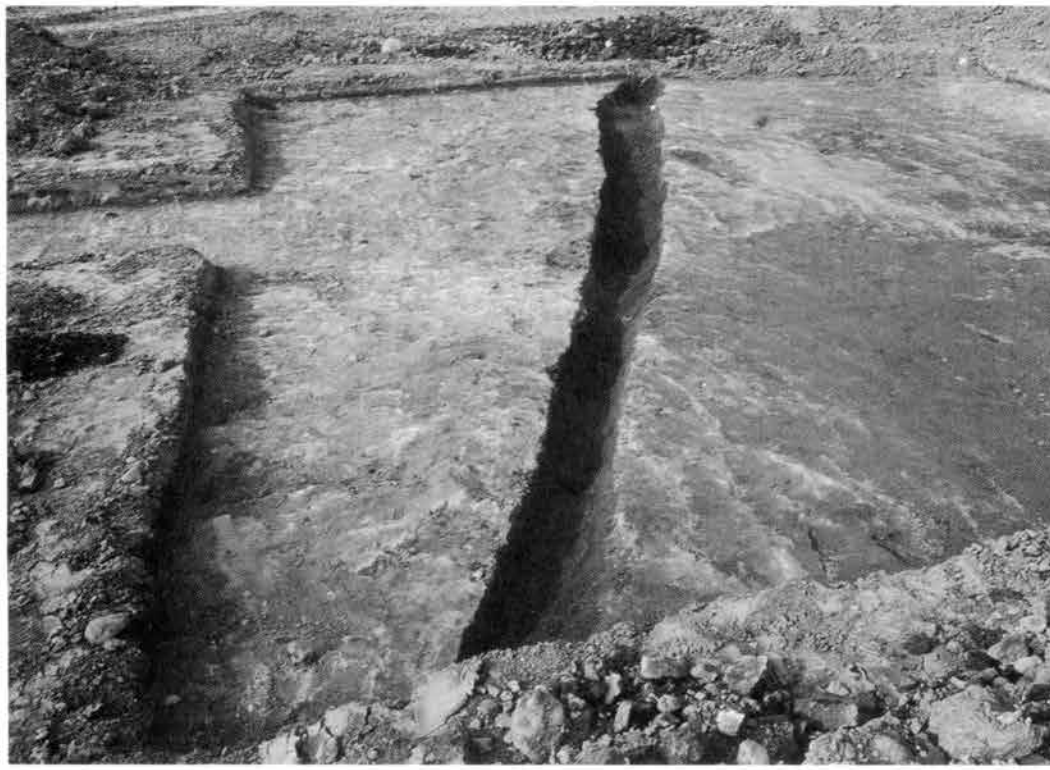
(1) 第2号土坑内の木製品（俎板と曲物底板）

(2) 第2号土坑

(1)　第1号溝（東から）

(2)　第2号溝（東から）

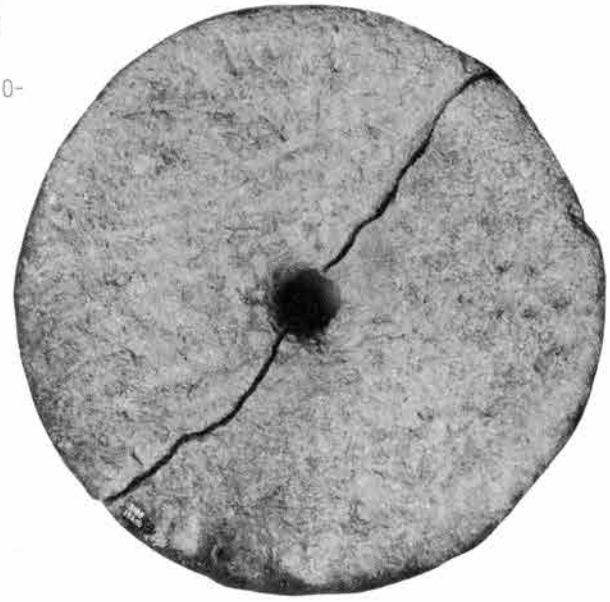
(1)　第4号溝（西から）



(2)　木曽街道側溝（南から）

11-

10-



12-2

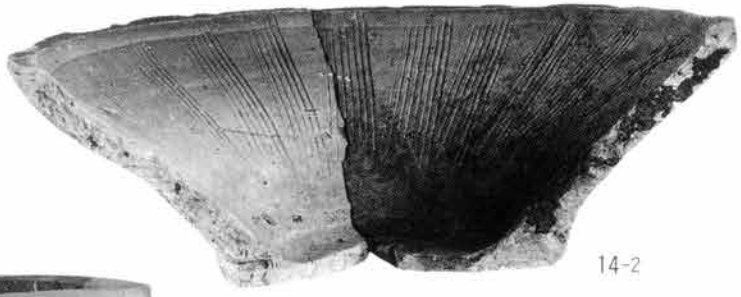
13-

第2号土坑出土遺物(1)

12-1

14-1

15-1



14-2

16-1

15-2

第2号土坑出土遺物(2)　　1/3,1/4（14-1・2,16-1）

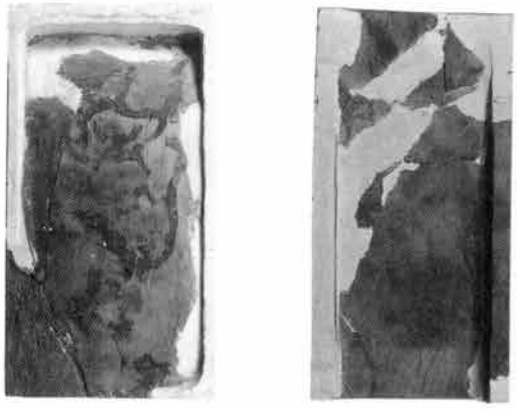


表 17-1 裏

表 17-2 裏

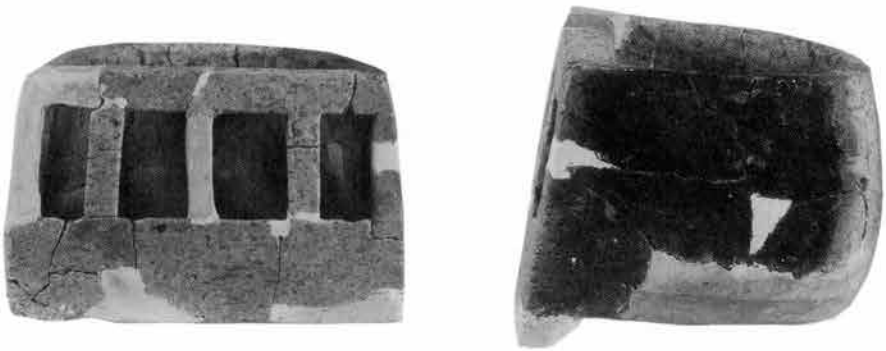
17-5

17-4

17-6

17-8 17-7

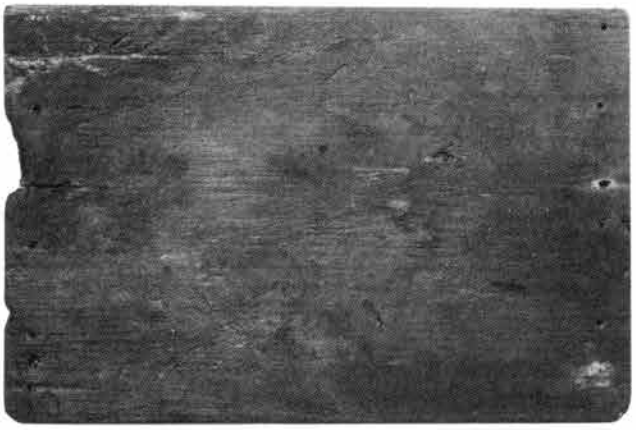
17-9 17-10 17-11 17-12



17-3

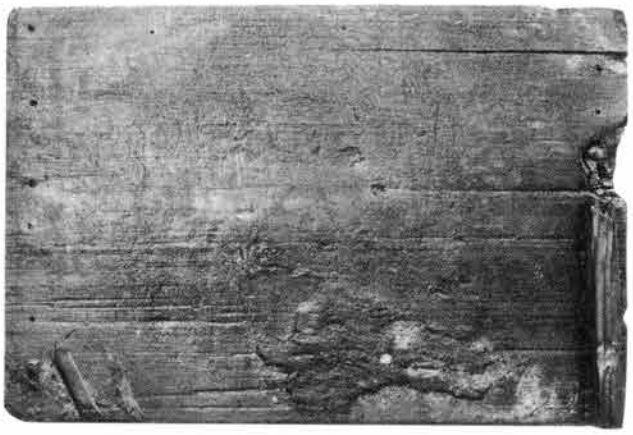
第2号土坑出土遺物(3)

1/2(火打石)、1/3、1/4 (17-3)



18-

19-2



19-3

19-1

19-4

19-5

19-6

19-7

19-9

第2号土坑出土遺物(4)

1/2(縄)、1/3、1/4(18)

溝・包含層出土遺物

1/3,1/4 (21-17)

第２編　宮保館跡

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 ……61

第１節　調査の経緯 ……61
第２節　発掘調査の経過 ……61
第３節　出土品整理・報告書 ……61

第２章　調査区の概要と層序 ……63

第１節　第１調査区 ……63
第２節　第２調査区 ……63

第３章　遺構 ……64

第１節　第１調査区 ……64
１．堀・旧河道、２．溝、３．土坑ほか、４．石組遺構、５．塀、
６．ピット
第２節　第２調査区 ……72

第４章　遺物と遺構の時期 ……73

第１節　遺物 ……73
１．Ⅰ期、２．Ⅱ期、３．その他、４．土器組成と流通
第２節　遺構の時期 ……77

第５章　まとめ ……79

挿　図　目　次

第１図　宮保館跡調査区位置図（Ｓ＝1/2,000） ……62
第２図　宮保館跡第１調査区全体図（1/200） ……65・66
第３図　第１調査区遺構図・土層断面図（1/100） ……67・68

第４図　遺構土層断面図（1/60）……70
第５図　石組遺構実測図（1/60）……71
第６図　第２調査区全体図（1/150）……72
第７図　出土遺物実測図(1)（1/3）……74
第８図　出土遺物実測図(2)（1/3）……75
第９図　出土遺物拓影（1/3）……77
第10図　宮保館跡復元案……79
第11図　中世成立期の加賀平野部の領主群……80
第12図　「上道氏次第」による上道氏系図の一部……81

表　目　次

第１表　遺物観察表……76
第２表　宮保館跡出土土器の組成……77

写真図版目次

図版１　第１調査区全景、１～４区……85
〃　２　１～４区、３・４区南堀……86
〃　３　５区、１～７区……87
〃　４　６・７区南堀付近、７区……88
〃　５　６区南堀と塀跡、同上……89
〃　６　７区石組遺構、同上……90
〃　７　７区石組遺構完掘、８～12区……91
〃　８　８区SK-02、８・９区SX-02付近上層……92
〃　９　８・９区SX-02付近下層、９区SX-04内炭化物層……93
〃　10　10区西堀、同上断面……94
〃　11　10～12区、８～12区……95
〃　12　範囲確認調査第３トレンチ、同上第２トレンチ……96
〃　13　第２調査区全景、井戸状遺構……97
〃　14　出土遺物……98

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

本調査は県営ほ場整備事業宮保地区宮保工区にかかるもので、県耕地整備課の依頼により実施した。当該遺跡は、昭和59年12月及び同63年10月の同事業にともなう分布調査により中世の遺跡としてその所在が確認されたものである。協議の結果、田面工事は盛り土保存とし、排水路敷のみを記録保存の対象とした。発掘調査は、石川県立埋蔵文化財センター（担当北野博司）が平成元年６月６日～同７月４日にかけて、約300㎡を対象に現地調査を実施した。

第２節　発掘調査の経過

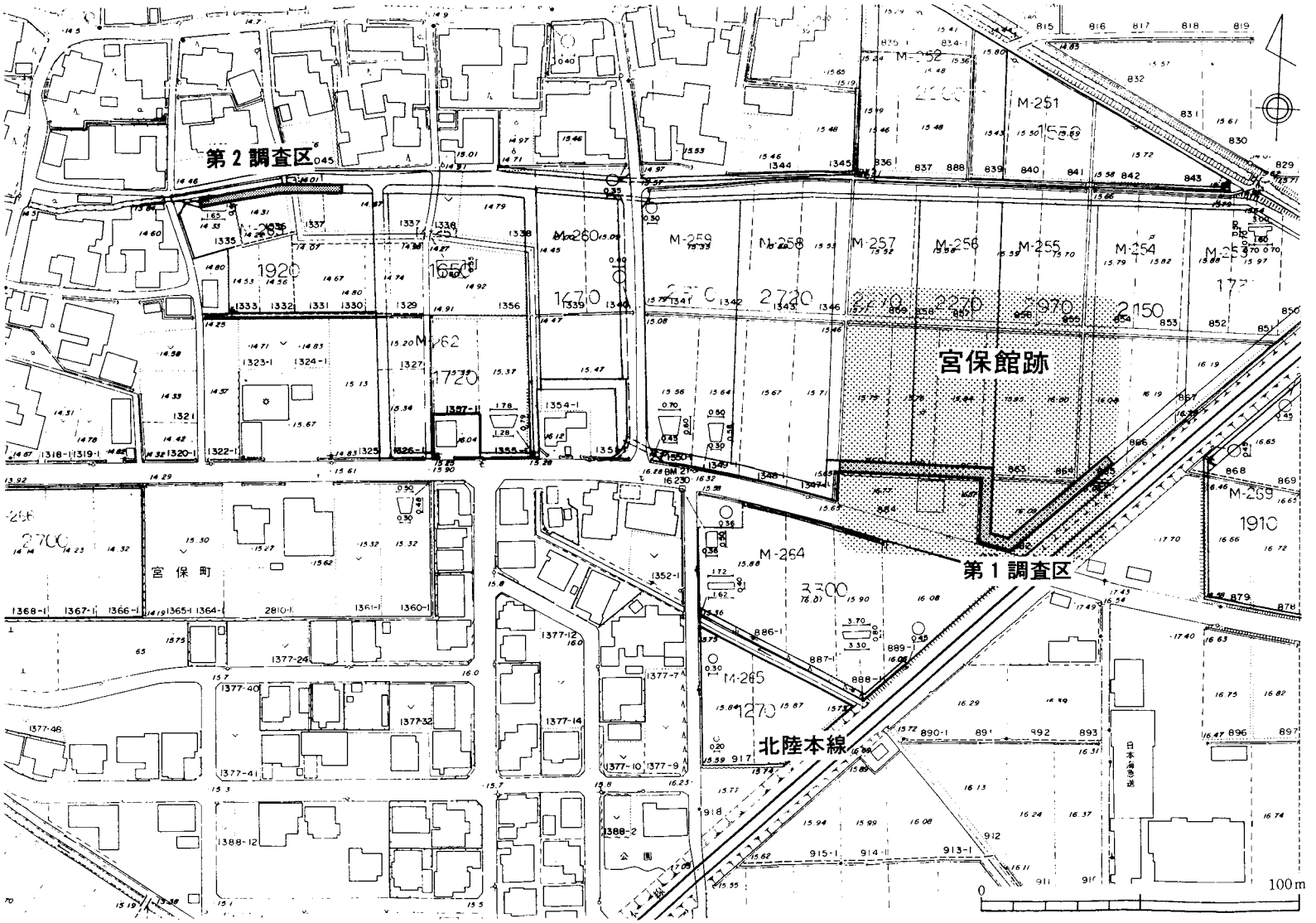
６月６日に調査器材を搬入し、７日に重機により表土除去を行う。８日と12日に７区までの遺構検出を行い、３～４区にかけての南堀を調査する。13日に６区の南堀と柱列（板塀跡）を調査し、14日～20日に７～９区付近の遺構検出、石組遺構、SK-02、柱穴群などの調査を行う。22･23日に西堀とSX-02などを調査する。26日、トレンチを拡張して東堀を追求し、第２調査区の調査を実施する。27日～７月４日に実測作業を行い、現地作業を終了する。なお、７月５日に堀跡の範囲確認のため周辺部の試堀調査を実施した。

発掘作業員（順不同）　円角園子、横井澄子、横川長一、東川嘉孝、山本　幸、東元豊子、藤田美和子

第３節　出土品整理・報告書

出土品整理は主に、平成２年度に（社）石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。報告書の執筆・編集は平成２年度に本センターにおいて行った。

石組遺構調査風景



第1図　宮保館跡調査区位置図

第２章　調査区の概要と層序

第１節　第１調査区

調査前の現況は水田で、付近一帯は地元の一部で「サラシバ」と通称される部分にあたるが、地名の由来については定かではなく、遺跡に関する伝承等は聞かれなかった。発掘調査に当たっては計画排水路のセンターを基準に幅２ｍの調査区を設定し、10ｍごとに基準杭を設置した。区の呼称は東北端から順に１区、２区、３区…とした。４－５区の屈曲部は134°06'、５－６区、７－８区は共に90°を測る。範囲確認調査は１区の東堀確認トレンチを第１トレンチとし、反時計回りに第２、第３…として、堀跡の広がりの確認に努めた。

遺跡は中世の堀に囲まれた館跡と推定され、１区の東堀を東限、４区と６区の南堀を南限、10区の西堀ないしは12区の旧河道を西限とする、比較的小規模にまとまった範囲に展開しており、旧の水田１枚毎に試堀した分布調査（昭和59年度）による遺跡の広がりと非常によく合致している。

遺構検出面は20～40cmと概して浅く、耕作土下は数cmの床土・旧耕土を介して中世期の遺物包含層である灰褐色土に達する。検出面は概ね黄褐色のシルト～砂層であるが、３～４区、６～７区付近は礫層が露呈し、微地形は周囲より高かったと推定される。８区付近では、遺構の堀り込み面が少なくとも２層確認でき、出土遺物からみても２時期ものが複合していると考えられる。

第２節　第２調査区

現況は水田であるが、西側と中央部は既設の幹線水路があり調査不能であった。遺構検出面までは第１調査区同様浅く、層序は耕作土（15～20cm）下に現在の水田区画以前とみられる旧河道の埋土に続く黄灰色細砂層（20cm前後）があり、直下は黄褐色のシルト～砂層の地山となる。遺構面は削平を受けるなどかなり攪乱されているようで、当初、中世の遺跡とされたが、当該期の遺構、遺物は確認できなかった。近世の土器がわずかに出土したに過ぎない。

第3章　遺　　構

第1節　第1調査区

1．堀・旧河道

東堀（1区）　当初の調査区で溝の西肩をわずかに確認し、北側への拡張トレンチおよび範囲確認調査で東肩を確認した。幅約5.0m、検出面からの（以下同様）深さ0.7mを測る。幅広で緩やかに落ち込む。底は全掘していないため形状は不明であるが、調査部分からは比較的平坦と推定できる。埋土は粘土質の暗灰色土を主体とする。両岸よりからは長20～30cm前後の大形の礫が大量に出土した。堀の機能喪失後投棄されたものか。

南堀（3・4区）　最大幅約5.0mを測るが、東よりでは北側が収束気味となる。中央のやや深い部分は幅約2.2mを測る。深さは0.65m。1区の東堀同様、幅広で緩やかな掘込みを持ち、両岸よりからは大形の礫が大量に出土した。埋土は、均質でしまりのない茶灰褐色土を主体とし、特に埋め戻された形跡は認められない。北岸よりにはピット状のへこみがあり、6区の柱穴列につながる可能性がある。

南堀（6区）　幅2.3mで、柱穴列の掘込みをいれると約3.5mとなる。深さ0.8m。堀の形状は、幅が比較的狭く、断面逆台形の丁寧な掘込みを持つのが特徴である。埋土は図のとおりであるが、3・4層には径15～20cm前後の大形の礫を含んでおり、3′には細かい礫が多かった。

西堀（10区）　幅3.2m、深さ0.4m。掘込みは浅いが明瞭で、溝底は平坦となる。埋土は、西約3/4 が径10～20cm前後のほぼ均質な礫で充塡されていた（写真図版10）。東よりと最下層には礫は含まない。

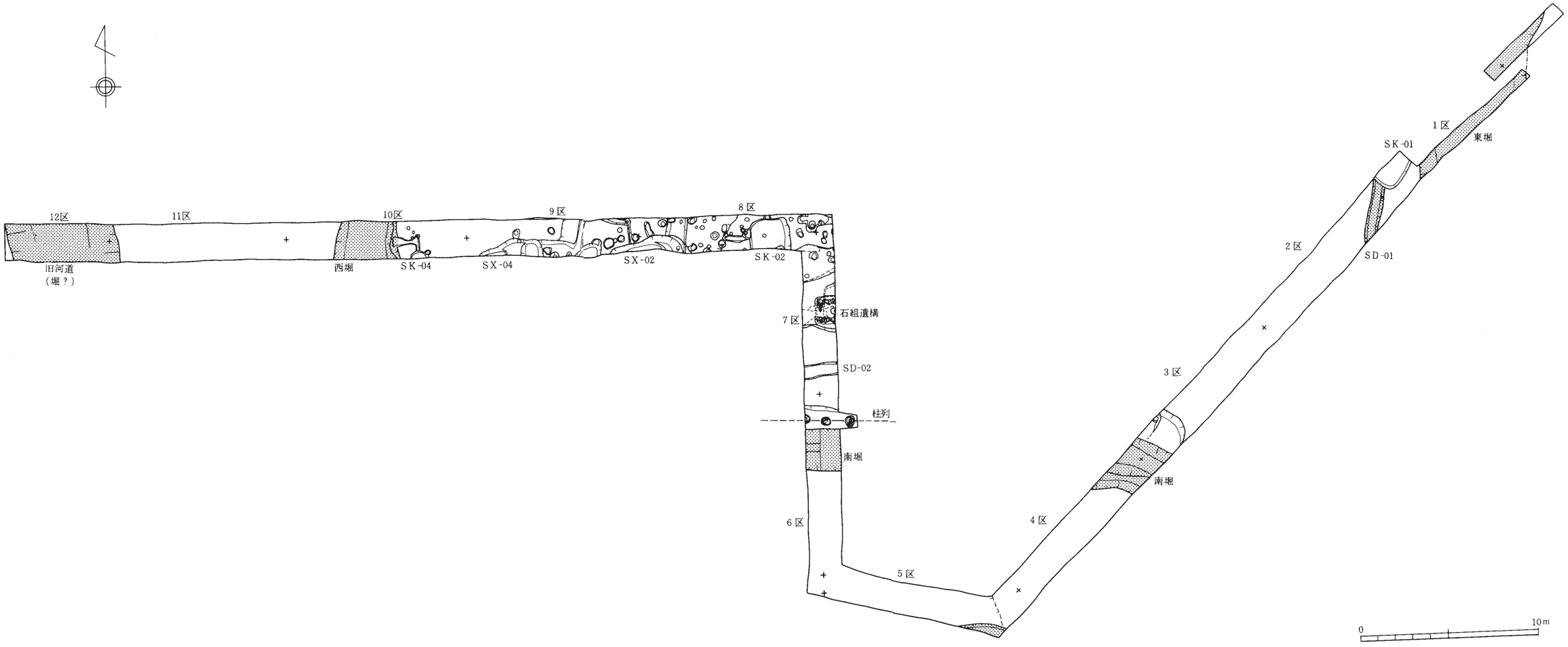
旧河道ないしは西堀（12区）　幅約6m、深さ約0.9mと大形で深い。埋土は有機質に富む帯青暗灰褐色土を主体とする。規模等から北西方向流れる旧河道と推定したが、礫をさほど含まず、明確な水流を示す砂層の堆積もないことから、堀の機能を持ったものかもしれない。

そのほか、5区東よりで南側への落ち込みを確認しており、旧河道ないしは堀跡の可能性も考えられる。

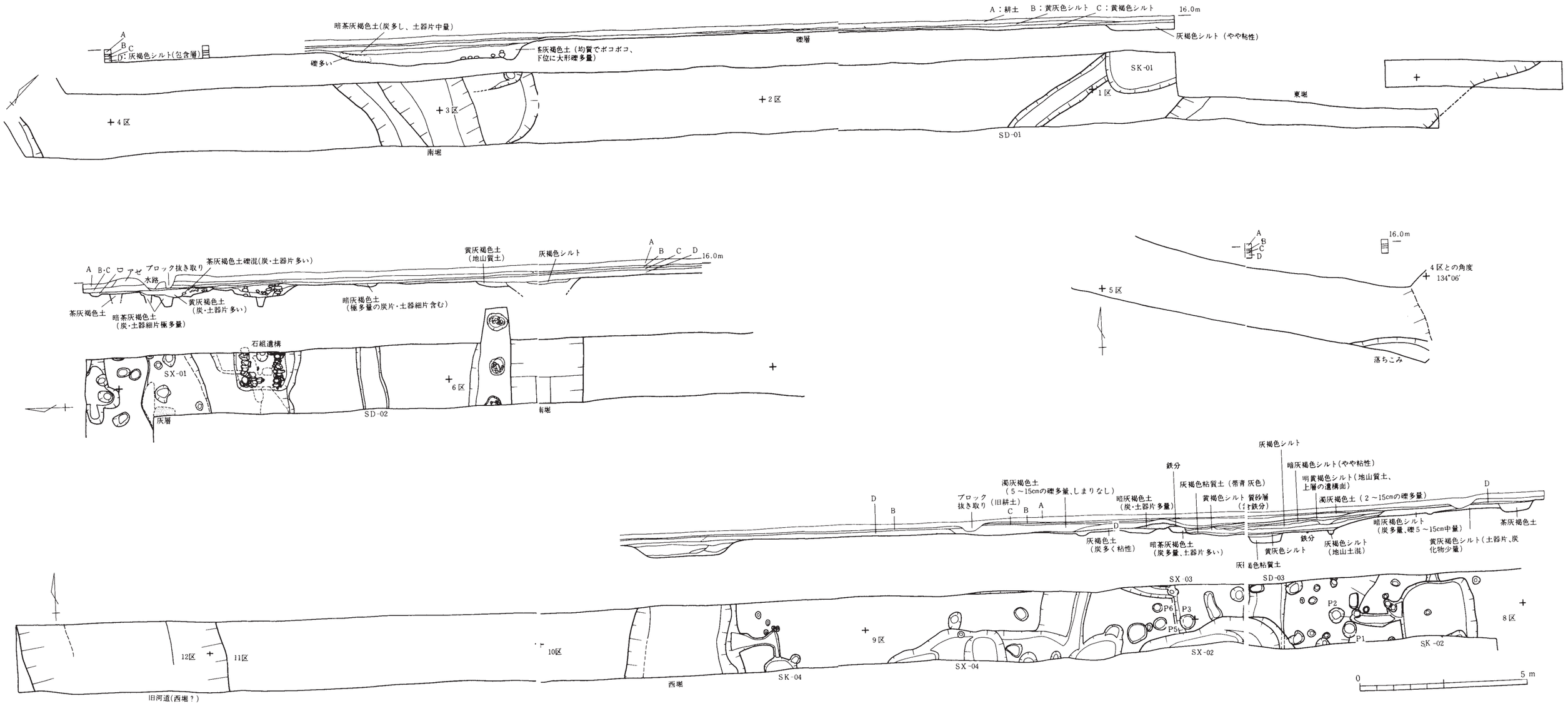
2．溝

SD-01　1・2区境で東堀に平行して検出された溝で、幅0.75m、深さ0.2mを測る。埋土は西堀に類似し、径約10cmの礫で充塡されており、礫間は濁灰褐色土が埋める。SK-01に切られている。礫中より加賀の鉢の破片が出土した。

SD-02　7区で南堀や柱穴列に平行して検出したもので、幅0.7m、深さ0.1mと小規模で浅い溝である。埋土は暗灰褐色土で、極多量の炭粒と土師器細片を含んでいた。



第２図　宮保館跡第１調査区全体図



第３図　第１調査区遺構図・土層断面図

SD-03　8区の落込み内で検出したもので下層遺構にあたる。南北方向に伸び、SX-02により切られている。幅1.2m、深さ0.3mで断面箱形を呈する。

3．土坑ほか

SK-01　1区でコーナーの一部を検出したに過ぎず全体像は不明である。SD-01を切って構築されている。深さ20～25cm、埋土はやや粘性を帯びた灰褐色土であり、珠洲の甕片1点が出土した。

SK-02　8区で検出した略方形とみられる竪穴状の遺構である。規模は東西2.3m、深さ0.4mを測る。南東隅に若干深い部分がある。埋土は地表面の高い東側から埋まったような堆積状況で、最下層の東側には炭粒が濃密に分布する。最下層には土師器細片が多数含まれ、加賀の鉢片が1点出土した。その上面は地山質土が主体で廃棄に際しては埋め戻された形跡がある。

SK-04　西堀の東で検出した深さ約30cmのピット状の遺構で、L字形の細い溝が西堀とをつなぐ。周辺には径20cm弱、深さ5～10cm程度の小ピット群があり、西堀に関連する遺構の可能性がある。

SX-01　8区の北側で、石組遺構とSK-02の間に存在する幅約1.5mの溝状のへこみである。西端には厚さ約5cmの黒色炭灰層があり、その一部がSK-02に流れ込むように堆積することや位置関係から両遺構とは何等かの関連性を持つものと思われる。埋土からは炭化物や土師器細片がかなり多量出土した。調査区東壁よりには柱穴様のピットが2基認められた。

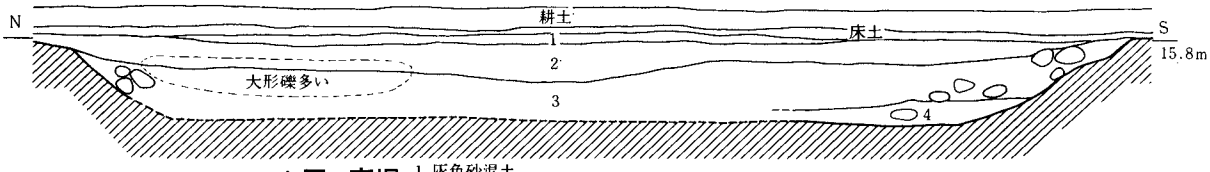
SX-02　8・9区境で上層から掘り込まれた大形の土坑状遺構である。規模は南壁で幅5.3m、深さ0.9mを測る。埋土は最下層を除き、大形礫を含む地山質土が主体で廃棄に際しては埋め戻されたと考えられる。埋土中からは土師器のほか、瀬戸・美濃の天目、珠洲の鉢、瓦質土器などが出土している。また、東側の肩部付近の第1層からは加工した凝灰岩片が出土した。

SX-03　8区で検出した幅約6.5mの大きな落込みである。底は鉄分が堅く沈着する。上層遺構はこの遺構の最上層の整地土とみられる地山質土を遺構面としている。断面図のとおり（第3図）西側には畦状の高まりがあって、SD-03の溝と対応した古い段階の堀と土塁の可能性がある。

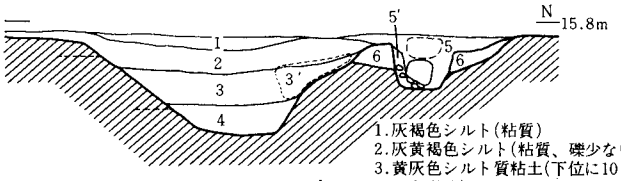
SX-04　9区の南壁ぎわで検出したもので、明確な遺構としての輪郭はつかめないが浅い落込みに土坑状のへこみがいくつか認められる。そのひとつには黒色灰層で充塡されたものがある（第4図）。

4．石組遺構（第5図）

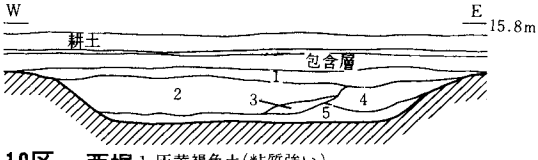
7区の地山が礫層となったところに位置する。掘り方の幅は2.0m、深さ0.35m、中央がピット状でさらに0.3m深くなる。石組は南北は明瞭だが西辺は南半に大形礫がなく北半も不明瞭である。石積みは内側に面を揃えるように並べており、北は2段、南は最高4段が確認できた。石組の幅は内法で0.8cm、高さ0.3mを測る。石組内には壁の崩落とみられる礫がおちこんでおり、土師器細片のほか珠洲の甕胴部片1点が出土した。石組の西側の径10～15cmの礫の集塊は間に粗砂



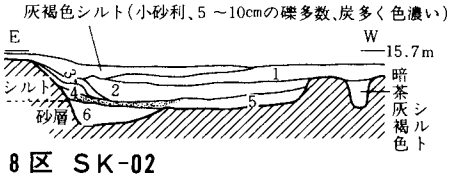
1区　東堀
1.灰色砂混土
2.黄灰褐色シルト(粘性弱い、大形礫少ない、包含層に続く層)
3.暗灰色シルト(粘土質、大形礫含む)
4.暗灰褐色シルト(粘土質、炭化物・腐植物多量)



6区　南堀
1.灰褐色シルト(粘質)
2.灰黄褐色シルト(粘質、礫少ない)
3.黄灰色シルト質粘土(下位に10～20cmの大形礫)
3'. 5～15cmの細かめの礫多量
4.明青灰色粘土(15～20cmの大形礫多量、大形炭片多い)
5.茶灰褐色土(炭・土器片多い)
5'. 地山質土混
6.黄灰褐色土(地山質土混、炭化物少量、土器細片少量)



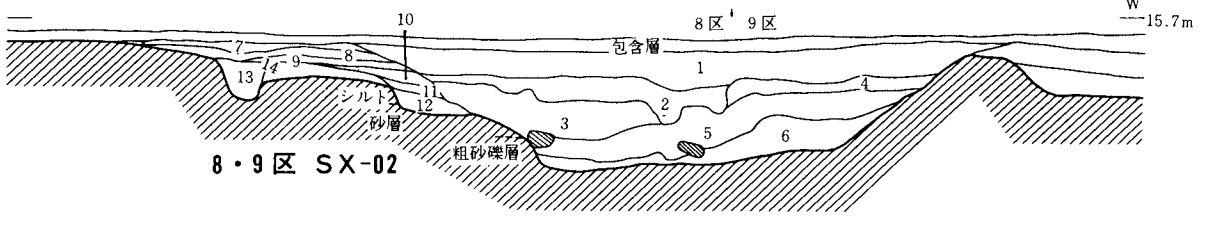
10区　西堀
1.灰黄褐色土(粘質強い)
2.濁灰黄褐色土(地山質土、10～20cm礫多量)
3.明灰黄褐色シルト (礫なし)
4.灰黄褐色シルト(地山質土)
5.黄灰褐色シルト(炭化物中量)



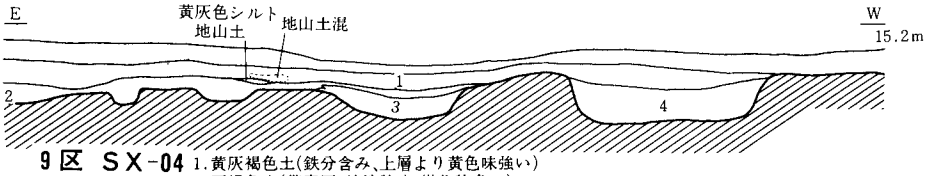
8区　SK-02
1.灰褐色シルト(上層と同じで色はややうすい)…包含層
2.黄灰褐色シルト(地山土、礫少量混)
3.濁黄褐色地山質土
4.下層より色濃い(炭、土師器片多い)
5.茶灰褐色シルト(炭、土師器細片多い、加賀鉢出土)
6.黄灰色シルト(粘性強い、炭化物少量)

1.濁灰褐色土(大形礫多量)
2.明黄褐色地山土＋灰褐色土(礫なし)
3.濁暗灰褐色土(地山土混)
4.　〃
5.6層＋明黄灰色地山土(西より上位で天目出土、大形礫含む)
6.暗青灰色粘質土(炭化物多量)
7.黄褐色地山質土(上層遺構面)
8.灰褐色シルト(粘性、炭化物土器片含む)
9.明黄褐色シルト質砂層

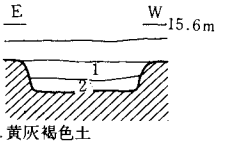
10. 灰褐色粘質土
11. 黄灰色シルト(粘性)
12. 黄灰褐色粘質土(SD-03)
13. 暗茶灰褐色シルト(下層ピット)
14. 濁黄灰色シルト(炭化物・土器片含む、灰褐色土混)



8・9区　SX-02



9区　SX-04
1.黄灰褐色土(鉄分含み、上層より黄色味強い)
2.灰褐色土(帯青灰、粘性強く、炭化物多い)
3.黒色灰層
4.暗灰褐色粘質土(帯青灰)

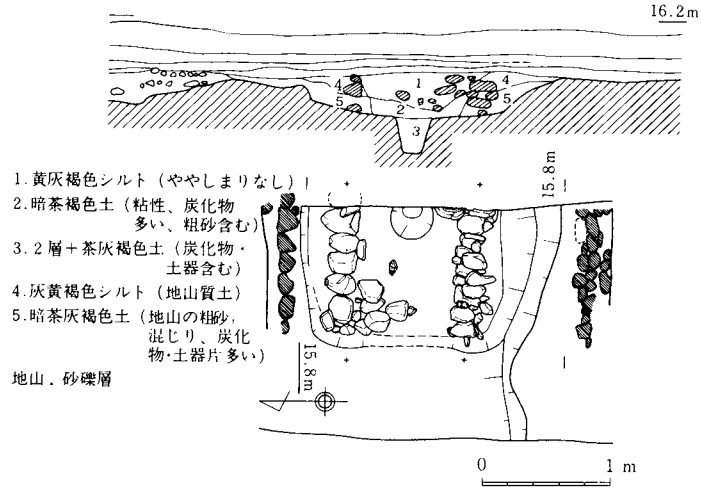


1.黄灰褐色土
2.暗灰褐色粘質土(帯青灰色)

第4図　遺構土層断面図

0　2 m

や小礫を含まず、周囲の礫層とは区別できるため、人為的に集積されたものと考えた。石組遺構の性格を特定するような点は確認できなかった。



第5図　石組遺構実測図

5．塀

6区の南堀に北接して検出した柱穴列で、3基が東西に並ぶ。ピットは堀の北側に浅く溝状に掘り込まれた部分にあり、径50～60cm、深さ40～50cm、いずれも底に径10cm前後の礫を根固め状に持つ。柱間は1.1m、1.4mを測る。西壁のピットからは、柱抜取り後に入れられたとみられる大形の礫が2個出土した。堀に平行した「板塀」の跡かと推定されるが、根固めを持つ点がその構造にどう反映したか問題であろう。

6．ピット

8・9区と7区の北半で柱穴様のピットがいくつか検出された。素掘りで径50cm前後、深さ50cm前後のものが主体を占める。SX-03付近では、その上面から掘り込まれるものと下面からのものの2期のものがある。この周囲には掘立柱建物が立てられていたと推定される。

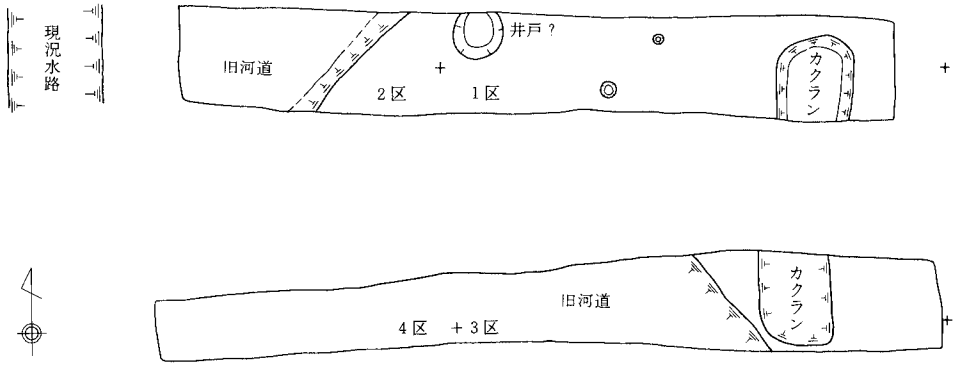
SX-02調査風景

第２節　第２調査区

旧河道を除いて遺構として捉えられたものは、井戸状の掘り込みとピット２基のみである。井戸状の掘り込みは、直径1.0m、深さ0.6m以上の円筒形を呈し、10～15cm前後の礫混じり灰褐色シルトで埋まっていた。出土遺物はなく時期・性格とも不明である。

中央部の旧河道は、埋土が10cm～15cmの礫混じり黄灰色砂層で、北東から流れたとみられる。西側の旧河道は、埋土が黄褐色～黄灰色粗砂層で、南東方向から流れたとみられる。両者は蛇行した同一の河道と推定される。

遺物は須恵器１点と近世の磁器が数点出土したのみである。第８図９は18世紀代のものと考えられ、井戸状の遺構やピットがこの時期である可能性がある。



第６図　第２調査区全体図

0　5 m

第４章　遺物と遺構の時期

第１節　遺物

出土遺物の時期は大まかに２期に分けられる。

１．Ⅰ期

非ロクロ系の土師器皿（第７図４～11)、鍋（第７図14)、青磁（第７図16～19)、加賀（第８図１・２)、珠洲（第８図３・６)、山茶碗の皿（第８図７）などがあげられる。

土師皿のうち第７図２・３は同一個体とみられ、ともに底部に回転糸切り痕をもつ。胎土は灰白色でシルト・砂粒分の少ないものである。Ⅰ期の中でも古い時期のものと考えておきたい。その他の土師皿は赤褐色粒で調製した浅黄橙～橙色の発色を示し、若干のシルト分をもつ胎土が主体を占めるが、バラエティーがあって分類はできていない。鍋は口縁部の小片であるが、辰口西部遺跡群（藤田ほか1988）出土の同期のものに比べて、内湾度が弱く、端部の面取りの幅・角度が異なっており、地域差の可能性がある。第７図15は全体の器形は不明であるが、非ロクロの在地産土器とみられる。

青磁は龍泉窯系の碗、同安窯系の碗などがある。第７図19は香炉で緻密なガラス質の磁胎をもつ。白磁はただ１点SK-02から出土しており、糸切り痕をもつ土師皿の段階のものと考えられる。

中世陶器は、珠洲に吉岡編年Ⅱ期のものがあり、加賀もほぼ同期に併行する段階のものとして大過ないように思われる。山茶碗系の皿の出土は、流通上興味深い点と言えよう。

遺物の年代観からみて、一部12世紀代に遡るものはあるが、13世紀代に主体をおくものと考えられる。

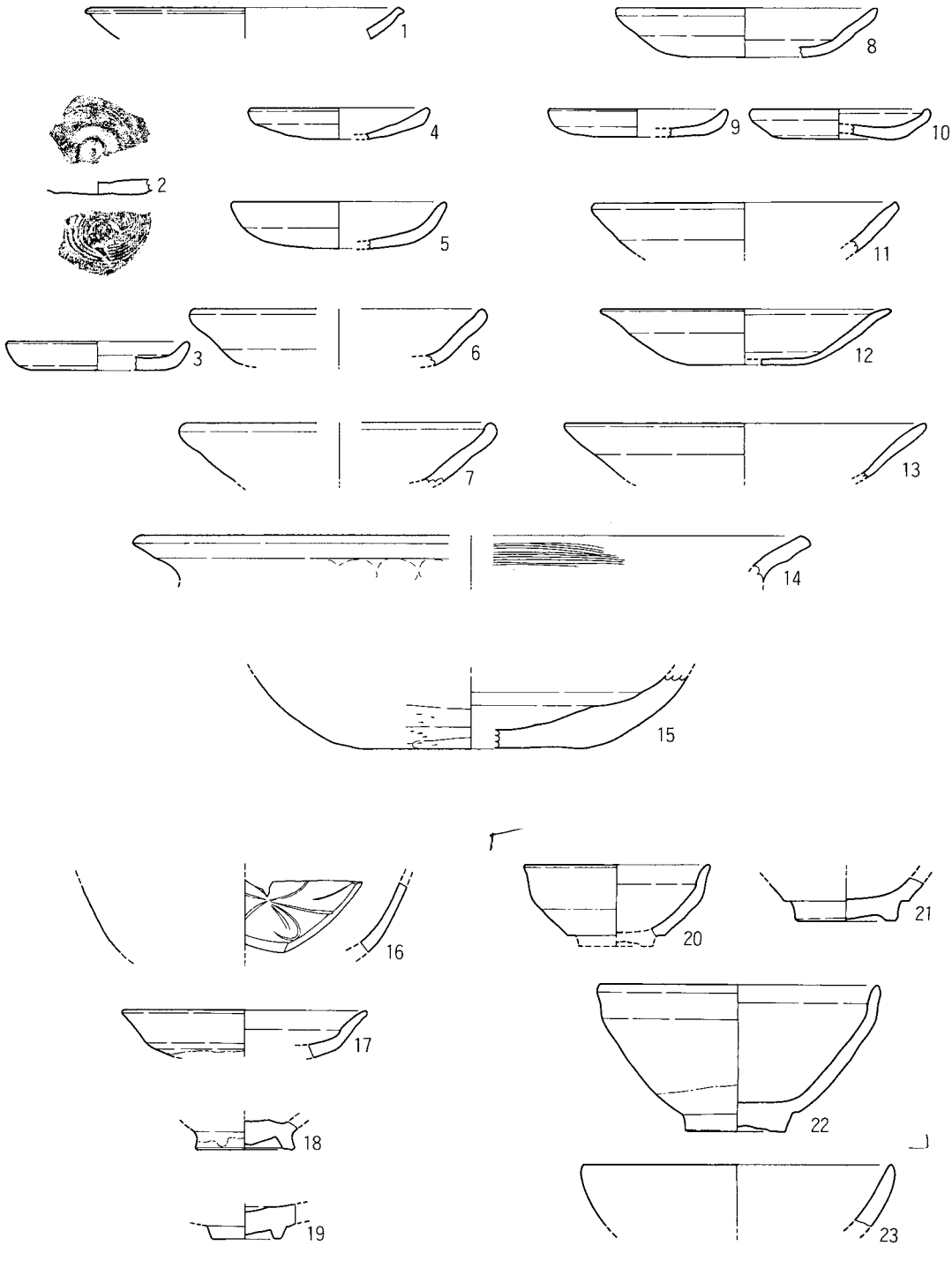
２．Ⅱ期

土師皿は第７図12・13の薄手で口縁部の外反するものがある。胎土は色調が灰白色を呈するものが主体である。

瀬戸の鉄釉天目碗は大小２種があり、いずれも15世紀代に位置付けられる。第７図22は胎土が黄色味を帯びた灰白色で、外底のケズリがロクロ回転左回りと他と異なっている。灰釉の製品は数点あるが、器形のわかるものはない。

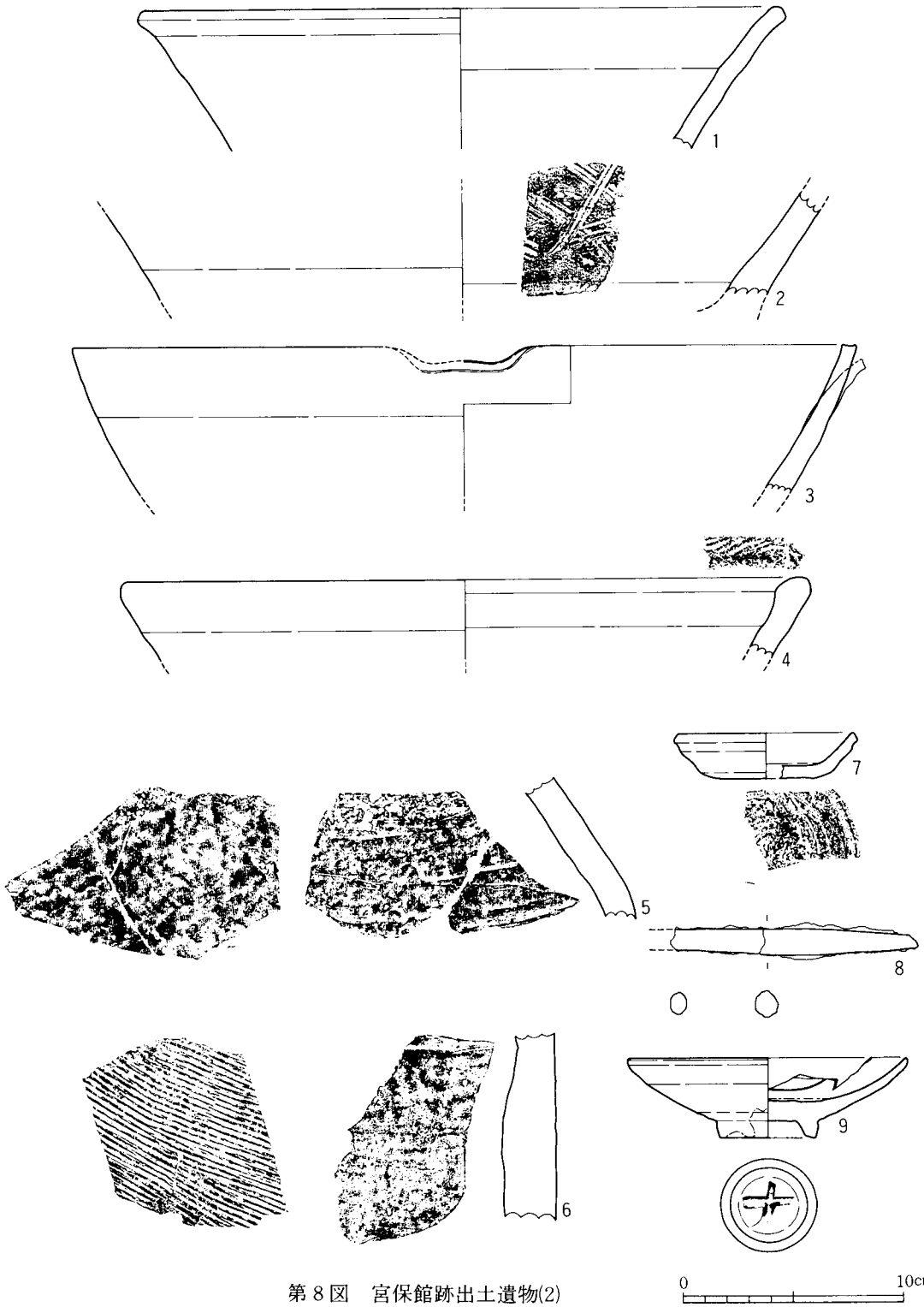
中世陶器は珠洲ではⅤ期の鉢（第８図４）があり、火炉とみられる瓦質製品が出土している。その他、加工痕があり加熱を受けた凝灰岩片が４点出土している。

これらはほぼ15世紀後半代を中心とするものであろう。



第７図　宮保館跡出土遺物(1)

0　10cm



第８図　宮保館跡出土遺物(2)

第１表　遺物観察表

第７図

番号	出土地点	器種	法量	備考
1	3･4 区 南堀	灰釉 皿	口径：14.3	
2	3･4 区 南堀	土師器 皿		外底糸切り
3	3･4 区 南堀下層	土師器 皿	口径：8.2 器高：1.3	外底糸切り
4	8 区 SK02上層	土師器 皿	口径：8.2 器高：1.4	
5	8 区 SK02上層	土師器 皿	口径：9.8 器高：2.1	
6	8 区 SK02上層	土師器 皿	口径：13.4	
7	8 区 SK02東上層	土師器 皿	口径：14.3	
8	7 区 SX02	土師器 皿	口径：11.6 器高：2.2	
9	7 区 SX02	土師器 皿	口径：8.0 器高：1.3	
10	6 区 SD-02	土師器 皿	口径：8.0 器高：1.9	
11	6 区 南堀	土師器 皿	口径：13.7	
12	8 区 SX02東	土師器 皿	口径：13.0 器高：2.5	
13	7 区 石組	土師器 皿	口径：16.2	内面に油煙痕
14	7 区 SX01	土師器 鍋	口径：30.4	
15	4 区 包含層	土師器 鉢		非糸切り、胎土中に海綿の骨片、赤褐色粒多く含む、体部外面にススあり
16	3･4 区 南堀	青磁 碗		龍泉窯系
17	7 区 SX01	青磁 皿	口径：11.0	
18	8 区 包含層	青磁 碗	底径：4.5	同安窯系
19	6 区南堀 上層の下位	青磁 香炉	底径：3.1	外面スミ付着
20	8･9区SX-03 周辺包含層	瀬戸 天目碗	口径：8.4	外面スミ付着
21	9 区 P6	瀬戸 天目碗	底径：4.6	
22	9 区 SX02西	瀬戸 天目碗	口径：12.6 器高：6.6 底径：4.5	漆つぎ痕あり
23	3･4 区 南堀	瀬戸 天目碗	口径：14.0	

第８図

番号	出土地点	器種	法量	備考
1	8 区SK02 東最下層	加賀 鉢	口径：29.9	
2	2 区SD01 レキ中	加賀 鉢	口径：36.1	
3	9 区P3	珠洲 鉢	口径：31.9	
4	8 区 SX02東	珠洲 鉢		
5	8 区 SX02東	瓦質 火炉		
6	7 区 石組内	珠洲 甕		大型品
7	7 区 SX01	山茶碗 皿	口径：8.4 器高：2.1	外底回転糸切り
8	8 区東 ピット	鉄製 刀子		
9	第2 調査区 東側	伊万里 皿	口径：12.8 器高：3.7 底径：4.4	外底に墨書「十」

３．その他

第７図１は灰釉陶器の皿で９世紀末頃とみられる。須恵器は８～９区付近の包含層から少量（破片数８、土師器２）が散発的に出土しており、時期は９世紀後半～10世紀初とみられる。本地区には当該期の遺構は認められず、周辺地域のいずれかの場所から何らかの理由で移動してきたものと推定される。

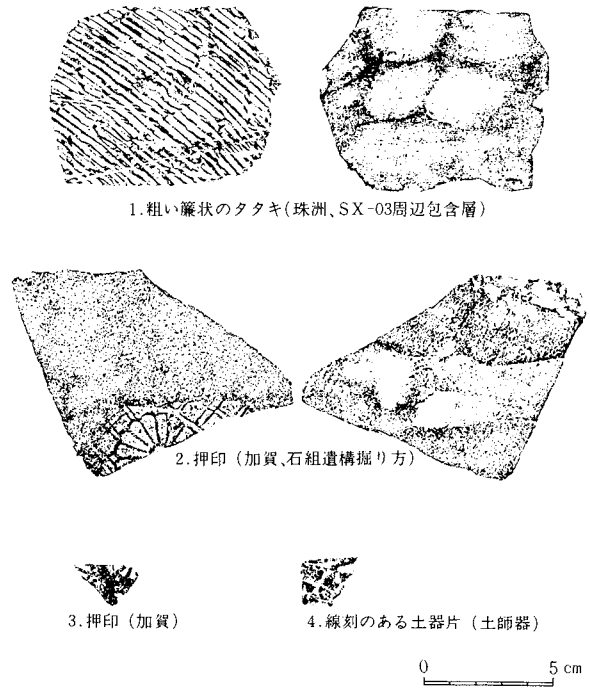
４．土器組成と流通

本遺跡（第１調査区）の土器組成を知るため破片数を数えた。出土遺物の総量はコンテナ２箱と少ない。結果は第２表のとおりである。

この数字は、Ⅰ期とⅡ期をあわせたものであるが、土師器は細片が多いせいもあり、全体では約97％と圧倒的多数を示める。食膳具類では、広域流通品の中で、瓦器碗、山茶碗の皿といった北陸での出土例の少ないものもあり、通常の流通外の方法で持ち込まれたものと推察される。土師皿以外ではⅠ期は青磁製品が主で、Ⅱ期は瀬戸の天目が主体である。Ⅱ期の明確な青磁製品は確認していない。

第２表　宮保館跡出土土器の組成(破片数)

	器種		破片数
食膳具類	土師器皿		2,194
	山茶碗皿		2
	瓦器碗		1
	白磁碗		1
	青磁碗皿		10
	瀬戸天目ほか		7
貯蔵・調理具	加賀	甕・壷	8
		鉢	6
	珠洲	甕・壷	8
		鉢	4
	越前	甕・壷	0
		鉢	1
暖房	瓦質	火炉	3
	土師器	火炉	3
煮炊	土師器	鍋	2
生産	土師器	土錘	2
その他	青磁	香炉	1
	瀬戸	不明	2
	土師器	不明	1
合計			2,256



第９図　出土遺物拓影

貯蔵・調理具は本地域を流通圏とする在地産中世陶で占められる。全時期では加賀と珠洲が拮抗し、甕・壷と鉢の割合でも同様である。時期別にみると、明確にⅡ期の珠洲の鉢とみられるものが２点あるのに対して、加賀ではⅡ期のものがないため、Ⅰ期に限れば加賀の占める比率が高いと言えよう。

その他、暖房用の火炉（風炉）は、器面を平滑に調整した瓦質製品と、橙褐色土師質の２種がある。いずれもSX-02出土でⅡ期のものであるが、それぞれ搬入品、在地品とみられ、生産地がどこなのか興味深い。

以上は、小規模な調査のため組成には偏りがあるとみられるが、参考までの数字として呈示しておく。

第２節　遺構の時期

堀　東堀は上下層から土師皿の細片が出土したが時期のわかるものはない。３・４区の南堀は土師皿や青磁などⅠ期の遺物が圧倒的多数を占めるが、わずかに瀬戸の天目碗（第７図23）などⅡ期に下るものも含んでいる。６区の南堀は土師皿、青磁、加賀などⅠ期の遺物を主体にする。明確にⅡ期と判断できるものはないが、使用痕のある軽石凝灰岩片が出土しており、この時期の

可能性を持つ。西堀は南堀に比べて遺物量が少なく時期の分かるものはない。ただ、ここでは埋め戻されたと推定する礫群中に、SX-02と同様の炉の縁石とみられる焼けた軽石凝灰岩片が含まれており、Ⅱ期のものの可能性がある。旧河道（西堀？）からの土器の出土はなかったが、埋積層位などからみて、ほぼ中世期に廃絶したものと観察された。

溝　SD-01からはⅠ期とみられる加賀の鉢が出土した。SD-02は土師皿の細片が炭に混じって多量出土したが、口縁部で形のわかるものはすべてⅠ期のものである。SD-03の出土遺物はないが、8区の下層遺構でありⅠ期の遺構と考えられる。

土坑ほか　SK-01からはⅠ期とみられる珠洲の甕胴部片が出土した。その他、山茶碗の皿、瓦器小碗の破片が出土している。SK-02は遺構中で最も出土遺物量の多いものであるが、Ⅰ期のものに限定される。SK-04の出土遺物はない。SX-01はⅠ期の土師皿が出土しており、遺構の上からもSK-02と関連のあるものと考えられる。SX-02は8・9区の上層遺構で、出土遺物もⅡ期のものが主体を占めている。SX-03は下層遺構で遺物もⅠ期の土師皿が出土している。SX-04はSX-02より層位的には古いが、出土遺物は、土師皿、加賀ともⅡ期のものを含んでいる。なお、本遺構からは火熱痕をもつスサ入りの粘土塊が出土しており、なんらかの工房があったと推定される。

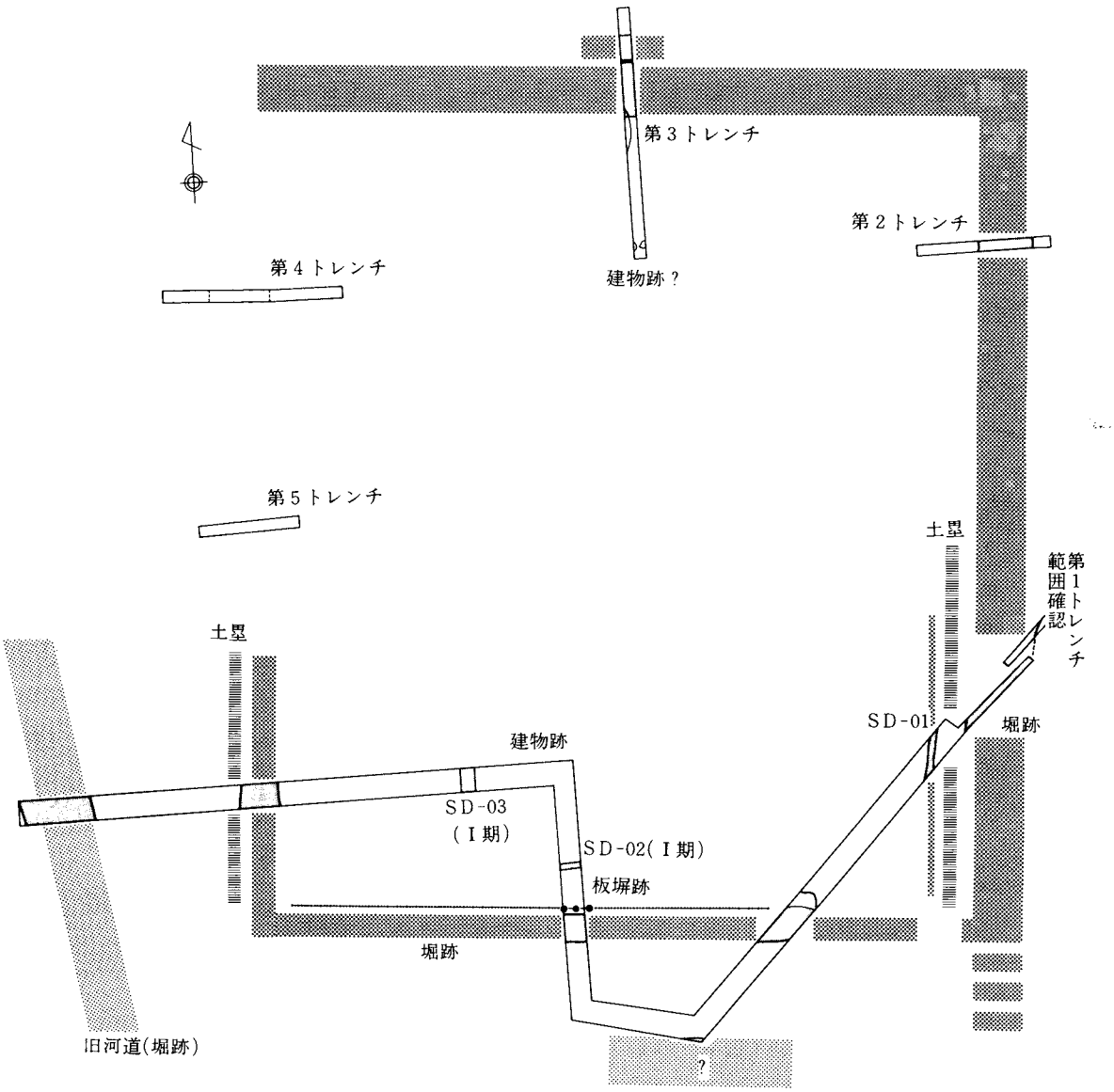
石組遺構　遺構の切り合い関係ではSX-01より新しい。Ⅰ期とⅡ期の遺物があり、2点ある後者の土師皿はともに灯火痕がある。掘り方からは押印をもつ加賀の甕片が出土しており、ダイテンノウダニ2号窯のもの（宮下ほか1990）に類似する（第9図2）が、タタキ板の縁が菊花上部と右側の格子部でズレているのが特徴である。ちなみに第9図3は中輪菊花の単一文でユノカミダニ窯に類品がある。

塀　時期を特定できる遺物はないが、遺構の切り合い関係では南堀と同時期かそれより新しい。ピットそのものからの出土ではないが、周囲からⅡ期の土師皿が1点出土している。

ピット　柱穴と推定する8・9区のピットは、上層から掘り込むもの（SX-02段階）と下層のもの（SX-03段階）があり、それぞれⅡ期、Ⅰ期に対応できると考える。P1、P2、P5は上層期、P3は下層期のピットである。

第5章　まとめ

今回の調査によって、第１調査区周辺は、中世の四周に堀を巡らす遺跡であることが判明した。遺跡名は、新発見当初から「宮保遺跡」と仮称してきたが、ここで遺跡の形態などからいわゆる「館跡」と考えられること、当該地の遺跡に関する伝承がなく明確な通称もないことから、「宮保館跡」とした。



第10図　宮保館跡復元案（Ⅱ期）

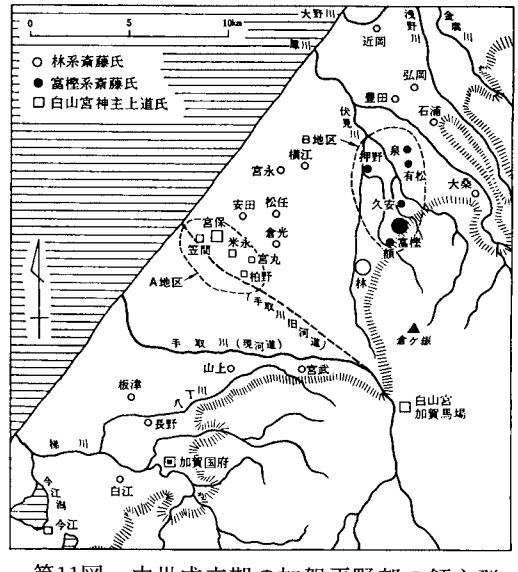
時期は13世紀と15世紀に中心をおくことは既に述べたが、小規模な調査のため14世紀代が全くの空白となるかは不明である。堀は遺物の出土状況からみて13世紀代には既に掘削された可能性が強く、館跡の成立時期をそこに考えておきたい。ただ、この段階での堀の配置が復元案（Ⅱ期）と同様であったかは今後の詳細な調査を待たねばならないだろう。その後、14世紀代に一旦廃絶ないしは衰退した後、15世紀代に堀を再利用（再掘削）して館跡が再興したものと考えられる。廃絶時期は15世紀末頃であろう。

館跡は、規模が堀の内法で南北約67m×東西約58mを測る「方形単郭館」とみられる。西堀を旧河道とした範囲まで広げると東西はその地点で約73mとなる。範囲確認の第２トレンチでは、黄褐色の小レキ混シルト～礫層の地山に幅4.5m、深さ0.6m以上の東堀の延長を確認したが、第４・第５トレンチでは、西堀の延長は認められなかった。より西側の旧河道（堀？）を西限とするものか、堀跡が単純な方形ではないためであろう。館跡の西方に「木曽街道」と呼ばれる中世の幹道が通っていたことを思えば、正面を西に向けた館の施設配置が考えられ、この点と何らかの関係があったのかもしれない。第３トレンチでは２重の北堀を確認した。規模は内側が幅約4.6m、外側が幅約2.1mで、深さは、完堀していないため不明であるが、外側が約0.4m前後、内側は1.0mを越えるとみられる。内側の堀の南よりには大形の礫が多量に認められた。十分な断面観察をしていないため、両者の切り合い関係は不明である。トレンチの南端にはピットがいくつか認められ、建物群の存在を窺わせている。

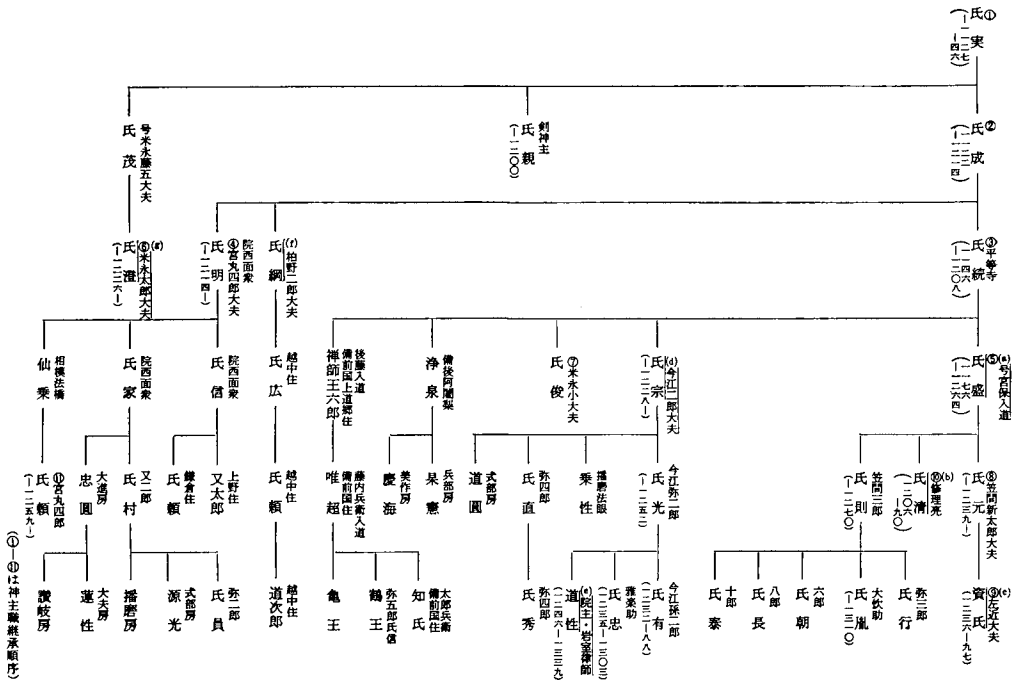
石川県内での中世の「館跡」の調査例は、加賀市勅使館跡、同永町ガマノマガリ遺跡などがあり、近年は松任市周辺の平野部を中心に急増している（宮保光明寺跡、笠間賢徳寺跡、徳光聖興寺跡、横江氏館跡、横江極楽寺跡、宮永ほじ川遺跡、長池キタバシ遺跡など）。現状では、「館跡」の定義もあいまいであり、溝ないしは土塁での区画のみでは、かなり遺跡としては普遍性をもつことになる。今後、調査例が増える中で考古学的に遺跡（遺構・遺物）の類型化がなされ、その歴史的意義が問われることになろう。

最後に本遺跡に係る文献史学の成果に触れておきたい。

古代から中世の手取川扇状地の開発をめぐっては、浅香年木氏の論考があり（「平安期における手取扇状地の開発と領主」『加賀三浦遺跡の研究』1967〔『古代地域史の研究』所収〕）、それによれば本遺跡一帯は、白山本宮神主職の上道氏の惣領系宮保氏が在地領主



第11図　中世成立期の加賀平野部の領主群
（浅香年木『古代地域史の研究』）



第12図　「上道氏次第」による上道氏系図の一部（浅香年木『古代地域史の研究』より）

化した場所にあたる。郡領道氏の後裔とも考えられる上道氏は、12世紀以降、中世成立期の加賀に形成された在地領主グループのうち最も有力であった林氏や富樫氏とともにそれぞれ競合しながら在地領主化し、手取川扇状地一帯の開発を推進したとされる。神主５代の氏盛は「宮保入道」と号し、12世紀末～13世紀半ばに活躍した人物であり、同期には「笠間」や「宮丸」へ庶流の分出が行われている。

本遺跡の形成期は出土遺物からすればまさにこの時期であり、軽率な文献史料との対比は慎しむべきであるが、当地への進出が考定される上道氏一派の動きと無関係ではありえないだろう。また、13世紀中葉以降、惣領系の宮保氏以外の庶流は、在地領主としての立場を保った形跡が乏しいとされ、この地域での上道氏の領主支配の維持が困難になっていく。付会な見方をすれば、本遺跡の空白（衰退）期の要因は、Ⅰ期の遺跡の評価も含めて、この辺の歴史的な事情を反映したものと考えることもできよう。

Ⅱ期（15世紀）の再興勢力がどんなものであったか、考古学的に考察しうる資料はほとんどない。ただこの段階は、笠間賢徳寺跡、小川遺跡、宮保光明寺遺跡など、宮保・笠間地区では「館跡」とも目される新たな遺跡の展開が認められる時期であり、それらとの関連で考えるべきである。

近年の松任市域のほ場整備事業に関連した遺跡調査は、手取川扇状地開発の歴史の一端を明ら

かにする上で重要な成果をあげつつある。浅香氏の論考以来、このテーマに関して考古学的資料に基づいた発言はほとんどないと言ってよい。今後、発掘調査報告が随時なされるだろうが、この問題を中世に限っても、館跡の構造の分析、遺物組成の検討などを通して、従来の単なる分布論にとどまらない議論が可能となろう。本報告はこの点で甚だ不十分な内容に終ったが、それをお詫びするとともに、今後の研究への期待を述べてまとめにかえたい。

引用・参考文献

浅香年木1976　「平安期における手取扇状地の開発と領主」『加賀三浦遺跡の研究』石川県教育委員会・松任町教育委員会

浅香年木1978　『古代地域史の研究』法政大学出版局

藤田邦雄ほか1988　『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

宮下幸夫ほか1990　「中世加賀の窯業研究－加賀焼の現状と課題－」『石川考古学研究会々誌』第33号　石川考古学研究会

なお、出土品については本センター垣内光次郎の教示を得ており、深く感謝申し上げる。

図　　版

第1調査区全景（北東から）

1～4区（北東から）手前が東堀

図版2　宮保館跡

1～4区（北東から）手前がＳＤ-01、奥が南堀

3・4区　南堀（北東から）

図版3　宮保館跡

5区　（西から）

1～7区　（南から）

図版4　宮保館跡

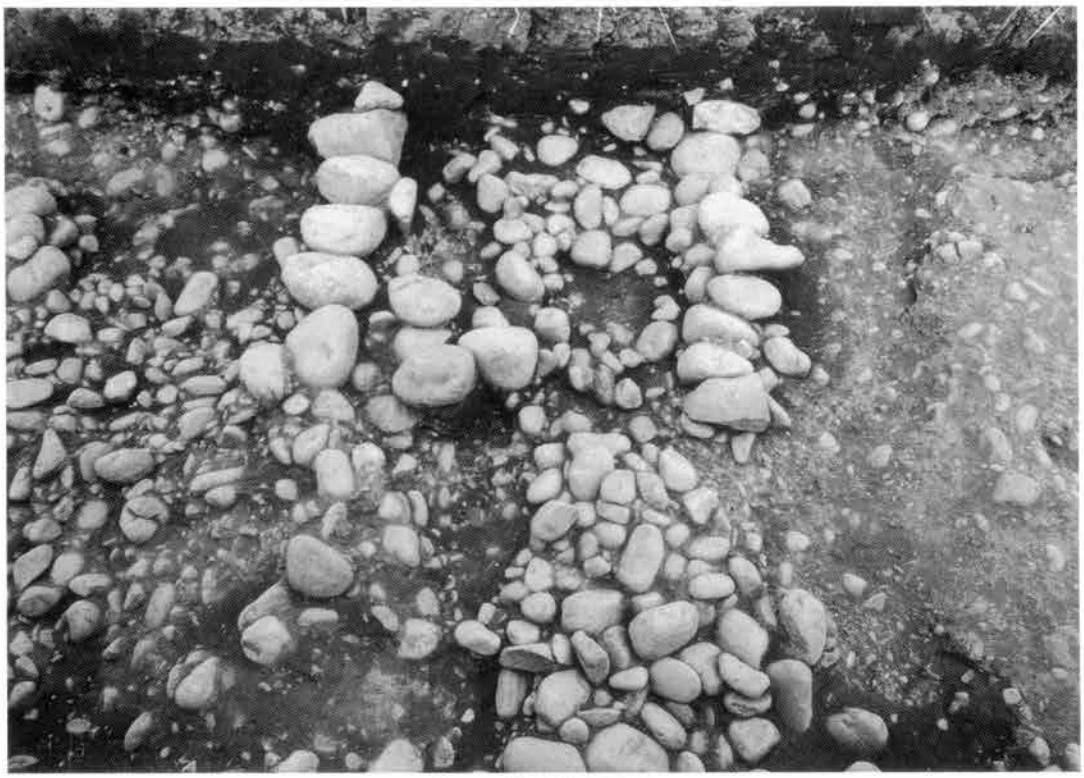
6・7区　南堀付近（南から）

7区　（北から）

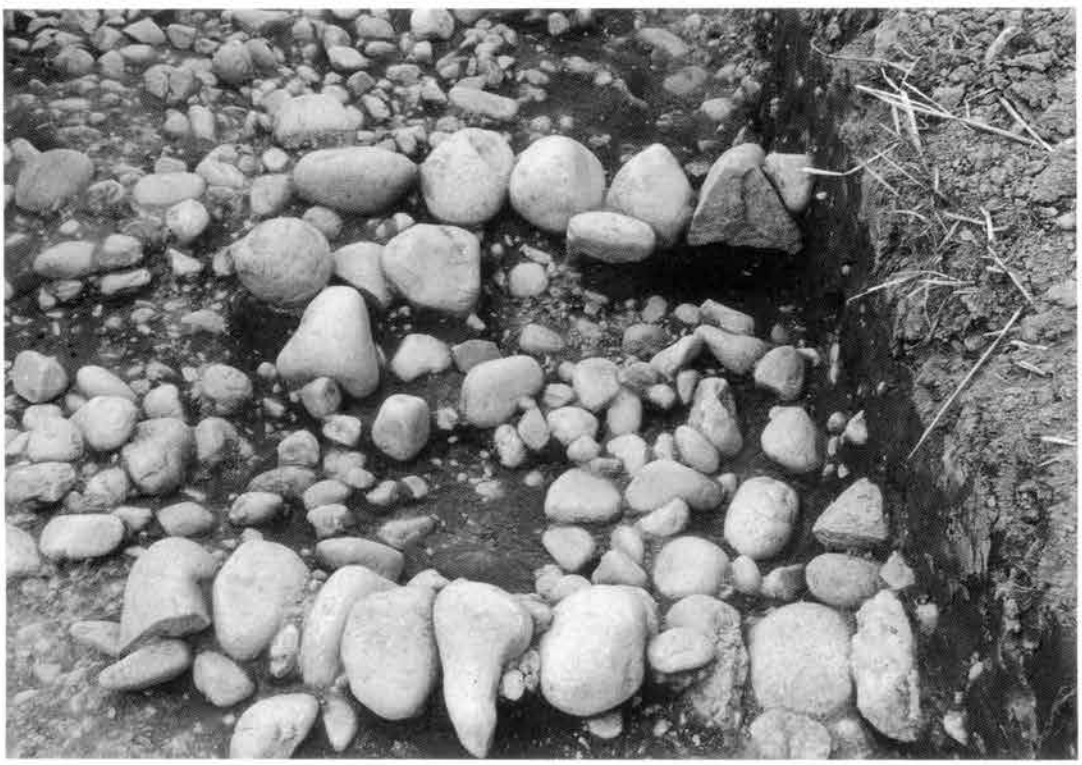
6区　南堀と塀跡（東から）

同上（東から）柱穴完掘後

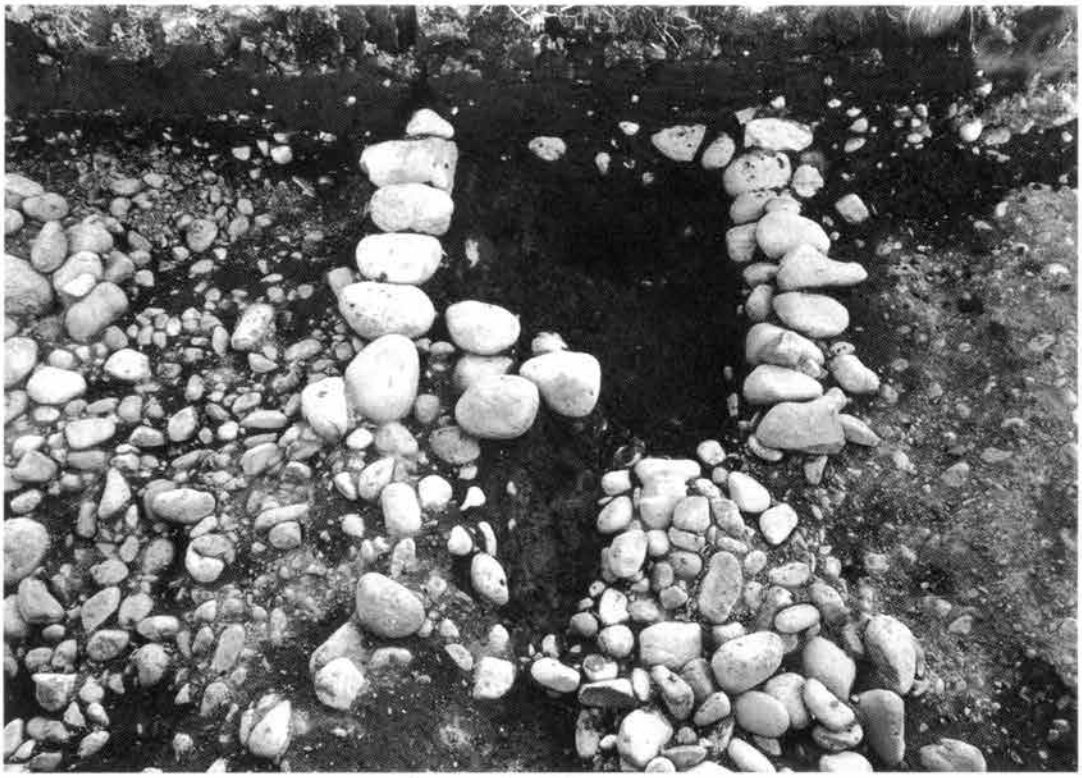
図版6　宮保館跡



7区　石組遺構（西から）



同　　上　（南から）



7区　石組遺構完掘（西から）

8～12区　（東から）

図版8　宮保館跡

8区　SK-02　（北から）

8・9区　SX-02付近上層（東から）

8・9区　ＳＸ-02付近下層（西から）

9区　ＳＸ-04内炭化物層（北から）

図版10　宮保館跡

10区　西堀　（東から）

同　上　断面　（南から）

図版11　宮保館跡

10～12区　（東から）

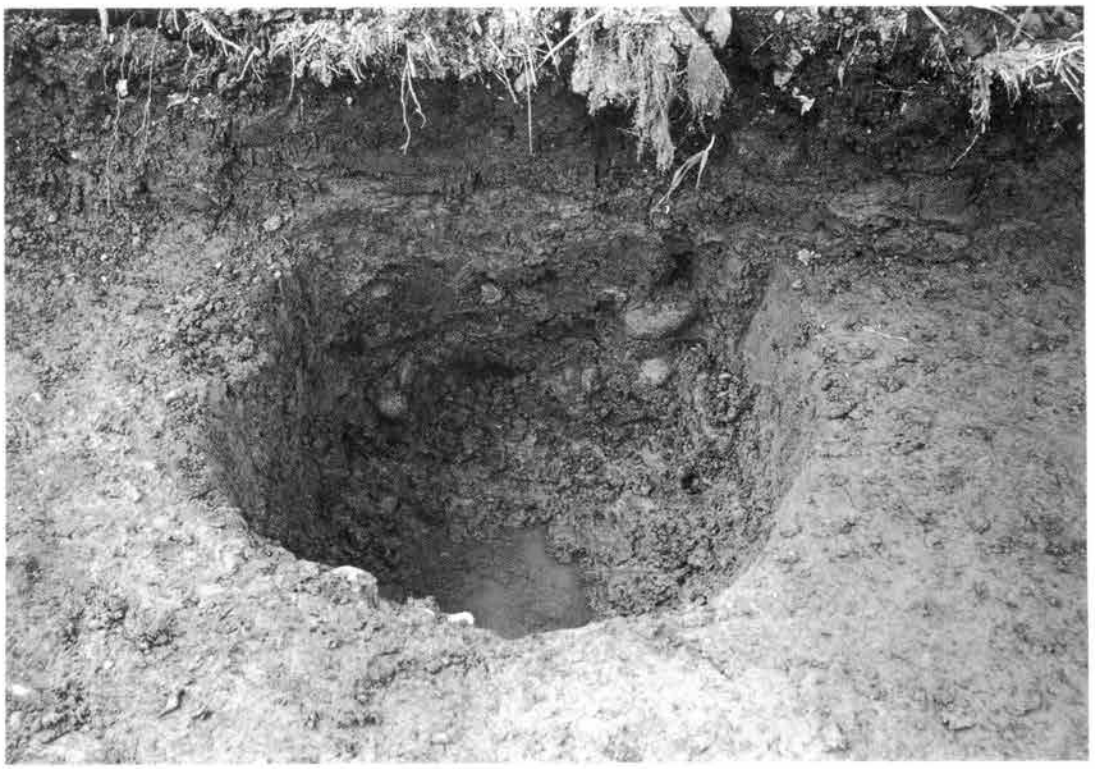
8～12区（西から）手前が旧河道（西堀？）

図版12　宮保館跡

範囲確認調査第3トレンチ、北堀確認（南から）

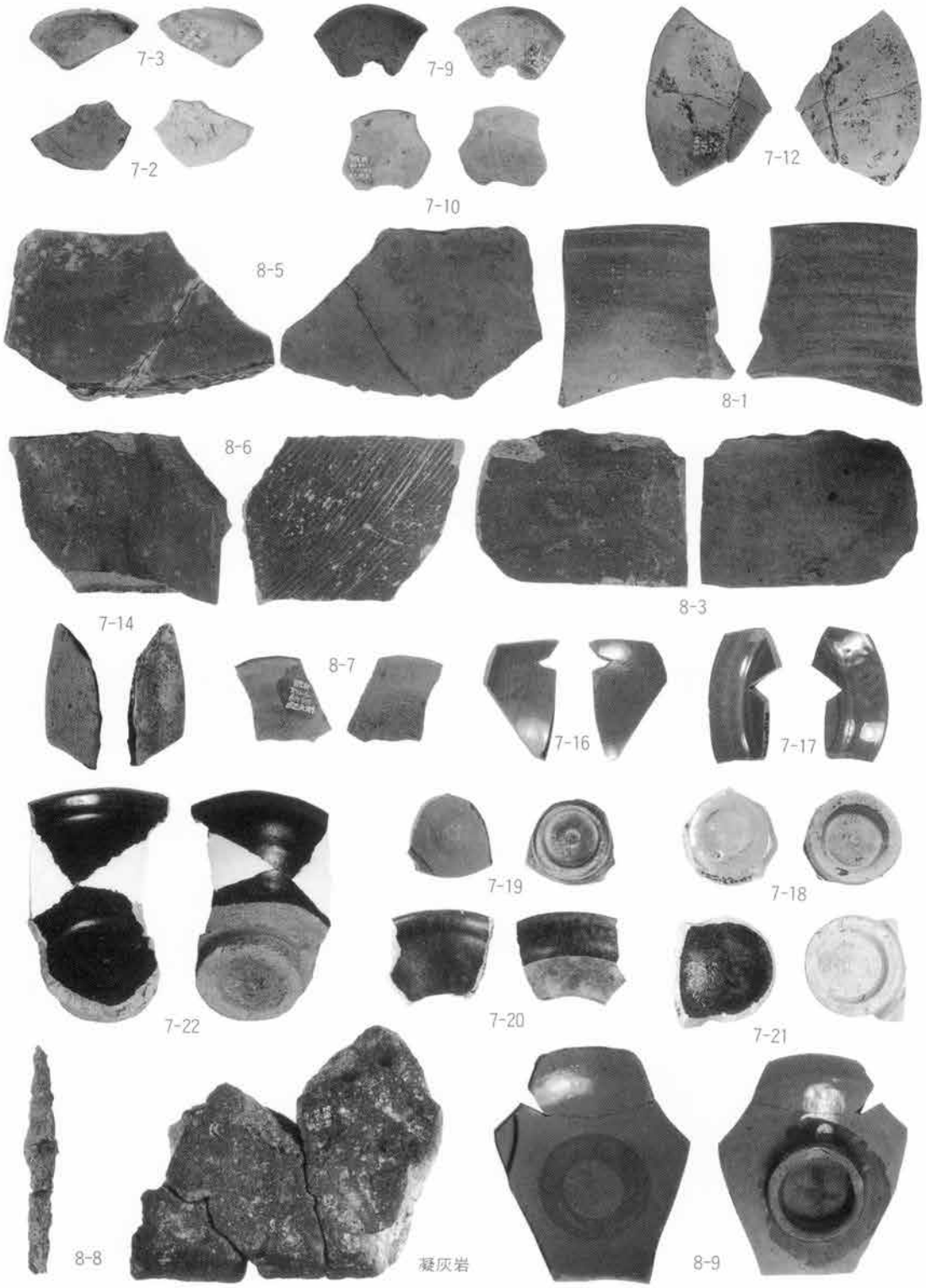
同　上　第2トレンチ、東堀確認（西から）

第2調査区全景（東から）



井戸状遺構（南から）

図版14　宮保館跡



出土遺物（約1／3）

宮　保　遺　跡　群

平成3年3月20日　印刷
平成3年3月31日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番㈹

印　　刷　北國書籍印刷株式会社
石川県金沢市香林坊2丁目5－1

©石川県立埋蔵文化財センター　1991
本文用紙：書籍用紙イエロー（中性紙）72kg